

---

Fate/zero justice to justice

紅雷

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

F a t e / z e r o    j u s t i c e    t o    j u s t i c e

### 【Nコード】

N 5 6 1 6 Z

### 【作者名】

紅雷

### 【あらすじ】

魔術師同士が己の願いを叶えるために殺し合う戦い・・・それが聖杯戦争。60年に一度のそんな「お祭り」前に殺人鬼に殺されそうになった少女こと久城伽耶くじょうかやは死を覚悟した時、殺人鬼が作った魔法陣から赤毛の青年を呼び出す。その彼の名は「ネギ・スプリングフィールド」・・・親子続いて英雄と呼ばれた人間であった。

act・0 一筋の希望(前書き)

fateキャラがネギま世界に来るのはよくあるけれど、ネギがfate世界に来るのは少ないと思います。書いてみました。ただし、彼はマスターではなくサーヴァントです。触媒云々の設定に関しては一応考えています。とりあえず、今回は様子見です。

> side・伽耶<

ああ、私もうすぐ死ぬんだ。

腰を抜かしてただ怯えることしかできない、肩までかかる髪と平凡な四角いメガネが特徴的な少女・・・久城伽耶くじょうがやは目の前の光景を見つめ真つ先にそう思考した。

部屋中には夥しい量の紅い雫によって発生している鉄の臭いが立ち籠めている。原因の大元を辿ればそれは彼女の最愛の家族であり唯一の肉親である母親に他ならない。つまり、伽耶の母親はもうこの世にはおらずいずれ朽ち果てる予定の抜け殻が体内を循環する赤い液体 血液を暴力的に抉られた腹部から垂れ流している状態なのだ。

「閉じよ閉じよ閉じよ閉じよーっ、繰り返すつどに四度 あれ、五度だっけ？えーっと、ただ満たされるトッキーをー、破却する・・・だよなあ？ うん！」

また、ソレ（・・・）を行なったのは古本を片手に服が血で汚れても気にせず意味不明な呪文めいた言葉を奇声を上げながら呟いている青年であり、現在冬木市で発生している無差別連続殺人の犯人・・・雨生龍之介であった。

「閉じよ閉じよ閉じよ閉じよ閉じよと、はぐい今度こそ五度ね。オーケイ？イエスアーム、オーケイ！！」

龍之介は先程間違えた部分を再び読み直すと自問自答し興奮を露わにする。

伽耶はその姿を絶望を感じた虚ろな瞳で無言で見つめ、ただ刻一刻と迫る死を受け入れる準備を心の隅で考え始めた。

「ねーねーお嬢ちゃん、悪魔って本当にいると思うかい？」

現実には「悪魔」という存在は間違いなくいないだろう。妖精とか天使とか神様だってきつといないに違いない。

なぜならば、この男が今まで殺してきた罪のない人間が誰一人として助かっていないのだから。

殉職したガタイの良い父親ならばこの程度のひよろつとした男など力業で倒して逮捕し、永遠に刑務所から出られないようにすることができるといふのとことん自分はないに違いない。

自分なりに母親を支えてきたつもりだったけれどこの状況ではもはや全てが台無しだ。このままでは身寄りのない自分は生きていても行く宛がない。死んでも死にきれない。

(・・・だけど、私の運を全て使ってもいい。この世が理不尽だけの世界ではないことを証明して欲しい)

こんな時に都合のいいヒーロー……（この際、顔とかの贅沢は言わない）が突然現れて自分を救ってくれたら、と恐らく叶わないだろう願いを私は祈った。

すると突然、右手の甲にまるで切り傷に消毒液をふりかけた時のような激しい痛みが走った。それは一瞬にして収まりはしたが本当に突然過ぎたので私の心臓の鼓動を急速に早めた。

（……何、これ。薔薇と茨みたいな……刺青？）

試しにゴシゴシと擦ってみるも垢を落とすように消える様子はない。正直、こんな状況でこんな微妙で不思議な現象に遭っても困ると思っただが、ふと吸い込まれるように自然と体が動いて青年がさつきから何かと呟いていた血の魔法陣の中へ入り込んだ。

そしてその瞬間、屋内だというのに尋常ではないほどの突風が吹き抜け眩い光が私の視界を支配した。反射的に顔を覆い光から目を守る。

「スゲエ！！c o o lだぜこりゃ……この本、マジパネエ！！」

呟いていた呪文が無意味でなかったことに青年が興奮しているのが聞き取れるが、私が彼のその声を聞いたのはこれが最後であった。なぜならば

「・・・それは良かったね。ついでにと言ってはなんだけれど  
『ご褒美』だ」

「ガハツ!!!」

聞き覚えのない第三者の声が聞こえると共に青年が殴られ壁へと叩きつけられ気絶したからだ。

警戒しながら恐る恐る覆っていた腕を退かすと、ローブを着た身の丈もある杖を持っている若い青年が立っていた。

彼は部屋を見渡し、この部屋で起きていた出来事を把握しようとしているようだった。

「・・・やれやれ、殺人現場に召喚されるとは思いもしなかったけどギリギリ間に合ったみたいだ」

偶然というか必然的に彼と目と目が合う・・・かなりのイケメンだ。また、その表情は非常に安堵してまるで見ているこちらさえ嬉しくなるように感じられた。

「立てるか、君？」

「は、はい・・・」

紅くなってしまった顔でドキドキしながら差し伸べられた手を握り私は立ち上がる。

そして問うた、「貴方は何者だれですか？」と  
う答えた。

彼は問いにこ

「キャスターのサーヴァント、聖杯の寄る辺に従い参上しました。  
問おう・・・あなたが僕のマスターですか？」

絶望したまま死ぬはずだった私にこの夜、一筋の『希望』と  
いう名の光が舞い込んだ。



act・0 一筋の希望（後書き）

無触媒召喚ではないのであすからず。オリ主の久城伽耶は一応、ステイナイトの初期原案の女主人公みたいな容姿です。ちなみに中学生です。

細かい設定とかはのちのち更新します。

感想よろしくお願いいたします。

女オリ主&サーバントステータス紹介(両者容姿公開ver)(前書き)

色々と設定の修正を行いました。これでもまだ削ったほうがいい  
という場合は一言お願いします。

32本から28本に回路を変更し、色々指摘された点を修正しま  
した。

12/27 精霊魔法の解釈を変更。マジレスやめて(泣)

## 女オリ主&サーヴァントステータス紹介（両者容姿公開ver）

<主人公>

久城伽耶  
くじょうかや

> i 3 7 3 7 9 — 3 0 0 6 <

魔術回路：28本 魔力：並

属性：地・水 戦闘方法：植物の武器化（例：薔薇 鞭）

特殊能力：????

14歳の主人公。中学生でクラスでは委員長をやっているほど真面目な性格だが何処か弱々しい正確の持ち主。考え事をよくして時々自分の世界に入り込んでしまうこともある。

父は刑事であったが中学に上がる前に事件で殉職してしまったため母親と二人暮らしであった。また、彼女の祖父もほぼ同じ頃に病気で亡くなっているので身寄りにはほほいさないに等しかった。なお、母親は魔術師ではないが存在は知っていた。

しかし、雨生龍之介によつて最愛の母が殺されてしまい生き残つても死んでも不幸であることには変わりない状況に追い込まれてしまう。死を覚悟しつつも救いを何処かに求めている彼女は最後の奇跡を願つて祈ると、突如として令呪を発現させることとなった。そして、何かに導かれるように母の血で描かれた魔法陣の中へ入るとキ

マスターのサーヴァントこと・・・『ネギ・スプリングフィールド』を召喚することになった。

元々、彼女の家は『九条』と呼ばれる魔術師の家系であり自然に存在するモノ・・・彼女の属性に現れている『地』と『水』などを扱った一族であった。稀に特殊な力を発言することもあるという。父親も一応は魔術師であったが才能が乏しかったためほとんど魔術を行なったことはなかったという。

また、彼女は祖父と父から秘密裏に魔術刻印の移植を受けていて、お守りと称して『壊れた懐中時計』のようなものを渡されている。

ちなみに雁夜とは過去に一度だけ出会っており、その際には伽耶は助けてもらったことがある。

<サーヴァント>

> i 3 7 4 7 1 — 3 0 0 6 <

クラス：キャスター

マスター：久城伽耶

真名：ネギ・スプリングフィールド

属性：混沌・善

筋力：B 耐久：B

敏捷：B 魔力：A++

幸運：C 宝具：A++

スキル：

カリスマ：B

軍団の指揮能力、カリスマ性の高さを示す能力。Bランクであれば国を率いるに十分な度量。元々、英雄の息子として注目されていたが魔法世界を救ったことによりさらにそのカリスマ性が上昇した。（実際、ウエスペルタイア王国の王として活動していたこともある）

心眼（真）：B

修練と鍛錬によって得た洞察力。危地にあって冷静に活路を見いだす戦闘論理。

幾度となく戦い続けたネギにの天才性が発揮される。

陣地作成：B

「魔術師」クラス特性。

魔術師として自らに有利な陣地「工房」を作成可能。

道具作成：C

「魔術師」クラス特性。

魔力を帯びた器具を作成可能。

対魔力：B

魔術詠唱が三節以下のものを無効化する。大魔術・儀礼呪法などを以ってしても、傷つけるのは難しい。

自己魔力生成：C

マスターに負担をかけることなく魔力を生成できる能力。単独行動に近い性能を持つ。

精霊魔法：A

精霊に働きかけて魔力を行使する技法。魔術師の世界から見れば魔法の域に近い。

魔術 ネギま魔法<<魔法という感じである。

## 宝具

マキア・エレベア  
闇の魔法：A \ EX 対人・軍宝具 最大捕捉 1 \ ????

直前に唱えた呪文を手元に留め、肉体に取り込み自らの霊体と融合させる闇の魔法。

取り込む呪文によって様々な能力が肉体に付加される。治療から攻撃まで幅広い。

千の絆：ミッレ・ヴァインクラE A + ??? 最大捕捉 1 ????

形状は小さな革のパスケース。差込口に自分の従者の契約カードを差し込んで呼び出すと、そのカードのアーティファクトを自分で使うことができる。契約相手のアーティファクトの特性も完全に再現可能。他人に貸し与えることも可能。偵察から決戦兵器まで数多く揃えられているため、ほぼ全てのクラスの特徴を持っていることになる。(IF設定によりネギま28巻においてのテオドラとの仮契約破棄は完全なる世界との戦いのことも考えてしなかったことになっている。ただし、その後の展開はほぼ同一である。)

たいいんどう太陰道：EX 対人宝具 最大捕捉 1～10人

気弾・呪文に拘らず敵の力を我が物とする闇の魔法の進化形究極闘法。展開には数十秒ほど必要だがその効果は絶大である。その気になればエクスカリバーさえ吸収可能。最大の切り札。

キャスターのサーヴァントとして召喚された英霊だが、実際は死んでいないため(ある年齢を境に不老になり、闇の魔法に完全覚醒した時に不死化した)、セイバーと似たような状況に置かれている。(つまり、霊体化ができないということ)

彼の正体は、ネギまの世界にて親子二代に続き英雄となった青年(元・少年)である『ネギ・スプリングフィールド』。原作から数年ほど経っており(容姿は大人ネギ)、魔法世界のための火星緑化プロジェクトがまだ進んでいる状況で明日菜は未だ礎として眠って

いる。教師としての修行が完了後にウエスペルタティア王国をMM  
元老院穏健派やアリアドネー、ヘラス帝国の協力の下で再建し、魔  
法世界救済計画を本格的に実行に移した。

f a t e世界の魔術知識をとある事情で知っており、その際に巻き  
込まれたトラブルが後に伽耶に召喚されるきっかけをつくった。聖  
杯には『 の役目からの解放』の願いがある。（本人曰く、た  
だの我侷に過ぎないという）詳しい経緯はのちのち解説予定。



**女オリ主&サーヴァントステータス紹介(両者容姿公開ver)(後書き)**

主人公の能力は幽遊白書の蔵馬のローズウィップみたいな奴を想像してください。

あくまで例ですので必ず登場するとは限りません。

次回も短いですがお付き合いよろしくお願いします。

a c t . i 把握と誓い（前書き）

一言の欄で意見を言ってくれている読者の方に感謝です。  
悪い点で色々言われるよりもモチベーションが上がります。

細かい修正はのちのち行います。

act・1 把握と誓い

< side・伽耶 >

「・・・キャスター・・・サーヴァント？」

助けしてくれた赤毛の青年は私に怪我がないか確認するといきなり中学では習わないであろう横文字を言った。

一応、大体の意味はわかるのだけれど・・・ええと「キャスター」はニユースの・・・じゃなくて、サーヴァントは確か 「奴隷」だったっけ？

・・・んん？「奴隷」？

訳も分からず頭に「？」マークを幾つも浮かべることになった私はこうしていても埒があかないと思い恐る恐る聞いてみた。

「あの・・・今のはどういう意味ですか？マスターとか奴隷の意味の言葉を聞いたような気がするんですけど」

「え、ああ・・・ごめん、今のは定型文みたいなものでね。普通なら「はい、そうです」みたいなこと召喚者の魔術師にすぐに受け答えられるはずんだけど・・・正規の召喚じゃないみたいだから今のは不味かったね」

「しよ、召喚！？それに魔術師！？」

今度はあからさまにオカルト的発言が彼の口から飛び出した。

心霊現象とかのホラー系や魔法・魔術といったオカルトファンタジー系をあまり信じていない私にとってそういった言葉は受け入れ難い抵抗感がある。

しかしながら、彼が現れて自分を救った今までの経緯から認められずにはいられない状況にあった。

「まあ、とりあえず落ち着いて。詳しい話はちゃんとするし君の身の安全は僕がしっかり保証するから」

「は、はあ・・・」

確かに今強引に聞き出している暇などなかった。現状把握は後でいくらでもできる。

一先ず私はこの殺人現場となってしまった家と母の死体と憎き殺人犯の青年をどうにかしなればならなかった。・・・ああ、やることが多すぎて頭が混乱する。

額をおさえて冷静さを取り戻そうと試みるも色々あり過ぎてなかなか思うように頭のオーバーヒートは止まらなかった。

そんな状況を見かねてかキャスターと名乗った青年は私に血で汚れていないソファで休むように言い、電話の場所を聞いてきた。

「・・・何をするつもりなんですか？」

「なに、簡単なことさ。」

警察を呼ぶ

ズコッ！！と思わずソファーから転げ落ちそうになった。そりゃあ、  
妥当な行動ですけれども！！

「その前にその格好をどうにかしませんか、怪しまれますよ・・・」

ローブのままでは不審者に見られる可能性がある。せめてまともな  
格好に着替えて欲しいものだ。

「大丈夫大丈夫、ローブを脱げば・・・ほらね」

「あ、スー・・・ッ？」

意外にも中の服装はまともだった。というかまとも過ぎた。そもそも  
も何でスーツの上にローブ？  
全く訳が分からない。

「それも追々話すよ、だから安心して」

私の疑問が余計に増えてしまった中で彼は淡々と電話越しの警察に

事情を話し十数分後、警察をおさらばすることになる愛しの我が家に招き入れ冬木市連続殺人事件に呆気なく終止符を打った。

・・・しかしそれよりもキャスター（そう呼んでくれと言われた）あなたは、内容に嘘を含んでいるのに（主に素性）どうしてそんなスラスラと説明できるんですか？作り話得意なの？

またしても疑問が増えてしまった。

それからの話をしよう。

警察に事情聴取を受けた二人は知らない間に懸かっていた龍之介の懸賞金と被害者遺族からの謝礼金を手に入れ両親と祖父が残した遺産を整理すると、殺人現場になってしまった家から必要なものを持ち出した後、祖父が趣味のために建てたという円蔵山上のアトリエ

付きの別荘へと移り住んだ。

幸いにも学校からそう遠く離れていないため、伽耶の学校生活には何ら支障をきたす事は形だけはなかったが、親を共々失い精神的にも辛いだろつということとで長期期間の停学をさせることにした。どうせ義務教育なのだから受験対策さえ大丈夫ならば自宅学習でも大丈夫だろつというキャスターの見解も考慮した結果である。ツッコミたい所満載だがキャスターの生前(?)の職業上勉強には全く問題はなかった。

また、移り住んで手始めにキャスターは待たせるに待たせてしまった『説明』を行うための安全な場所を確保もとい構築するために、彼が知りうる限りで強力な『侵入者感知』『特定対象の強制的魔力抑制』などの機能が盛り込まれた結界を固有スキルの『陣地作成』を用いて辺り一帯に張り巡らせた。

この時点ではまだ聖杯戦争は始まりすら告げていないがキャスターという立場上、自らが優位に立てる拠点・陣地を開戦前に早急に作成しなければならぬ。もし出遅れでもして陣地作成前に瞬殺されるようなことがあれば魔術師として恥ずかしいものがある。だからこそ、気合を入れて自分達だけの『工房』作成に取り掛かった。

そして後日、やっとのことで完成した『工房』にてマスターの伽耶とキャスターの本格的に初めてとなる説明話がリビングの丸テーブルの上で繰り広げられることとなった。

「随分と説明を待たせて付き合わせてしまったね、マスター」

「いえ・・・こちらこそ葬儀から財産管理までわからないことだらけだったから本当に助かりました」

身寄りのない伽耶の保護者としての立場を構築するのにも実は言う  
と結構時間がかかった。

暗示で人は直接騙せても、書類などは上手く偽装しなければ確実に  
怪しまれる。故にそちらの書類作成が足を引っ張り工房作成が遅れ  
てしまった。

「いいんだ、あの状況で優先すべきことはマスターの今後の生活を  
保証することだったから」

彼は自分で入れた紅茶の香りを楽しみながら笑顔で私にそう言った。  
本当に書類作成から紅茶のおいしい入れ方まで何でも出来る男なん  
だなと感心してしまう。

ついつい自分も顔をほころばせ一杯紅茶を口に含んだ。

「・・・それはそうとマスター、あなたの安全を優先して話せな  
かったあの時の質問の答えなんだけど」

「いよいよ、溜まりに溜まった疑問の答えが得られるのか。

殺されずに済んでも未だに消えぬ恐怖感、そして始まるうとしてい  
る何かに対する危機感が今もこっぴどして心の中で蠢いている。それを  
少しでも軽減したいという気持ちでもう一度あの時のように私は彼  
に問うた。



「キャスター、それにサーヴァント・・・魔術師についてと、今私  
が置かれている状態について教えて下さい」

「わかりました、順を追って説明していきましょう・・・ま  
ずはマスターの置かれている状態からです。はっきり言いますと僕  
達は今、『聖杯戦争』という魔術師同士の殺し合いに巻き込まれて  
います」

真つ直ぐ私の瞳を見据えると彼は淡々と私の疑問を解きほぐす言葉  
を紡ぎ始めた。

聖杯戦争、それは七人の魔術師が万物の願いをかなえる  
願望器『聖杯』を奪い合う争いのことである。

ただ殺し合うのではなく、彼らはそれぞれ自分が使役するサーヴァ  
ント 魔術師の世界において最高級の使い魔 を召喚し覇  
権を競わせるのだ。

彼らは最後の一人になるまで戦い続け己の願望を叶えるべく策略を  
ぶつけ合う。そして最後に残った者だけが聖杯を手にして願いを叶  
えるのだという。

また、サーヴァントは召喚される際に七つのクラスを与えられてこ  
の世に現界する。その七つのクラスとは

セイバー・・・剣士の英霊であり「三騎士」の一角。バランスが取  
れた能力を持っているため「最優のサーヴァント」と称される。

アーチャー・・・弓兵の英霊であり同じく「三騎士」の一角で、高い単独行動スキルと射撃能力を持つ。

ランサー・・・槍兵の英霊であり「三騎士」最後の一角。最高の敏捷性と高い白兵戦能力を持つ。

ライダー・・・騎乗兵の英霊であり騎乗スキルがA+以上である英霊が該当し、高い機動力と強力な宝具を数多く所有するという。

キャスター・・・魔術師の英霊であり魔力に特化しており、全サーヴァント中最弱とされるも自身のフィールド下では他のサーヴァントと互角に戦うことができる。

バーサーカー・・・狂戦士の英霊であり「狂化」の付加要素が付くクラス。魔力消費量が高いがその分ステータスが強化される。

アサシン・・・暗殺者の英霊であり予め召喚される英霊が決まっており、マスター狙いが得意である。

の以上であり、彼らはマスターの令呪によって従わされることになる。当然、彼らにも聖杯に願う願いを持っていたりするがマスターなしでは叶えることも不可能である。

「英霊というのは過去・現在・未来の時間軸から切り離された存在なんだけど、聖杯戦争において召喚されるのは一般的に過去の英雄だけだ。何故だか分かるかな？」

「えっと、召喚の為の触媒がわかるからですか？」

「正解だ。未来にも英雄と呼ばれる存在はいるだろうけれど、彼ら呼び出すための聖遺物がわからない以上召喚するのは無理だ。だから基本的に過去の英霊・・・例えば神話に書かれている存在を参

戦する魔術師は召喚する」

「ということはキャスターも過去の英霊？」

予想が正しければそうなんだろうけど、残念ながら彼は首を横に振って過去の英霊であることを否定した。ということは……？

「こういうことは珍しいというかありえないはずだけどね。

僕は過去の英霊じゃない、未来の英霊なんだ」

「で、でも、触媒がわからないって……」

説明してくれたことと彼の今言ったことは矛盾している。

触媒がわからないというかそもそも触媒なんて用意した覚えはないのに、何でよりにもよって未来人が召喚されてしまったのだろう？  
何かしら原因があるはずだけど、全く心当たりが見つかからない。

「いや、マスターはあの時僕を召喚することができる『触媒』を持っていたはずだ。それが何であるかも大体見当がついている」

「……持っていたもの、身に付けていたもの      あっ！！！」

一つだけあった。

祖父が私がまだ幼かった頃にくれたお守りがあった。『壊れた懐中時計』みたいな物だったけれど不思議とデザインは気に入っていた。

祖父が好きだったから今まで肌身離さず身に付けてきたけれど、まさかこれが

内ポケットから手のひらサイズの懐中時計のようなものを取り出しテーブルに置き、キャスターに見せると彼は大きく頷き口を開いて言った。

「 やっぱり、カシオペアか」

「 カシ・・・オペア？」

それがこの懐中時計もどきの名前なのだろうか。

どうやらキャスターはこれをよく知っているようだし、聖遺物（触媒）と考えてよいのだろうけどこれが一体何なのかを詳しく聞かせてもらいたい。

「 本来の機能はもはや失われてしまっているがそれは、実を言うところ『タイムマシン』に該当する」

「 タイムマシン！？これがですか！？」

想像していたタイムマシン像と全く違った。

てつきり、机の引き出しに隠されているようなやつか木でできた箱みたいなを想像していたけど・・・って、これはアニメの観過ぎか。未来ではこんなコンパクトな存在になっているんだと思わず驚いてしまった。

「未来ではこれが開発されているんですか？」

期待に胸を膨らませ近未来の世界のことを尋ねる。が、しかし彼はまたもや苦笑して補足説明をした。

「『僕がいた世界』ではね。残念ながら、この世界じゃ恐らく開発されることはないだろう。100%ということはないけどさ」

こことは違う世界・・・SFでも有名な平行世界>の英雄だというキヤスター。

彼は何故祖父がカシオペアという平行世界の物を持っていたのか経緯を一から説明してくれた。

「あれはまだ僕が修行先で働いていた頃の話だった」

中学2年の終わり頃から受け持っていた彼の教え子達の卒業まで残り数ヶ月となっていた時・・・突然それは起こったという。

突如として飛来したらしい謎の物体、というより魔法少女モノのアニメに登場しそうな杖はキヤスターが仕事に疲れて眠っていた間に生徒を洗脳し強制的に魔法少女の姿へと変身させていたのだ。

同僚にしてかつてのライバルだった少年に叩き起され対処を始めた

キャスターは協力してくれるであろう彼の師匠に助けを求めたのだが時既に遅し・・・彼女もとくに魔法少女に変身させられていた。性格もハイテンションなっていた。

しかも相手は数の暴力で攻めてきた。一般人に秘匿しつつ男性陣は本当に涙目状態で懸命に戦い続け一人また一人と倒れていった。流石は元々魔窟の学園だった。

教え子を傷つけない気持ちゆえに戦うことにキャスターは葛藤する。でも自分が何とかしなければ被害は拡大し続け修行先は魔法少女という巫山戯た魔窟と化してしまうと使命感に突き動かされるように立ち上がり彼女たちに向き合った。・・・本来彼女らと一緒に高校に居れたはずの人物との約束を思い出しながら。

「彼女を犠牲にしてまで手に入れた平和な世界　それをどうしても僕は守りたかった」

生徒を気絶させては優しく横にならせ続けたキャスターは激闘の末、満身創痍の状態でイカれた杖を持つ師匠と相對する。

「よく粘りますね。ルビーちゃん、狙う相手を間違えたかもしれない」

「・・・ふざけるな、女装は学園祭の仮装だけで十分だ。他をあれ」

「でも、髪伸びた貴方の姿は・・・じゅるり　立派な男の娘ですよ　傷だらけの男の娘・・・ハアハア」

何かそう仲間に指摘されたことがあるという彼は良からぬ気配を感じて体を震わせる。

実際、その年に行われた文化祭では何時の間にか演劇で女性役をやられた覚えがあつたのだ。それも相手を言葉責めするという役だつたりした（内容は吸血鬼モノ）。

正直、逆はやめてほしかった。

「・・・くそ、こうなったら」

師匠諸共攻撃して引き剥がし破壊するしか方法はない。

これは師匠の吸血鬼としての再生能力を利用した方法だが、やりすぎれば取り返しのつかないことになるだろう。

「それでもやるしかない！！」

覚悟を決めて高速詠唱を展開し、目の前の騒ぎの元凶に操られた師匠を見据えると身の丈の何倍もの長さを持つ雷の槍を構え飛び上がる。

まとも喰らえば一溜りもない一撃が放たれようとした時彼らは現れた。

「 後ろに下がれ、少年」

「　　ッ!？」

自分の背後にはいつの間にか赤い服を着た二人組の男女がいた。そして、男の方は黒塗りの弓を構え矢の代わりに幾重にも曲がった短剣を師匠に向けた。

その瞬間・・・光が視界を支配し、目を開けた時には既に師匠の洗脳が解けていたのだ。

「結局、事件は『この世界』の第二魔法・・・平行世界の運営の使い手にして杖の持ち主によって解決したんだ。　　だけど、話はまだここで終わりじゃない」

ここからが本題だった。

かくして連続魔法少女化事件は丸く治まったものの、平行世界からやって来た二人組がいざ帰ろうとした時に問題が発生した。

ちょうどその頃、生徒のマッドサイエンティストと共同研究・開発していた航時機カシオペアの改良型のテスト機を持っていたキャスターは二人とその場にいた皆よりも近くで別れを告げていたのだ。

元々トラブル吸引体質だったキャスターとすっかり属性を抱えた赤い服の女性、加えて幸運がEランク並みの赤い外套の男性が揃ってこの状況で何かが起こらないはずがなかった。

「・・・つまり何が言いたいかと言うとね」



「巻き込まれたんですか？」

「うん・・・」

それもカシオペアの誤作動もあつて彼らが元々いた時間軸から30年近く離れた時代に飛ばされてしまったのだという。二人にとつては元の世界だというのに前途多難である。

あとついでに上空からの自由落下も三人でしかけたらしい。

「唯一、杖で空を飛べる僕がどうかして二人を助けたんだけどさ・・・着地点がね、この別荘の庭だったんだ」

当然何事だと家の人が飛び出してくるわけで・・・その飛び出してきた相手が伽耶の祖父にして、潜りの魔術師だった久城桐春くじょうきりはるだったのだ。

「僕の世界の常識と違ってこの世界の魔術師は互いに研究成果を秘匿する存在だったから二人はすぐに彼を警戒したんだ。けれど、彼は親切にもこちらの事情を受け入れてくれて泊まる場所まで用意してくれたんだよ」

わかる、祖父はそういう人だった。

ちゃんとしつかり話を最後まで聞き届け、考えて考えて最終的に相手の言葉を受け入れる。また、命の大切さを誰よりも理解していた

ので私は尊敬していた。

「時代は違っても霊脈の質は高かったらしく、帰るために必要な魔力の確保もそんなに時間がかからなかった。巻き込まれたのは不幸とはいえ、辿り着いた場所の運が良くてなによりだったよ」

助けてくれたお礼として（二人が言うには等価交換）、語作動を起こして使い物にならなくなった改良型1号機は『持ち主に危害を加える相手の自由を奪う』半ば呪いめいた内容の術を施し、二号機に関しては『10秒以内の時間跳躍が可能』という仕様だったので魔術礼装代わりに使えると考えてプレゼントした。（ちなみに、勿論残りの三号機は帰還用の仕様である）  
そしてめくるめくる時代は過ぎていき、彼の孫であった伽耶へと1号機を用いたお守りは受け継がれた。

と、以上がキャスターが召喚される経緯となる。

「予想外の結果とはいえ、結果的にマスターの命を守れたから良かった。桐春さんに感謝しないと・・・」

祖父が築いてくれた縁は世界も時も越えて私を守ってくれたのだ。聖杯戦争抜きにして非常にありがたかった為、思わず瞳から雫が溢

れた。

「マスター、君をとんでもない事に巻き込んでしまってますまないと思う。だが僕は彼が守ろうとした君を責任持って必ず守り抜こう」

「キャスター……」

彼は私の隣に立つと膝をついて手を握り言う。その言葉と瞳に嘘偽りは全くないように感じられた。

「キャスターのサーヴァント、ネギ・スプリングフィールドは全身全霊をかけてマスターである久城伽耶をお守りすることを今ここに誓います」

「はいっ！！よろしく願います！！」

涙ぐんだ声で私は彼の誓いの宣言に力強く答えた。

> side out <

> side・キャスター<

涙で赤く腫れたマスターは泣きつかれたのかソファーに横になるとすぐに眠ってしまった。この時期は特に寒いであろうから毛布をさりげなくかけてあげる。

「この歳で色んなモノを背負ってマスターは辛いだろうに・・・」

優しく髪を撫でてあげ彼はやるせない気持ちで言葉を口にする。また、彼は彼で疑問を感じていたことがあったりした。

「（思い返してみると、何故あの時僕は無理矢理元の世界の戻されたのだろうか）」

赤い服の二人がいた時間軸に戻ってから元の世界へ帰るという予定であったのに、自分だけ途中で引っ張られるように引き剥がされて気がついたら帰還していた。

おそらく二人は念入りに調節したおかげで無事に帰還できただろうが、どこか解せぬ点が自分の中に残った。

「　　まるで、世界に・・・いや、『時間』に拒絶されたような気分だ」

この不思議な気分の意味を彼が真に理解するのはまだ先のことになる。

一先ず彼は、自分の陣営以外の情報収集の準備を伽耶が寝静まっている間に行うことにした。

> s i d e   o u t <

act・1 把握と誓い（後書き）

さり気なくステイナイトフラグ？

それはともかく、キャスターは原作ネギが結局明日菜を礎にして計画を実行に移して後悔しつつ戦い続けたいたという設定です。他のシリーズとは繋がりはありませんのであしからず。

次回は麻婆とトッキー陣営とキャスターの陣営調査編です。

次回もお楽しみに。

act・2 命の重圧（前書き）

至らない点もございますが、どうか応援よろしくお願いいたします。  
下手ですがキャスターの容姿を紹介のページに追加しておきました。

12/23 ケイネスに対する警戒レベルを少し上げました。

では、張り切ってどうぞ。

## act・2 命の重圧

> side・言峰<

「アサシンに続いてキャスターの現界が確認された、か・・・

薄暗く僅かな明かりだけが頼りなどある邸宅の地下室にて二人の男が机を挟んで向かい合っていた。

その二人とは父の璃正から数日遅れてもたらされた情報を躊躇なく伝えたアサシンのマスターこと言峰綺礼と、優雅に自信をもって椅子に腰をかける男・・・綺礼が父からの命を受けて水面下で共闘を図っている相手である遠坂家当主こと遠坂時臣である。

聖遺物が届く予定の日まで残された時間はもはやないに等しい中で二人は今回の最新情報について深く吟味していた。

「マスターの名乗り出は未だ確認されておらず、またキャスターに関する情報は依然確認されてはいないようです。いかがなさいますか導師」

「引き続き調査を続けてくれ綺礼。聖杯戦争はまだ始まっていないが開戦前にある程敵サーヴァントの情報を仕入れておかなければ上手く立ち回ることすらできないだろうからな。それが最弱であるキャスターであつてもだ」



「了解しました。                   しかし、妙ですね・・・最弱のサーヴァントとされるキャスターをこのタイミングで召喚するとは正気の沙汰とは到底思えません」

普通は自分に優位になるように三騎士クラスを優先的に召喚しクラスの枠を埋めていくことで参戦するマスターに対しプレッシャーをかけるのが得策なのだが、今回のように序盤から前線で戦うのには適さないサーヴァントであるキャスターを召喚してしまうのは余りにも無謀のように思えた。

キャスターのサーヴァントの力量がわからない以上、一方的に決めつけることは良くないのかもしれないがそれにしても実に奇妙だった。

「衛宮切嗣に関する情報から予想してキャスターを召喚してもおかしくはないと思いますが、御三家であるアインツベルンが本気で勝ちに行くのならそれを許すはありますがありませんね」

「ああ、その通りだ。アインツベルンの執念は尋常ではない、確実に三騎士クラスのいずれかを確保してくるだろう」

『時計塔』だけではなく外界から接触を断絶しているアインツベルンの影響力は計り知れない。自分達のように協力者の力も借りずに予想もしない強力なカードを揃えてくることだろう。衰退したマキリよりも遙かに手ごわい相手と改めて認識した。（勿論マキリも手ごわいのに変わりないが）

それはさておき、脱線してしまった本題のキャスターについては二人は話を再開する。

「こちら先程、『時計塔』から最新の情報を受け取ったんだが・・・かのロード・エルメロイが用意した聖遺物らしき小包が紛失していたそうだ」

「それはまた・・・しかし、すぐに別の聖遺物を用意したことでしょう。彼の『時計塔』での噂を聞けばプライドが高いようですし」

「もしかしたら紛失した聖遺物の小包は彼の対立勢力によって奪われたのかもしれないな。となると、その奪った魔術師は当然

」

「「聖杯戦争に参加する」」

奪われた聖遺物がキャスターの触媒となるものであったかは定かではない。しかし、ありえなくもない考えだった。

ケイネス・エルメロイ・アーチボルトこと、ロード・エルメロイが果たして本当にキャスターを呼びたかつたかについてはこの際考えないことにして時臣は顎の髭を撫でながら思考する。

「（御三家は脅威というのは聖杯戦争に参加するマスターにとって共通認識だ、それはいい・・・問題は外来の魔術師の力量がどの程度かだな）」

遠坂、マキリ、アインツベルン、言峰綺礼、ロード・エルメロイ以外のマスターは残り二人。二名の素性をこれからはつきりさせておかなければ遠坂の悲願たる『根源』への到達に要らぬ支障をきたしてしまう。呼び出す予定のサーヴァントの強さは他のサーヴァントに比べて極めて異常と言えるほど強いのは十分承知で自信もある、だが下手に慢心しすぎては思いもしない事態が起きてしまえば元も子もない。

だからこそ後の憂いを絶つためにもより一層の調査を依頼することにした。と、ここで一旦話を彼は区切る。

「ところで綺礼、魔術関連以外で何か変わったことはなかったか？」

「と、言いますと・・・？」

「・・・いや、詰まるところ世間話のようなものだ。聖杯戦争前とはいえ、魔術師が魔術のことばかりに固執して周りが見えなくなるのは良くないと思ってね」

ようは魔術が絡まない日常からおかしな点を見つける間違い探しか宝探しのようなものだ。息抜き程度にはちょうど良いように思われる。特に問題がなかるうとどちらにせよ休憩には良いのだ。

「そうですね、それでしたら変わったというより良いニュースが一つだけあります」

「ほう、言ってみてくれ」

「数日ほど前に遡りますが、冬木市を騒がせていた連続殺人犯が捕まったそうです」

既に30名以上の犠牲者を出した無差別連続殺人事件については時臣も綺礼も小耳に挟んだことがある。聞いた当初はただの快樂殺人者でそのうち捕まるであろうと考えていたのだが、なかなか捕まらずに続いたので冬木市のオーナーとして動こうか動かまいか悩んでいたのだ。

しかし、自分達は聖杯戦争の準備中なので下手に動いて目立つわけにもいかず、結局は見逃してしまっただけの経緯があった。

「何でも最後の犠牲者宅でその家の知人男性が取り押さえたとか・・・」

「その家の持ち主はやはり亡くなってしまったのか？だとしたら裏から手を回してでも何かするべきだったな」

せめて最後くらい犠牲なく解決して欲しかったものだ。魔術師ではなく一人の市民として時臣はそう思った。しかし、綺礼は言った。

「いえ、幸いにもその家の中学生の一人娘だけは難を逃れたそうです。現在の行方は定かではありませんが親類かその知人男性に引き取られていることでしょう」

「そう、か・・・その娘には悪いことをした」

聖杯戦争にとられすぎた結果が生み出した惨劇のようなものだと  
犯人でない自身にも責任を感じて彼は瞳を閉じ、犠牲者の冥福をた  
だ祈った。

よもやその生き残った少女と聖杯戦争で戦うことになる  
とは思っても知らず……

> s i d e o u t <

> side・伽耶<

お前はアイツ（・・・）に再び役目を押し付けてしまったことを後悔しているのか？

ああ、そうだ。自分が巻き込みさえしなければ何時までも彼女は笑っていられただろう。

一人のために多くを犠牲にしてか？アイツがいなければ世界は・・・

わかっている。しかし、僕は父さん達の努力を無駄にし彼女をまた1000年の檻へ閉じ込めた。青春を奪った。

ならば今、お前は何を願う？王としてではなく人として何を・・・

それは

「んんっ………」

何か重大なものを夢で見たような気がした。

けれど、最後の最後で残念ながら私は息苦しさを感じて喉を唸らして目が覚めてしまった。原因は毛布へ潜りすぎたことだった。

夢の内容で微かに覚えているのは金髪の誰かが浮き上がった地の上で赤毛の青年に何かを問うている場面で、少なくとも赤毛の青年が誰であるのかはよくわかった。間違いなくキャスターだろう。具体的にどういう状況で二人が話し合っていたのかは、まあよくわからなかったが。

「あっ……もうこんな時間」

気が付けば何時もならば授業を受け始めている時間帯だった。

無理もない、あの事件以来落ち着いて眠ることができたのは今回が初めてだ。幸いキャスターが長期間休めるように取り計らってくれたので学校は気にせずにいられるも、まだ心の何処かで受け止めきれない何かがあった。

多分だとは思うが母の死せいだろう。唯一の肉親を失うということはまだ幼い自分にとってそう簡単に受け止めきれないことなのだから

「キャスター・・・？」

昨夜、改めて自分を守ると約束してくれた彼の姿が見当たらず呼びかけてみるもまるで反応がない。

基本、サーヴァントは眠らなくても大丈夫だと聞いていたが元は人なので睡眠をつい癖でとっってしまうのかもしれない、そう思った私は彼が眠っていきそうな祖父の寝室へと足を運ぶことにした。

すると案の定、キャスターはそこに居たのだが                    ベットがあるのにもかかわらずデスク前の椅子で腕を組むようにして眠っていた。ついでに目の前にはノート型パソコンもある。

しかもだ                    どういう意味があるのか腕の中には魔法少女が技を行使するために用いるためのステキががちりと挟まれている。とてもシニールでどうコメントしていいやら・・・。

「                    ふう」

「!？」

・・・などと考えていたらドリーム空間からキャスターが帰還した。何というタイミング。



「あ、おはようマスター。昨日はよく眠れた？」

「はい、一応は………ところでキャスター、寝たままその腕の中の杖を抱きしめていたけれど一体それは何ですか？」

もし趣味とか言われたらドン引きなんだけれど……

「これ？ああ、これは歴とした『宝具』だよ。力の王笏スケプトルム・ウィルトウアーレというアーティファクトでね、電子世界へダイブできるんだよ」

その『宝具』をカード状にして仕舞い込むと手招きしてノートパソコンのディスプレイの覗くように言った。疑いを少し持ちつつも覗いてみるとそこには数人の男性に関するデータが羅列されていた。これは……

「今のところ分かっている聖杯戦争参加者だよ。全員というわけではないけど大体は既に出揃っている」

御三家の遠坂・アインツベルン・マキリの他に参加予定の2名に関するデータをキャスターは徹夜でダイブし続け掻き集めていたのだ。それだけではない、超遠距離偵察が可能な宝具だという『渡鴉の<sup>オクルス・</sup>見』<sup>コルウィヌス</sup>に細工を施した上で魔術師が集う『時計塔』へ送り込み、彼らの協力者から情報を『直接』手に入れていたらしい。直接とはどういう意味か聞こうと思ったが身の危険を感じて諦めた。

本当にそんなことしていいのかなと一瞬思いはしたが、生き残るためには必要なことだとキャスターが言うので割り切ることにした。

「さて、現段階で参戦するであろうマスターについてだけど順を追って見ていこうか」

今の時代は1990年代だというのに2000年代まで強制的にスベックを上げられ、さらに彼の魔法（この世界で言う魔術）で魔改造されたノートパソコンから投影型ディスプレイが展開され5つの画面がキャスターと私の前に映る。

そのうちからまず、御三家の遠坂を選択し情報を参照した。

「まずは遠坂だ。この世界に指を数えるほどしかない『魔法使い』の一人である宝石翁ことキシユア・ゼルレッチ・シユバインオーグの系譜を受け継ぐ一族で宝石を用いた魔術、その名の通り『宝石魔術』を得意としている。参戦する現当主の遠坂時臣の属性は火で、袂を分かったという弟子の言峰綺礼も参戦するらしい。だが少々この点に関して疑問に思うことがある」

「何か引っかけたことでもあるんですか？」

「今回の監督役は言峰綺礼の父で遠坂とは古い縁がある。それも先代から続いている間柄だ。令呪を授かったからといって決別したというのは少々おかしいような気がする」

もしかしたら敵対して繋がっていないように見せかけて実は水面下で繋がっているのかもしれない。確かな証拠は今はないが、しかしこういった策謀に関して知識があるキャスターは要警戒と判断し次のマスターの情報を手練り寄せた。

「次にマキリ・・・今では間桐まこうと名を変えているそうだが聖杯戦争の令呪システムを構築した一族だ。その技術力が今もあるかどうかは不明だが今回、出奔し仕事で冬木を離れていた次男の間桐雁夜をマスターにしたらしい」

「写真を見るからに一般人に見えますね・・・とても魔術師には見えません（・・・あれ？この人何処かで見たような）」

伽耶は雁夜の姿が映った写真を見て、一瞬固まるもキャスターの話を聞くためにすぐに思考を切り替える。

「だろうね、現に遠坂の協力者から手に入れた情報には『マキリは衰退した』とある。つまり『魔術回路の枯渇』があると考えていいだろう」

「でもわかりません、何で出奔してまで家を離れた人が突然マスターになったんでしょう・・・」

マスターにならざるおえない理由があったとしか考えられない、とまたキャスターは意見を言う。同時に聖杯戦争とは関係なさそうな戸籍データを映し出し私に見せてきた。そこには

「右が聖杯戦争の準備に遠坂が入る前の戸籍、左が準備が開始されたであろう時期の戸籍データだ」

「一番下の子が、養子に出されている・・・？」

そこには『遠坂桜』が『間桐桜』へと姓を変えたという事実が淡々と書かれていた。・・・これが参戦の理由？

「それだけじゃない、マキリの戸籍情報には必ず『間桐臓硯』が出てきている。それも必ずと言っていいほどだ」

世襲制という可能性もありえなくもないが、それだけでは納得がいかなかった。何か腑に落ちない点がある。これも現時点ではどうしようもないので開戦後に確かめるといふ形で切り上げた。

次はアインツベルンを一旦飛ばして言峰綺礼だ。遠坂関連以外のデータがいくつか見つかったらしい。

「僕の見立てではこの中で二番目に恐ろしい敵になるであろうと考えている相手なんだ。 見なよ、これ」

マンレーサのイグナチオ神学校を主席で、しかも二年飛び級で成し遂げた後に枢機卿になる道を歩むかと思えば、エリート街道を外れ父親の璃正と同じく聖堂教会に志願。最終的に父と同じ聖遺物回収・管理を請け負う“第八秘蹟会”に所属することになるもその前の部

署には異端を徹底的に狩る“代行者”と呼ばれる存在に任命されていたという。聞こえはいいかもしれないが代行者とは即ち殺戮に長けたいわば人のカタチをした兵器なのだ。生半可な気持ちの者がなれるものではないし、そもそも自分からなる人間がいないそうだ。

「そして遠坂時臣が時計塔に提出した報告書の内容は狂っているとしか考えられないものだった」

何せ、師すら超える治療魔術を手に入れたというのにまだ満足しきれないのか別の部門に切り替え出来るところまで極める。切り替えでは極めるを繰り返しているのだ。

一見情熱があつて良いように見えるかもしれないがキャスターはかつての自分を思い返し吐くように言った。

「こいつは満たされない心を満たしたい一心で取り組んでいるんだ。だからここまで空虚で　熱心なんだ」

溜息をついて言いたいことを言い切ったキャスターは自分で煎れた紅茶を口に含み一旦休憩に入る。それでもディスプレイ上の綺礼を見る眼付きは依然変わらなかった。

「次に行こう・・・次は『時計塔』のロード・エルメロイの二つ名で有名なケイネス・エルメロイ・アーチボルトだ。彼は降霊術、召

喚術、錬金術に通ずる魔術のエキスパートで他の参加者とは違った意味で厄介な奴だ」

「具体的に何処が厄介なんですか？」

「聖杯戦争の中心たる御三家とは一線を画す九代続いた由緒正しい家柄の貴族だ。時計塔に強い影響力を持つ一族らしい。それなりに魔術礼装を揃えて挑んでくるだろうし自分の得手不得手をしっかりと理解して挑んでくるはずだろう。正面切って戦うのはやめておいたほうがいいかもしれない」

御三家の面々を『特殊型』と称するなら彼は『万能型』の魔術師だ。自らの隙に対する本腰の入れようは尋常じゃないだろう。またエキスパートならではの秘策も考えてくるのかもしれない。

そして最後まで残しておいたアインツベルンに関する情報に二人は注目する。

「アインツベルン自体の情報は残念ながら乏しかった。けれど、マスター関連の情報だけは何とか引き出せたよ」

「えっと、名前は衛宮切嗣・・・通称『魔術師殺し』!？」

何ともまあ物騒な二つ名である。それだけでも私をビビらせたというのにさらに追い打ちがかけられた。

「こいつは酷いときには一人の魔術師を殺すために旅客機ごと墜落

させたことがある奴なんだ。他にも銃火器を用いて相手を蜂の巣にしたりしたという報告すらある。また、謎の方法で魔術回路を暴走させられて殺された魔術師の数はかなりいるらしい」

「・・・これじゃあ、ただの殺し屋ですよ」

「実際そうなんだよ。普通の魔術師が絶対に取らないであろう行動をするのがこいつのセオリーで、魔術師としての誇りなんて微塵にも持つちゃいない。ましてはこいつは命を天秤にかけて行動しているんだよ」

10人の助けを求めているグループと20人の助けを求めているグループがいたら衛宮切嗣は必ず20人を選び助け、残された10人を見殺しにする。10人と1000人でも1000人と10000人同じように彼は天秤にかけて助ける。まるでそれが最善の選択であり、“正義”であると悟ったかのように。

「どれだけこいつが絶望してきたのか僕は知らない。けれど、こいつがもし聖杯を手にしてしまったら世界は間違いなくおかしくなるだろう」

誰よりも平和を願って戦っているのは何となく理解できる。おそらく聖杯への願いも平和に関する事柄だろう。だが、もし恒久平和なんて彼が願ったら世界は人が争うということを忘れ、意見の対立すら生まれない間拔けた世界になり果てる。それほどそのことを可能にしてしまうのが聖杯である。平和は確かに大事だろうが意見のぶつかり合いという小さな闘争があるからこそ世界は成り立っている。人類から闘争本能はそう簡単には消してはいけないのだ。

「だから僕はこいつを最大の脅威と認識して挑もうと思う。  
英霊ではなく、一人の人間として」

キヤスターもかつては切嗣のように正義を求めていた。やり方も道も違えど根本的な思いは同じだった。しかし、ある時から純粋な思いでは世界は思うようにならないことを知った。故にキヤスターは闇を知り、受け止め自分のモノとし光でも闇でもない道を歩むことを選んだ。しかし、切嗣はというと勝手に“取捨選択”こそが正義と悟り決めつけ泥にまみれながらも正義の道を行った。

今なら間に合うのかもれない、自分が得た答え　正義とは何たるかを衛宮切嗣に教えられれば彼は

自分と同じ後悔をしないで済むだろうと、キヤスターは静かに呟きパソコンの蓋を閉じた。

この瞬間から『正義』が“正義”を否定することが始まりを告げた。

> s i d e   o u t <



> s i d e . ? ? ? ? <

痛みを我慢することでは俺は過去の罪に向き合えない。

自分が逃げてしまったから大切な人の子供が傷つくことになった。

自分が逃げてしまったからその子供から笑顔が失われた。

自分が逃げてしまったから今自分が抱えている痛み以上の痛みを与えてしまった。

「ぐう・・・あああああああああああああああああああ  
ああっ！！！！！」

体中を侵食する蟲がまた俺の中の罪を刺激する。だが耐えなければなるまい、あともう少しで開かれるであろう聖杯戦争に余命あと一ヶ月と短くとも参加し夢の願望機たる聖杯を手に入れて、変わり果ててしまった幼い少女を元いた家へと帰り笑顔を取り戻させなければ

ばならないのだから。

男はどこまでも純粹で聖杯戦争参加者の中でもまともな願いを持っていた。故に『根源』になど彼は目もくれない。

「桜ちゃん……………俺は、俺は君との約束を……………」

痛みを耐えながら今も蟲蔵で『洗礼』を受けているであろう少女がいる方向に向かって男は手を伸ばす仕草をする。その手は果たして無事に少女の手を掴めるのかはどうかはまだこの時点では誰もわからなかった。

運命はただ加速していく。そして、誰も予想できない未来を残酷にまで突きつけるのみ。

願わくば、この傷だらけのヒーローに僅かでもいい、祝福が与えられんことを……………

> s i d e   o u t <

act・2 命の重圧（後書き）

キャスターの警戒心レベル

一位・切嗣

二位・言峰

三位・遠坂

四位・ケイネス（12/23付け）

間桐は様子見なのでランク外、今回は一斉召喚回にしようか迷っています。あと、おじさん助けたい。

次回もお楽しみに。

a c t . 3 始まり(ゼロ)の鼓動(前書き)

今回は都合上短めです。あと、原作ではなかった場面がさり気なく追加しております。先生いじめはほどほどじゃないとね……。

カシオペアに制限として体力の低下を追加しました。

あと、おじさん救済ルートを鋭気構築中でございます。

### act・3 始まり(ゼロ)の鼓動

> side・切嗣<

「しかし、エクスカリバーの鞘・・・か」

アインツベルン城に設けられた“魔術師殺し”こと衛宮切嗣の私室では今夜召喚する予定のサーヴァントの触媒となる聖遺物、1500年経過してもその輝きを残し傷一つない黄金の鞘『アウア全て遠き理想郷』が置かれその傍には魔方陣を刻むための銀の雫が用意されていた。その二つを前にして切嗣は再度まとめ直した参加者達の情報に再び目を付ける。今度はマスターに関する情報ではなく召喚するであろうサーヴァントの予想を各マスター別に行うというのだ。

60

「(僕らがかの『騎士王』をセイバーとして召喚する以上、クラスの一つは既に埋まっていると考えていい。そもそもセイバーのクラスに該当できるサーヴァントの数は限られているからな)」

英霊の持つ宝具・・・英雄を英雄たらしめる縁の武具や機器といった“象徴”によってクラスは振り分けられる。聖剣以上の剣が象徴の英霊が今回の聖杯戦争にいないならばまずクラスを奪われることなどありはしない。

「(問題は言峰綺礼がどのクラスのサーヴァントを召喚するかだな。遠坂と結託していると仮に予想した場合、遠坂が強力なサーヴァントを呼び出し言峰がそのサポート役のサーヴァントを召喚するなら

ば・・・気配遮断スキルを持ち諜報活動に適したアサシンか工房作成スキルを持ち陣地防衛に適したキャスターがお誂え向きか」

アサシンに関しては調べずとも『真名のみ』ははっきりしている、何故ならばそのクラスに該当する英霊がある存在しかいないからだ。・・・その名は山の翁『ハサン・サツバーハ』。暗殺者アサシンという言葉の起源となった人物である。

だが、ここで注意視しなければならぬのは召喚される肝心の『ハサン・サツバーハ』がどのハサンであつたかだ。何を隠そう『ハサン・サツバーハ』という名は計19人もが存在が名乗っている。始祖のハサン・イ・ザバーや多重人格者であつた18代目『百の貌のハサン』が有名だ。

「（アサシンとしての基本能力は変わらないとして、奴が効率性が戦闘力のどちらを選ぶかが鍵だな）」

自分かもしアサシンを召喚できていたのなら効率性を間違ひなく優先して、人格ごとに恐らくは分裂するはずの『百の貌のハサン』を選ぶだろう。果たして自分が出来なかつたことを言峰はするのか見物だつた。

「（遠坂はあの性格なら三騎士クラスが妥当か・・・セイバー狙いの可能性もなくはないが、ふっ・・・一足遅かつたな）」

アインツベルンの聖遺物回収は聖堂教会や時計塔にも引け劣らない組織でなく個人での影響力が強い分アドバンテージが非常に高かつた。また勝利のためには手段を選ばなくなっている以上、自分にとっても都合が良いのだ。

「（間桐は・・・魔術回路の枯渇で劣勢に立たされている上に、出

奔した人間をマスターに仕立て上げたぐらいだからクラスとしてスベックの底上げが期待できるバーサーカーか、もしくは変化球でキヤスターだな」

バーサーカーは召喚の際に特別な二節を加えることでどんなクラスに該当するサーヴァントであつてもバーサーカーに出来てしまい、なおかつクラスを自分の手で確定できてしまうメリットを持っている。その代わり扱いは難しい上魔力が枯渇しやすいという燃費の悪さがあるも元のサーヴァントの基本ステータスが高ければ大きな脅威になる。

キヤスターの場合は、衰退したマキリを少しでも回復させる知識を得られるのではとありえなくもない理由で召喚する可能性があると思つた。もつとも、あの間桐臓硯という蟲の化け物が何を考えているのか謎であるが。

「（ケイネス・・・聖遺物を紛失したと聞いたが上手く体勢を立て直してきたか、花型の魔術師にしてはよくやる。何か策を講じてきそうだがまあ・・・警戒するほどでもないだろう）」

時代に何時までもついて行けず魔術頼りな人間は新しい考えも文明の利器を利用することも受け入れないで下らない理論でモノを話し行動する。そういった意味でケイネスは行動が予測しやすい格好の獲物だった。

「残る二人に関する情報は全く無しか・・・これは向こうに着いてから舞弥と調べてみるか」

聖杯は稀に魔術師でない存在に令呪を与えることもあるという。そ

れが何も知らぬ一般人ならばこちらの調べが簡単につくだろう。そして速やかに排除して聖杯の為の贄になってもらう。不敵に笑うと切嗣はこの1990年代に相応しいパソコンの電源を切り、一人先に召喚の場となる礼拝堂へと赴いた。

右手に、信じてもない神を現す十字架めいた令呪を宿しながら。

> s i d e   o u t <

> s i d e   .   キ ャ ス ター <



「　　ところでマスター、君に渡しておくモノがあるんだ」

魔術師であるも実践経験すらない知識も付け焼き刃なマスターの安全を保証するためには傍に自分がいるのが一番良いと思われるがずっとそうしてやり過ぎていられるかと問われれば無理な話だった。いつかは敵のサーヴァントと交戦せねばならない局面もあるだろう。その際に出来るだけ危害が及ばない場所に避難させておくのも限度があるため結局の所、マスターたる伽耶の自己防衛能力の底上げが望ましいという結論に至った。

「これは・・・カシオペアですか？」

伽耶が手渡されたのはお守りとして身に付けているモノと色違いのタイムマシン、『カシオペア』だった。いつか話していた魔術礼装代わりになるという代物であり、念入りに調整を再度施されキャスターの手からそっと渡された。・・・おまけに使用説明書まで丁寧に付けて。

「うん、正しくは『カシオペアMk-?』というんだけどね。詳しい機能については説明書でまた確認するとして、使い方についてざっと解説しておこうか」

カシオペアには大きく分けて二つの機能がある。

一つ目は『絶対回避』、回避不能の一撃を食らってもその瞬間に別時間へ時間跳躍すればどのような攻撃でも回避することができる能力だ。二つ目は『擬似時間停止』、ほぼ同時間・同空間への超高速連続時間跳躍を行うことで擬似的に時間を止めたことと同意義な効果がある。どちらも本来のカシオペアのスペックならばナノ秒以下の精密操作と跳躍後の時空間の正確な事情予測がが使用者に求めら

れるが、改修機である二号機には扱いやすさを重視した造りと超高性能AIを搭載しているのだから使用者が操作不得意でも安心して扱えるようになっていく。(デメリットとしては使用者の体力を使うたびに奪っていく点があるが)

ある意味、二人がまだ知らぬ衛宮切嗣の能力『固有時制御』よりも凶悪な機能を兼ね備えている礼装と言えよう。

「因果をねじ曲げる宝具には弱いけど大抵の宝具・・・特に奇襲攻撃に対しては絶大な効果を発揮するはずだ」

キャスターが一番危惧している相手である衛宮切嗣の魔の手から単純な方法では逃れることができない。相手は魔術師の弱点を知り尽くしている魔術師であつて魔術師でない存在だ。それを理解しているからこそ彼を上回る技術力でこちらは対抗する。その技術力の差・・・実に100年である。

「マスターはただ危ないと感じたら移動したい方向を思い浮かべればいい。そうすれば勝手に動いて回避してくれる」

「でも、本当に大丈夫なんでしょうか・・・これだけで本当に生き残れるのか」

不安になるのは無理もない。戦う相手は皆、実践経験豊富で相手の魔術師を殺すことさえ厭わない存在なのだ、生半可な気持ちで勝負を挑んでは十中八九返り討ちにされてしまう。実力差も歴然な状態で果たして無事に生き残ることなど可能なのだろうか。と伽耶は恐れる気持ちを隠せない。

そんな彼女の両肩に手を添えるキャスター。彼は彼女を激励するようにこう答えた。

「生き残れるかじゃない、生き残るんだ。ましてや僕は君を絶対に死なせない」

最弱のサーヴァントのクラスに召喚されたとはいえキャスターに他のクラスが平然とできる接近戦ができないわけではない。彼は魔法使い（魔術師）でありながらも徒手空拳をその身に身に付け幾度となく襲い来る猛者を次々と相手し生き残ってきたのだ。いわば今回の第四次聖杯戦争においてのキャスターは他のクラスの要素を数多詰め込んだイレギュラーな存在なのである。七つのクラスという縛りさえなければ一体どのようなクラスとして現界できたことだろうか。

「君も君自身を死なせないようにする術は持っているだろう？なら、安心して僕の戦いを見守っていてほしい」

桐春が残した手記には伽耶の魔術属性から使用可能とされる基礎魔術、応用魔術に至るまで事細かく記されていたためその後の修行には大いに役に立った。今では初歩的な探知魔術を彼女は習得している。彼がこうなることを予期していたのかはこの世にいない以上不明ではあるも孫を思う気持ちは深く伝わってきた。ならばその思いに応えるのが筋というものだ。

キャスターの言葉にこくりと無言で伽耶は頷き、渡されたカシオペアをぎゅっと両手で握りしめる。

受け継がれた思いは何を彼女にもたらすのか答えはまだわからない。キャスターはテラスから見下ろすことができる冬木の街を一望し思いを馳せた。



一人は一族の悲願たる『根源』への到達のためにあらゆる策略を計った、魔術師である前に父親として過ちを犯したことに気づかぬ男、遠坂時臣。彼は一見すると木乃伊の破片にしか見えない『遙か太古の時代にこの世で初めて脱皮した』という蛇の抜け殻の化石からかつて世界の全てを有したとされる人類最古の英雄の王『ギルガメッシュ』を呼び出そうとしている。それが後の己に降りかかる悲劇を生み出す原因となることも知らずに……。

「 告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄る辺に従い、この意、この理に従うならば応えよ 」

一人は己に足りない武勲……経歴に『戦歴』という「箔」を付けたがためだけに参加する『時計塔』の花型の魔術師にして九代続いた由緒正しい魔術師の家系・アーチボルト家の後継者、ケイネス・エルメロイ・アーチボルト。彼はウェイバーによって奪われたイスカンダルの聖遺物の代わりにフィオナ騎士団の随一の戦士で知られる“輝く貌”の異名を持った槍騎士『デイルムツド・オディナ』で勝利を掴まんと計略する。

「 誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、 我は常世総ての悪を敷く者 」

一人は『正義の味方』に憧れ、多数を救う為に少数を切り捨てることに何のためらいも持たず今回、妻のアイリスフィールさえも犠牲にしてまで聖杯を手に入れ『恒久平和』を願う男、衛宮切嗣。彼はアインツベルンの執念が探し出した黄金の鞘を用いてセイバーとして召喚されれば最高のカードとなる英霊『アーサー・ペンドラゴン』を召喚せんと魔力を注ぎ込む。

「 されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍るべし。汝、狂乱の檻に囚われし者。我はその鎖を手繰る者 ！！」

一人は魔術師としてではなく一人の人間として純粹に幼い少女の人生を取り戻さんと願う男、間桐雁夜。彼は通常の呪文に禁断の異物・呼び寄せた英霊を理性の失った狂気のクラスへと貶める二節を挟み込み、アインツベルンのセイバーと深い因縁を持つ存在『湖の騎士サー・ランスロット』を今にも倒れそうな体でこの世に導かんとする。

彼らは場所を別々にしながらも同時間に同一の呪文を最後に紡ぐ。

「「「「「  
汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ ！！「「「「

瞬間、風が逆巻き稲光を放つ。

目をまともにかけていることさえ不可能な風圧の中で、召喚の陣の紋様が燦然と眩い輝きを見せる。そしてさらに魔法陣はこの世ならざる“英霊の座”へと繋がり第五架空要素であるエーテルを用いてその魂の器を構成する。

「 問おう。

汝が我を招きしマスターか？』

星が煌めく聖なる夜に透き通った声が数多響く。

今、この時彼らの前にはかつては人の身でありながらも人の域を超え、人ならざる力で精霊の域に到達した抑止の力の御座より来た数多の人々の夢で編まれた存在が一斉に冬木の地へと降臨した。

始まり（ゼロ）に至る物語は、ここから始まる

act・3 始まり(ゼロ)の鼓動(後書き)

カシオペアってある意味、切嗣よりもタチが悪いと気づいてしまった今日このごろ。だから少しデメリット追加。

あと、ハサンの歴代の異名とかリストで欲しい。(圧倒的情報不足)  
次回から本格的開幕なのでどうかお楽しみに。

ネギはセイバーいじめはとりあえず行わないけれど、聖杯問答は行いますから大丈夫です。



act・4 茶番審議(前書き)

こんな駄文にマジレスしないでください、と言っても無駄なんだから  
うけど………読んでくださってありがとうございます。

それとどうでもいい話ですが明日私は誕生日です。やったーいえー  
(棒)

自信満々な人間がする演技には何処か欠落した点がある。故にそれを見抜かれてしまえば喉元にナイフを突きつけられたも同然だ。

>side・時臣<

聖杯戦争の公式第一戦目は呆気なく終わった。

戦ったサーヴァントは、遠坂時臣が悲願の為に用意させた聖遺物の触媒から召喚したアーチャーことギルガメッシュと言峰綺礼がそのサポートの役割として彼より前に召喚したハサン・サツバーハことアサシンであり一瞬にして勝負がついた。勝利者はアーチャー・・・アサシンが踊るような動きで遠坂邸の結界を摺り抜けて結界の起点の宝石を手で掴み退けようとしたところを飛ばした宝具で瞬殺したというのが事の顛末であった。

両者の関係を知らぬ並のマスターから見ればアサシンが脱落したという事実のみを鵜呑みにしていたことだろうと思われるが実際は違った。アサシンは確かにアーチャーによって討ち取られはしたが死んで脱落などしていない、一人目のアサシン（・・・）がただ死んだというだけなのだ。それが意味するところはつまりアサシンはまだ幾人か残されているということ。脱落したとみな

され聖堂教会に保護される言峰綺礼は依然としてアサシンのマスタ  
ーであるのだ。

よもや脱落者がまだサーヴァントを従えているとは思いもしないだ  
ろうと時臣はほくそ笑み、自室の安楽椅子から外で降り注ぎ響く宝  
具の轟音に耳を傾けていた。

「さて、首尾は上々と言ったところか……」

妻子を隣市に避難させているため今の彼の独り言に耳を貸すものは  
誰一人としていない。いるとするならばそれは部屋を照らすランプ  
よりも眩い光を磨き抜かれた全身の甲冑から放ち堂々と彼の傍らに  
立った一人の王だけか。アサシンを一体仕留め終えた逆立った金髪  
と血の如き真紅の瞳の持ち主であるアーチャーは不満を露わにした  
顔で先程の一戦について口を開く。

「随分とつまらぬ些事<sup>オシ</sup>に我を煩わせたな、時臣」

「恐縮であります、王の中の王よ」

椅子からすぐさま立ち上がり恭しく優雅に一礼する時臣。彼は目の  
前にいるサーヴァントが礼を尽くすべき相手であると考え、召喚し  
たその時から下僕としてではなく一人の賓客としてもてなすべきと  
判断していた。元より彼は“高貴なる存在”が何たるかを他の誰よ  
りも弁えているのだと自負しており高貴なることを尊んでいる。た  
とえ令呪により支配権は自身にあるともそれは絶対に変わりはし  
ない。

「今宵の仕儀は、より煩瑣なお手間をかけぬよう今後に備えた露払  
いでございます。かくして『英雄王』の威光知らしめた今、もはや  
徒に噛みついてくる野良犬もおりますまい」

「つむ」

必要以上に礼儀を正しくすることもなく、かといって萎縮することもない時臣の礼を尽くす態度にアーチャーは首肯して頷く。彼のような存在は今のこの世では稀有な存在なのだとかの英雄王も理解していた。時臣はさらに言葉を紡ぎ王に自らの聖杯戦争に対する姿勢を伝える。

「しばらくは野の獣どもを食い合わせ、真に狩り落とすべき獅子がどれなのかを見定めませう。どうかそれまで、今しばらくお待ちを・  
」

「良かろう。まだ当面は散策だけで無聊を慰められそうだが。  
この時代、なかなかどうして面白い」

現代の社会に興味を抱いているアーチャーは召喚してからというもの、の勝手気儘に好奇心で行動し冬木の街へと赴いている。その際には現代の何時の間にもやら手にしていた装束を着て出歩いており、到底聖杯戦争に参戦しているようには見えなかった。今夜のアサシン討伐の茶番劇に誘い出すのさえ労を費やした時臣は内心毒づき心の中で正直な気持ちをお口にす。

「（・・・本来ならば英雄王をセイバーとして召喚できるはずだったものをよもや『単独行動』スキルを持つアーチャーとして召喚する羽目になるとはな。アインツベルンめ、余程強力なサーヴァントを従えているとみえる）」

英霊として最強のサーヴァントであるギルガメッシュをセイバーの座に据えて聖杯戦争を勝ち抜くという当初立てた算段は脆くも崩れ

去った。原因は残されたクラスの枠を巡り偶然一斉に召喚されたという夜に他のマスターが英雄王よりもセイバーとしての適性が高いサーヴァントを召喚したせいだった。そんなことを仕出かせるのは御三家の中でも遠坂以上に執念深いとされるアインツベルンしかないと予測した彼は三騎士クラスを確保できただけでも幸運と無理矢理自分を納得させた。

「…………お気に召しましたでしょうか？ 現代の世界は」

「度し難いほどに醜悪だ。が、それはそれで愛でようもある。ただ肝心なのは、ここに我の財に加えるに値するだけの宝物があるのかどうか、だ。もしも、我が龍愛に値するものが何一つない世界であったなら 無益な召喚で我に無駄足を踏ませた罪は重いぞ。時臣」

「はっ、その際には覚悟しております。ですが、必ずや聖杯は英雄王のお気に召すモノになりましょう」

魔術師という存在に身を置いているのだから死などとうに覚悟しているという意味を込めて彼は言う。自らの死を賭けにかけて挑むのが聖杯戦争であると知っているからだ。

「我が検めてからそれは決めることだが……まあ良いだろう。その覚悟に免じて当面はお前の口車に乗ってやろう。この世の全ての財宝は我の物。その聖杯がどの程度の宝であれ、我の許しもなしに雑種が奪い合うなど見過ごせる話ではないからな」

そう言い放ち英雄王は踵を返すと金色の霧となりて実体化を解除し姿を部屋から消した。影なき影の声を時臣の耳に残して…………アーチャーの気配が消え失せたのを確認した時臣は礼の姿勢を崩さ

ずにいると深く溜息をつき頂垂れる。

「『単独行動』Aランクによる魔力の節約の恩恵があるのはいいが・  
・もう少し王には自重していただきたいな」

己の世界のみにしか興味がない時臣にとってアーチャーが外の世界に出向くことは理解が及ばない。本日も何を目当てに街を闊歩するのだろうか。

「まあ当面は綺礼に任せていいだろう。今のところは予定通りなのだから」

割り切ってそうほくそ笑んだ彼は窓から庭を見下ろし一体のアサシンが果てて散った辺りを見る。するとそこは過剰な破壊行為によって土砂が抉られまるで爆発物が爆破された後のような惨状と化していた。

「・・・これは予定外だがな」

結局、荒らされた庭は後日念入りに元通りにした時臣であった。

> s i d e   o u t <

> side・切嗣<

アインツベルン城があるドイツからセイバーとアイリよりも先に日本へと降り立ち冬木市新都を訪れた切嗣はかれこれ喫煙を止めて九年になる値段の上昇した煙草を何の気なしに自動販売機で購入すると吸うことができなかつた今までをふと思い返す。

「（向こうにお気に入りの銘柄がなかつたのもあるが・・・アイリとイリヤのことを考えたら当然の判断だったか）」

魔術師殺しのしての顔だけでなくアイリスフィールの夫にしてイリヤスフィールの父という顔を持った彼に喫煙を続けるなどという選択はなかつた。煙草というものは喫煙者だけではなく周りにいる人間にまで悪影響をもたらし肺に負担をかけ寿命を縮める有害なものなのだから愛しの妻と愛娘が一緒にいる環境でなど吸えるはずもなかつた。

十年近いブランクを持ちながらも彼は流れるような手つきで通りかかったコンビニで購入した使い捨てライターの火を点け、あらかじめ加えていた一本の煙草の先端へ近づける。スモーカーにしか解らぬ芳香の痺れを感じつつ聖杯戦争がこれから始まるとも知らぬ市民の間を彼は摺り抜けてビジネスホテルに毛が生えた程度の安宿の一室で待たせている“弟子”というカテゴリーに一応は入る女性、久宇舞弥の下へ向かう。利用者の幅が広いホテルを厳選し隠れ家とし

た彼は勝手知ったる風を装い、ロビーを素通りするとエレベーターという箱の中へと入り、『F』のボタンを押す。限定的に密閉された空間に灰色の煙が充満する中でただ一人佇む彼は背を後ろの鏡に任せると過ぎ去ってしまった時間を思い返して瞳を閉じた。

たった一つの願いを叶えるために十年という歳月を費やし得たものは妻と娘を愛すという心、それに引き換え失ったのは全盛期の肉体と銃の腕。釣り合いは取れるかと聞かれれば今の自分には答えることはできない。どこまでも甘くなったものだと思われ鼻を鳴らし到着を告げる音声を聞き届けた後、エレベーターを降りた彼は一直線に七〇三号室の前へ立って取り決めておいたパスワード代わりのノックをリズム良くドアに叩き込む。すると待ち構えていたように即座に扉が開かれ挨拶も抜きに女性は無言で室内へと招き入れた。切嗣もまた何も口にすることなく室内に入り鍵をかける。そして何の脈絡もなく情報交換が開始された。

「昨夜、遠坂邸で動きがありました。映像は記録したのでご確認ください。それと装備品一式は全て到着済みです」

「ああ、解った。まずは状況を教えてくれ」

淡々と話す女性      久宇舞弥が頷き、備え付けのテレビに繋がれたレコーダーを起動させ昨日の晩に遠坂邸を監視していた蝙蝠の使い魔に括りつけたCCDカメラが残した映像を映し出す。十三インチのブラウン管テレビに不鮮明に映し出されたそれは明らかにサーヴァント同士の戦闘の一部始終であった。

『      貴様は我を見るに能わぬ。虫けらは虫けららしく地だけを



眺めながら・・・死ね』

遠坂邸の屋根の上に佇む一体の黄金のサーヴァントが見下すようにして侵入した髑髏の仮面のサーヴァント・・・アサシンを無数の剣を用いて蹂躪し消滅させる。簡潔に言えばそういう内容の映像が切嗣の眼に焼き付いた。

「この展開・・・どう見る舞弥？」

「出来過ぎてるように思えます」

彼の問いに即座に答えた舞弥は続けて分析した結果を述べる。

「アサシンの実体化から、遠坂のサーヴァントの攻撃までのタイムラグが短すぎます。予め待ち構えていたとしか思えません。霊体化した状態の侵入者を早い段階で察知したのだとすればまだ解りますが、侵入者は気配遮断スキル持ちのアサシン・・・遠坂は事前に侵入者の襲撃があることを承知していたのではないかと」

同じ予想に至っていた切嗣は頷き、付け加えるように言葉を話す。

「そう考えると、ますます納得いかない映像だな。待ち伏せするほどの余裕があったなら、どうして遠坂はみすみすサーヴァントを晒すような真似をした？」

遠坂は第二次、第三次と聖杯戦争に参戦してきたのだから戦いのセオリー・・・自身の邸宅の監視ぐらい把握しているはず。真名と同じように容姿・戦闘方法は秘匿されるべきものとされている中で遠坂の思い切った謎の行動は参戦している他のマスターに二つもの手掛かりを与えてしまった。どうせならば邸宅の庭ではなく中に

侵入してから葬れば見られずに済んだものをどうして彼らはそうしなかったのか？

「見せないようにも出来たはずのものを見せたということは  
最初から見せる意図があった、ということでしょうか？」

その指摘に再び切嗣は頷き答える。

「そう考えるのが妥当だろうな。そうすることで誰にどんなメリツトがあつたのかを考えてみれば自ずと答えも出るだろう。勘のいいマスターがいるならば同じように考えるはずだ。……ところで舞弥、アサシンのマスターはどうなった？」

「昨夜のうちに教会に避難し、監督役が保護下に置いた旨を告知されました。アサシンのマスターは言峰綺礼という男だそうです」

その名を聞いた切嗣はぴくりと眉を動かし、眼光に冷やかな凄味を帯びさせる。

「……舞弥、冬木教会に使い魔を放っておけ。一匹でいい、彷徨させる程度でな」

「……よいのですか？教会の不可侵地帯にマスターが干渉するのは禁じられているはずでは」

「ああ。だから本当に監督役の神父にバレないようにギリギリの距離で彷徨かせておくだけでいい。コントロールは特に力を入れずに何もするな」

「はい、わかりました」

彼の意図がたとえ見えなくともそれで是非を問う舞弥ではなかった。早速彼女は遠坂邸に貼り付かせている3匹の蝙蝠のうち一匹に思念で、新都外れの冬木教会へ飛ぶよう指示する。

切嗣は用意して装備品の点検に移るためにテレビの電源を切るつもりモコンを手にした。だが舞弥が右手でそれを制するのでまだあるのかと動きを一度止める。

「それともう一つ、遠坂邸を監視していた使い魔についてお話ししたいことが」

「使い魔？何か問題でもあったのか」

「実は見慣れないタイプの使い魔が同じく遠坂邸を監視していた中に居まして。一応映像には残りましたのでご覧ください」

彼が自由に操作できるようリモコンは渡したまま本体を操作し、舞弥は偶然見つけた他のマスターのものだと思われる使い魔が映り込んだ映像を再生する。すると、そこには縦に長い楕円形の姿をした機械仕掛けにしか見えない存在がいた。中心には自分達のようにご丁寧カメラまで仕掛けてある。

「魔力は使い魔のように帯びていますが全体的な造りは機械に間違いないようです。迷彩を施しているので見つけにくかったですけどう思われますか」

「衰退した間桐なら使いそうな使い魔だが……可能性としては未確認のマスターの方が高いな」

魔術師が魔術師たるが故に文明の利器に弱いということ理解してい

る切嗣は他にも自分達のような手段を扱っている人間がいることに  
対して内心驚きを隠せない。てつきりどのマスターも魔術頼りの人  
物だと考えていたのでこの展開は正直予想できない事態であった。  
映像以外で他にわかったことがあるか尋ねてみるもないと答えられ  
た以上、現状ではどうしようもないと判断した彼は更なる指示を彼  
女に言った。

「聖杯戦争に参加している以上、冬木に拠点を構えていることは間  
違いない。もう一体だけ特に何も指定しないで自由に飛び廻らせて  
おいてくれ」

策としては最低の部類だが未知の存在に自分の邪魔などさせるもの  
かと奥歯を噛み締め強く意気込むと予定通りに装備品の点検を彼ら  
は開始した。

> s i d e   o u t <

おかしい、何から何までおかしい。

そんな思考が私の頭の中を支配した。

目の前にはキヤスターが放った使い魔代わりの『渡鴉の人見』が記録した遠坂邸の一件についての映像がテレビに映し出されており、アサシンが遠坂邸の敷地に入り込んでからアーチャーの宝具とされるものに蹂躪されるまで事細かく記録されていた。その中で疑問に思ったのはまずアサシンの動きである。

彼が遠坂邸に張られた結界の起点の軸となる幾つかの位置を潰していく姿はまるでさも事前に知っていたかのように無駄のない動きだった。事前偵察を予め気配遮断スキルを用いて行なっていたのかもしれないがそれにしただって出来すぎた最期だと私は思った。

「つまりマスターは最後の起点をアサシンが破壊に成功して結界を無効化してから倒される、という終わり方なら納得ができるんだね？」

「ええ、それでなら『結界の破壊に気づいたサーヴァントが迎撃して討ち取った』と説明されても納得できるんですけど……」

起点に手を伸ばした瞬間にやられるというのは流石に「

「展開的におかしい、か……」

アサシンが無抵抗なまま死んだのはしっかり確認した。あれは決し

て演技などではないと私は予想する。その点に関してキャスターも同意し頷く。

「アサシン自体は遠坂のサーヴァントについて何も情報を持っていなかったんだろう。だからあんな驚いた死に方ができる」

告知されたという情報からアサシンのマスターはキャスターが要注意人物の一人と称した言峰綺礼だと判明した。彼は自分たちが予想しているように遠坂と結託してわざわざ勝利できるようにサーヴァントを躊躇うことなく贄にしたのだろうか。それとも

「教会に保護された以上、彼は表立って行動は出来ないだろう。単純に引き籠るのかそれとも裏方に回って暗躍するのは不明だけだ」

アサシンの生死はこの際無視しても構わない。生きているなら生きているで遠坂と結託している確かな証拠になるし、死んでいるなら脱落したのだと判断して他のサーヴァント戦に集中することができると彼は言つてアサシンに対する話し合いを素早く切り上げた。理由は簡単でアサシンを討ち滅ぼしたサーヴァントの方が重要だとお互い判断しあつたからだ。

件のサーヴァントの容姿は一言で言い表せば『金ピカ』。髪から甲冑まで全てが金色に埋め尽くされており、月夜の光を浴びてより一層の輝きを周囲に放っていたのは印象に残っている。そして何よりも注目すべき点が彼の宝具。数え切れぬほどの剣や槍などが展開されアサシン相手に容赦の無い一撃を何度も与えていた。

「・・・あれは全て一つ一つが宝具だ。基本的に英霊の持つ宝具は一つか精々多くて三つぐらいのはずなんだけど・・・あいつは一体」

「キャスターでも理解に悩むの？」

「うん。僕とてバグキャラと呼ばれている人間とは幾度となく戦ってきたけどあれはバグを通り越してチートの存在だよ。もし確認された以上の数の宝具を持っていて尚且つ全ての真名解放が可能だとしたらそれこそ召喚された全てのサーヴァントに勝ち目なんてないのかもしれない。まあ、あくまで もしも の話だ。脅威的存在なのは変わりはないけど」

キャスターが言うには確認された宝具には担い手によってついた『神秘』というモノが欠落していたという。つまり持ち主であったからこそ使える能力は恐らく使えないかもしれないらしい。ただ宝具を飛ばしている『宝具』ならばいいんだけど、とずっと唸り続けていた彼は話題を変えて黄金のサーヴァントのクラスを考察し始めた。

「僕もよくわからないんだけど『宝具を飛ばすように放つ』なら何も弓矢を使えなくてもアーチャーに分類されるみたいなんだ。セイバーという可能性もなくはないけど如何せんまだ一戦目で情報不足だ」

「他の陣営はどう動くんでしょうね・・・」

「アサシンがやられたんだ、動かざる負えないのは確かだよ。近いうちに黄金のサーヴァント以外のサーヴァントが二戦目を始めるに違いない」

そして自分達と同じようにそれを様子見として観戦するマスターとサーヴァントもいることだろう。キャスターは私を表舞台に立たせ

るのは極力控えると言い、またパソコンの蓋を開けて調べごとを始める。どうやら私を何があっても生かそうとしてくれているようで同盟を組める相手がいなかマスターの情報を性格や評判に至るまで調べ直しているようだ。

私は今それをただ見つめていることしかできない。

一方で、キャスターが頻りに叩き続けているキーの先の画面には消息が一切掴めなくなっているある人物についての情報が埋めつくされていた。その人物の名は……………

間桐雁夜といった。

> s i d e   o u t <



act・4 茶番審議（後書き）

ホントは舞弥の口にクリームつけて切嗣に「ああ、解った（何か口の端についているけど・・・まあいいや）」と言わせたかったのですが断念しました。

お気に入りこんな文才のない私の小説を入れてくださり感謝しております。

今回は第二戦目序章的な何かになります。

クリスマスプレゼントは何故か父親が作ったお財布＋5000円だそうです。

a c t . 5 導かれる刃（前書き）

昨日は更新できなくて申し訳ありませんでした（誕生日だったもので）

大学も明日で一応最後です。課題も早く終わらせねば……

オリジナル文を自分で書くのって苦労しますよね。

act・5 導かれる刃

> side・セイバー<

アイリスフィール・フォン・アインツベルンという存在の人生はこの世に生を受けてからまだ九年程しか経っていない。

切嗣とは別行動でドイツ発のチャーター便に乗り日本の地に降り立った濃紺のドレスシャツにネクタイ、フレンチ・コンチネンタル風のダークスーツ姿を着込んだ男装状態のセイバーは、その事実を知らないまま代理マスターとして共に行動している銀狐のファアをあしらったカジュアルコートがとてもよく似合っているアイリスフィールの後に続きタラップを降り滑走路へと足をつけると帽子を押さえながら振り向いてきた彼女に声をかけられる。

「どう？セイバー空の旅の感想は？」

「別段、どうということも。期待していたよりは味気ないものでした」

その言葉に一切の偽りはなかった。翡翠色の瞳の持ち主のセイバーはただ平静と彼女の問いに返す。

「あら残念、もっと驚いたり感激してくれるかと思ったのに・・・」

「・・・アイリスフィール、さては私を原始人か何かと勘違いして

いますね」

頬を膨らませて不満げに眉を寄せるセイバーに、アイリスフィールは舌をチラツと唇から出して邪気のない照れ笑いを見せた。

サーヴァントとしてこの世に現界したセイバーことアルトリアは聖杯からのバックアップを受けて現代の知識を与えられているため、自分が聖杯戦争の行われる日本へ向かうために用いた文明の利器である飛行機に関する知識は既に得ている。どうやって基本は操縦するのかわまでは理解していないが幻獣・神獣を除く全ての乗り物を乗りこなすことができる騎乗スキル持ちの彼女ならばいとも簡単に操縦を簡単としてしまっただろう。・・・ただ、何処かズレている考え方さえどうにかできればいいのだが。

「現代の知識は既にある程度は理解しておりますし、この時代の人間にとってこうして空を飛ぶことは当たり前のことなのでしょう？  
それにいざとなればこの飛行機という機械を乗りこなすことだって可能です」

「できるの？」

「可能です。鞍と手綱さえ用意できれば今すぐにも直感で乗りこなせます」

意気込んで言うセイバーの言い方にアイリスフィールは顔を背けて隠すと思わず吹き出してしまった。そんなやり方では操縦できないことを知っている彼女は一度操縦席を見せてやりたいと思っってしまった。

「それにしても不思議ね。生身の身体で飛行機に乗ったサーヴァン

トなんて多分あなたが初めてよ、セイバー」

「・・・その点に関しては大変申し訳なく思っています。私が不甲斐ないばかりに」

「いえ、そういう意味で言っているんじゃないの。気にしないで」  
セイバーとして召喚されたアルトリア・ペンドラゴンは通常とは異なる条件の下でサーヴァントとして機能しているため霊体化が不可能であり常に実体化状態にある。原因は別に召喚の方法や切嗣に落ち度があったわけではなく彼女の魂が特殊な条件下で『世界』と契約しているからだ。他のサーヴァントと比べて休憩の際に霊体化してマスターの魔力を節約するという機能が無い以上、クラスは最優でもサーヴァントとしてはある意味最低であると彼女は自覚している。

「霊体化して私についてきてくれるよりもこうして実体化状態で一緒に旅する方が断然良かったわ。だからポジティブに考えたほうがいいわよ」

「そういうものなのでしょうか・・・？」

前向きに考えてこちらの気を遣ってくれているのはありがたいとセイバーは思った。しかし、問題は切嗣が同じように考えているとは限らない。本来のマスターは彼女ではなく彼なのだ。召喚されて以来、まもとに口を開いてくれない切嗣が今どこで何を考えているのだろうかと思いつつ彼女はすっかり観光気分のアイリスフィールに半ば強引に手を引かれ空港のロビーへと向かう。

危なっかしい足取りでアイリスフィールに連れてこられると入国手

続きは滞りなく済まされたが、ロビーに出てセイバーは係員が肝を潰して目を白黒させつつ自分達を遇したことにそこはかかない不安を抱いた。

「やはり、これは・・・私の服装に問題があるのでは？」

行き交う人々に必然的に浴びせかけられる視線に耐えかねて呟くセイバー。同じくアイリスフィールも苦笑し自分にも原因があると思いを同意する。

「まあ、ちよつと目立ちすぎかも知れないわよね私達・・・・・・・・」

ちよつとどころではない。全体的に目立ち過ぎていた。何せ二人が二人とも絶世の美形であり、“庶民の服装”として選んだエキセントリックな服装が意外にも釣り合いが取れてよく似合っている。陶酔を孕む羨望の視線の中でアイリスフィールは俯き気味のセイバーの手を再び引き、弾むようなステップでハイヤー乗り場まで一直線に向かった。見たことがない活き活きとした輝く彼女の表情にセイバーは戸惑うばかりであった。

場所は変わって現在二人がいる場所は冬木市。夕焼けが良い感じに西の空を染めようかという午後も大分経過頃に彼女らは到着すると切嗣の居場所について二言三言言葉を交わし今後の予定に関して会話をする。

「つまり、当面は状況の変化を見極めながら臨機応変に対応する・・・ということですか？」

「ええ、今のところは何もしなくていいそうよ。だから折角の機会だしこの街をもっと見物しておきましょう、きっと面白いと思うわ」

聖杯戦争中だという緊張感のない申し出を口にするアイリスフィールにセイバーは一瞬呆気にとられると左手で頭を押さえ、厳しく表情を引き締める。

「アイリスフィール・・・こうして冬木の土地に踏み込んだのですから油断は禁物です。もう敵地にいるものだと覚悟してください。聖杯戦争はもう始まっているんですよ」

「それは十分承知。だから今はセイバーが頼りよ。もし近辺にサーヴァントがいれば、気配でそれとなく判るんでしょう？」

「それはまあ確かにそうですが・・・おおよそ半径二〇〇メートル程度しか私は感知できません。加えて相手が何らかの能力を行使している場合に限ります」

霊体・実体を問わず、サーヴァントはサーヴァント同士で互いの気

配を感じ取ることが可能だ。もちろん索敵能力には個人差があり、中にはアサシンのように気配遮断スキルを持ち合わせた者も稀にいる。

「そう……でもそれなら今この場で私たちを狙っているサ  
ーヴァントはいないのね？」

「はい。しかし」

「じゃあ、こつちから誘い出すぐらいのつもりで行きましょう。ど  
うせ捜す当てなんてないんだし」

見えざる敵を捜し求めて、あえて挑発的に街中を闊歩するというの  
も、なるほど一つの策ではある。大胆不敵な手段だが、際立った探  
査能力を持ち合わせてなどいないセイバーが積極的に捜そうとする  
のならば、それ以外に他に方法は無い。霊体化が出来ないという時  
点で彼女は隠密行動という選択肢を失っているのだから。

「筋は通っていますが……アイリスフィール、本音は物見遊山し  
ただけなのでしょう？」

「あら、バレてた？」

まず拠点を構えてから方針を詰めるのが得策なのにこの急ぎよう、  
明らかに怪し過ぎて気づかないわけがなかった。危機感を欠いた行  
動にどれほどの意味があるのかセイバーは彼女に詰問する。

「この街を見て回るのに、どうしてそう拘るのですか？」

「私ね……初めてなの。外へこうして出るのが」



「・・・えっ？」

聞くところによればアイリスフィールは生まれてこのかた外の世界へ足を踏み入れたことがないという。

聖杯戦争のためだけに造られた彼女は外を出歩くことなど必要ないとアハト爺に言いつけられ、切嗣と出会ってなお氷で閉ざされたあの城の中で籠の鳥のようにずっと囚われ続けていたのだった。それを聞いてセイバーも同情せざるおえない。

「もちろん、何も知らないわけじゃないのよ？」

特に切嗣が来てくれたから。彼は映画とか、写真とか、外の世界の景色や出来事をいっぱい私に教えてくれた。ニューヨークだとか、パリだとか、大勢の人が色々な暮らしをしている世界のことももちろんこの日本についてもね」

アイリスフィールは侘びしそうに笑い、それから辺りの雑踏を、さも愛おしげに見渡しセイバーに詫びの言葉をかけた。

「でも・・・この目で本当に世界を見るのは、これが初めて。だから嬉しくて、つい、はしゃぎ過ぎちゃったみたい。本当に御免なさいね」

「・・・」

セイバーは静かに目を伏せて頷くと、ダークスーツに包まれた細い肘を、そつとアイリスフィールに差し出した。

「・・・セイバー？」

「私とて、この街を歩くのは初めての経験ですが、それでもエスコートは騎士の役目です。及ばずながら努力します。さあ、どうぞお手を」

「  
ありがとう」

朗らかな喜びに目を輝かして、アイリスフィールはセイバーの肘に腕を絡ませる。夜までにはまだ大分時間が残されていたので彼女らは少しの間だけでも思う存分二人だけの時間を楽しみ続けた。

> s i d e o u t <

> s i d e ・ キャスター <

「………そろそろ誰かが動く頃合いだな」

魔術師同士の、それも聖杯戦争での戦いは原則として人目につきにくい夜に行うのがルールだ。なので日がまだ登っている時にはどの陣営も戦いに向けて下準備を整えているのがセオリーであり、自分

もまたそうして次に行われるであろう戦いの観戦準備を行なっていた。それもマスターである伽耶が居ない中でだ。

「（マスターには魔術師としての戦闘力が低いであろう間桐雁夜の搜索を行なってもらっているが・・・どう動くのだろうか彼は）」

間桐雁夜は伽耶と似たように付け焼刃状態の魔術師ではないかと仮定したマスターは出奔していた彼が他の魔術師同様『根源』を狙うということはありえないと考えた。彼にはもつと別に聖杯に願うことが存在するはずだと予想し彼とその近辺の人間関係を洗い直してみると思外なことに遠坂家当主の遠坂時臣の妻、遠坂葵と幼馴染である判明した。そこを一先ずの着眼点として追求することにし、サーヴァントの気配を隠蔽して彼が目撃されたことがある公園で聞き込みを行ったわけだが必要とする分には十分な情報を手に入れることができた。

何でも間桐雁夜は出張から帰る度に葵の娘である遠坂凜と今は間桐と姓を変えた桜にお見上げを渡していたらしい。当然、親と親しくして自分達に優しい存在には彼女らは懐くわけで彼は『雁夜おじさん』と呼ばれていたとか。しかし、最後に目撃された日には凜といつも一緒にいた桜の姿はなく、三人とも何処か暗い表情をしていたという。多分そこで彼は桜が養子に出され自分の実家に引き取られたのを知ったのだらう。そう考えると辻褃があった。ならば、彼が聖杯に願う望みとは

「（やっぱり、その桜という子関連の内容と考えるのが妥当か。それも聖杯に願うほどのレベルの事態・・・）」

何やらキナ臭い香りを感じた。具体的にどう言い表しているものか迷うが危険なことに変わりはない。間桐雁夜自体は危険人物と考え

てなくてもいいだろうがその背景が非常に謎過ぎた。

「ダンマリを決め込めるクラスのサーヴァントは残されていない、次の戦いでどれだけの事がわかるのやら」

アサシンの生死の確認、現界した他の陣営の英霊の容姿・戦闘方法など調べなければならぬことはいっぱいだ。それと同時に進行で伽耶の『聖杯戦争に巻き込まれた』という立場を利用して彼と交渉を持ちかけ、聖杯に対する願いを聞き出さなければならぬ。

キャスターはカーテンの隙間から舞い込む月の光が室内を僅かに照らしている薄暗い部屋の中の影となる場所で、ゆっくりと深紅に染まりきった瞳を晒す。そして立てかけておいた杖の柄を握り締め二階のベランダに立った。そう、第二戦目を始めようとするサーヴァントの気配が感じられたのだ。

念話で伽耶の様子見を行なってくると伝えたと現在位置を教えるもらい杖に跨がる。目指すは海浜公園の西側に隣接するように広がる港湾施設も兼ね備えた倉庫街。人目を忍んで行われるサーヴァント同士の対決にはうつつつけの場所であった。

高度2000mの地点を目指しキャスターは拠点を後にした。

> side out <

> side・ライダー <

河口も間近な未遠川の川幅を跨ぐ冬木大橋は、三径間連続中路アーチ形式の橋である。アーチの頂は高さ50メートル以上。その高みにあつて海から吹き込む風をもろに受ければ、すぐさま足を踏み外して眼下の川へと落下するのは当然の末路であり、熟練の整備工とて命綱なしに上ることは決してない。ましてや、一般人など言うまでもない。そんな冷たい鉄骨の上に、ウェイバー・ベルベットは命綱も何もなく両手両足だけでしがみついてガタガタと体を震わせる。すぐ隣には、彼のサーヴァントであり今の状況へと追い込んだ元凶のライダーが、どうにも憎らしいほどに威厳たつぷりの態度で胡坐をかいて座っていた。

「ラ、イ、ダー、早く・・・降りよう、ここ・・・早く!!」  
寒さと恐怖に震え、歯を鳴らしながら訴えるウェイバーの声も、巨漢のサーヴァントはどこ吹く風である。どこまでも自由気ままなサーヴァントであった。

「見張るには逃え向きの場所だ。まあ今暫くは高みの見物と洒落込もうではないか」

手にしたワインの酒瓶を、時折呷りながら、漫然と彼らが見下ろし

ているのは橋の西側の袂、河口から海岸にかけてを覆う広い海浜公園の敷地である。ウェイバー自身の視力では捉えられないが、ライダーの談によれば、そこに目下の標的であるサーヴァントの気配があるという。それもかれこれ四時間ほど追いかけて廻っている相手だそう。

敵サーヴァントとの接触を求めて市街を徘徊していた二人がそのサーヴァントの気配に気づいたのは奇しくもセイバーらも海辺で相手の存在を感知した時とほぼ同時刻であった。しかし、ライダーはようやく見つけたというのに遠巻きに監視を行うばかりで今いる場所から一向に動かず仕掛けようとしな。疑問を抱いたウェイバーが彼に問い質すとライダーは鼻を鳴らしてこう答えた。

「アレは明らかに誘っておる。ああもあからさまに気配を振りまいていれば気づかぬ方がおかしい。既に余だけでなく他のサーヴァントたちも奴を見つけて様子を窺っていることだろう。

放っておけば、いずれ気の短いマスターが挑発にわざと乗ったマスターが仕掛けに出るやも知れん。それを期待して成り行きを見守るのも手だ」

ライダーの方針はウェイバーの目から見ても非の打ち所もなかった。むしろ意外でさえあった。豪放磊落なサーヴァントが思いのほか狡猾かつ妥当な策略を巡らせていたことが。

確かにライダーの言うことも一理ある。誘いに乗ってむざむざ挑みかかるのは愚の骨頂であり、そのような手に乗る愚か者達は放っておいても互いに喰らいあつて自然と数を減じていくことだろう。挑発しているサーヴァントがどれほどの手練で自信家なのかは知らないが、ライダー以外のサーヴァントが喧嘩を買ってくれるのならそれはそれで好都合というものだった。どちらか一方を敗退したとこ

るでライダーに向かわせ、消耗している勝ったサーヴァントを潰せばまさに漁夫の利である。

さて、そうと決まれば後は根比べをすればいいだけなのだが

一定の距離をとって監視するにしても今いる高所はいささか身を落ち着かせて見守るにはあまりにも場所が良くなかった。主にマスターであるウェイバーにとってだが。

「お、降りる！いや、離せ！も、も、もう嫌！！」

「まあ待て。落ち着きのない奴め。坐して待つのも戦のうちだぞ。

ちようど別のサーヴァントが例の場所に向かっているよ  
うだしな」

ライダーは酒瓶を呷りながらも感知したサーヴァントの情報をしっかりとウェイバーに伝える。へばりついて何とか体勢を保っていた彼は顔を少しだけ上げて受け答えた。

「もうなのか！？そ、それで数は！！」

「落ち着け坊主、今確認してやる。……うむ、今のところは二体だな。それぞれ別な方向から港の方へ向かっている。そのうち一体はかなりの速さで向かっているようだ」

「ここにいて大丈夫なのかよ！！下手したら見つかって……兎に角不味いってば！！」

高所恐怖症で一刻も早く降りたいウェイバーは降りれる理由ができたと素直に喜ぶことができないまま未だに腰がひけている。意気込んで聖杯戦争に参加したというのになぜ自分はこんな目に遭わなけ

ればならないのだろうかとウェイバーは嗚咽を漏らして叫んだ。

「帰りたい・・・イギリスに帰りたいよ・・・！！！」

「大丈夫だ。その早いのはこちらを無視してもうとつくに通り過ぎたわい。速さだけでなく飛んでいた高度も高かったようだしのう」

「・・・はっ？」

てつきり自分達の場所が見つかって襲われるのでないかと覚えていたウェイバーは素っ頓狂な声を上げて鉄筋の上で固まる。それに構わずライダーは次なる獲物を見つけたようで、顎を使って眼下の海浜公園を指した。

「この征服王としたことが、つい今しがたまで気付かなんだが  
その公園にな、どうやらもう一人別のサーヴァントがおつた様子だ。そいつもまた二体にかけて港の方へと向かっている」

「じゃ、じゃあ」

「計三体、いずれも売り言葉に買い言葉ということだ。これは一戦  
やらかすのは間違いない。・・・もしかしたら混戦になるやも知れ  
んな」

飄げた風に笑いながらも、その双眸には、いつの間にか獣じみた鋭  
い眼光が宿っている。まだ傍観の構えとはいえ、それでも英霊イス  
カンドルの魂は、今ようやく戦場へと戻りつつあるのだ。

そんなライダーの頼もしさに心を奪われかけるウェイバーの胸の想  
念には鉄骨の上で身動きが取れず惨めな姿を晒す自分の情けなさ  
ともう少しでようやく地上に降ろしてもらえるのだという安堵感があ



った。

> s i d e   o u t <

大型車輛の行き来を考慮し幅広に設けられた四車線の道路を、サーヴァントの誘いに受け答えたセイバーとアイリスフィールは、さながら約定に赴きに行く決闘者の如く堂々と突き進んだ。敵もまた既に逃げも隠れもすることなく姿を現している。無人の大通りの真ん中に立ちほだかる長身の人影は、その出で立ちの異様さもさることながら何よりも沸々と放っている法外な魔力によって、人ならざる頂上の存在であることを暴露していた。二人のサーヴァントは、十メートルほどの間合いを隔てて立ち止まり対峙する。

ついに邂逅した最初のサーヴァント。これより死を賭して競い合うことになる敵をセイバーはつぶさに観察した。

癖のある長い髪をざっくり後ろで撫でつけた、端正な男だった。ま

ず真つ先に目を惹くのは、その獲物。身の丈をさらに上回る二メートル余りの長竿は、もはや武器として見間違えようもない。七つのクラスの中でも“騎士”の座クラスとして恐れられる三つ　セイバー、アーチャーに並びに立つ“槍”の英霊。彼はランサーのサーヴァントで相違ないだろう。異様なのは、その象徴的でもある長柄の獲物が一本限りでなかったことだ。

ランサーは右手に緩く握った長槍の穂を肩に預けているのとは別に、左手にもう一本、右のそれより三割ほど短い拵えの短槍を携えていた。槍の長さを活用して自在に操るとなれば、当然、両手を使って一本を構えるのが当然である。刀剣ならいざ知らず、二本の槍を同時に使うという流儀は尋常には想像しがたい。

二本の槍にはいずれも刃先から柄まで、びっしりと宝具としての真名を秘匿するためのものであるう呪符らしき布が巻かれていて、その実体を見ることができなかった。

「よくぞ来た。今日一日、この街を練り歩いて過ごしたものの、どいつもこいつも穴熊を決め込む腰抜けばかり。俺の誘いに応じた猛者はお前一人だけだ」

低い朗らかな声でそう讚えてから、槍を持った男　ランサーの英霊は、身構える素振りさえ見せず飄々としてセイバーに問う。

「その清涼な闘気……セイバーとお見受けしたが、如何に？」

「その通りだ。そういうお前はランサーに相違ないな？」

「如何にも……フン、これより死合おうという相手と尋常に名

乗りを交わすこともままならぬとはな。興の乗らぬ縛りがあつたものだ」

ランサーの言葉にセイバーも同感らしく、硬く引き締めていた表情を少しばかり緩める。

「是非もあるまい。もとより我ら自身の榮譽を競う戦いではないのだからな。お前とて、この時代の主のためにその槍を捧げたのであるらう?」

「フツ、違うない」

これより命の遣り取りに臨もうとしている者には思えない妙に涼しい表情でランサーは苦笑する。改めて見ると、視線ひとつで女心を蕩かしてしまいそうなほど見目麗しい男であった。

セイバーの後ろで控えていたアイリスフィールは彼の顔をじっくり眺めると僅かに息を詰まらせ眉を寄せる。

「……………魅了の魔術? 残念だけど既婚の私には効果ないわよ、槍兵」

ランサーが女を惑わす靈力を放射していることに気づいたアイリスフィール。彼女はホムンクルスとして魔術の使用に特化していた体を持っていた故に、人一倍の抗魔力で抵抗<sup>レジスト</sup>できたが、並の女性なら例え魔術師であっても一目で虜になっていたに違いない。アイリスフィールの発言にランサーは肩を竦めて言った。

「悪いがこれは持って生まれた呪いのようなものでな。こればかりは如何ともしがたい。聖杯戦争で何ら役にも立たないこの力に精々踊らされることのないよう気を付けてくれ」

魅惑の呪いの代表格と言えば『魔眼』なのだが先程までランサーが直視していた相手はセイバーでありアイリスフィールではない。お互い目と目が合っていない中で発動したということは眼ではなく顔に原因があるということだろう。言うならば魔眼ならぬ『魔貌』と言ったところか。

「その結構な面構えで、よもや私の剣が鈍るものだと期待してはいらぬまいな？ 槍使い」

ランクA以下の魔術を受け付けることがないセイバーの抗魔力のおかげで彼女もまた魅惑の呪いはキャンセルされていた。

「そうなっていたら興奮めも甚だしいが、成る程、セイバーのクラスの対魔力は伊達ではないか。……結構だ。この顔のせいで腰の抜けた女を斬るのでは、俺の面目に関わるからな。最初の一人が骨のある奴で嬉しいぞ」

「ほう、尋常な勝負を所望であったか。誇り高い英霊と相見えられたのは私にとっても幸いだ」

セイバーも静かな微笑をして頷く。　凄烈かつ透明な、生命の遣り取りをする同士のみが浮かべ得る笑みであった。

「それでは　いざ」

担いでいた呪符付きの二槍をまるで翼を広げるかのように大きく広げるとランサーは、ダークスーツ姿から魔力で編まれた白銀と紺碧

に輝く甲冑へと装いを変えたセイバーに猛然と突っ込んでいった。

「 伸びろ、探求の蔓つる」

二体のサーヴァントが戦っている倉庫街から離れた海浜公園近くの下水道では、学生らしい冬着のコートに身を包んだ少女が植物の蔓を一つ手に持って言葉を呟き壁に蔓を沿わせるように伸ばしていた。彼女が今使える魔術で一番初歩的ではあるが魔力反応の探知には十分な性能を誇っており、魔術迷彩を施していないマスターぐらいなら楽勝に見つけることができるであろう。

「（・・・やっぱり、この地下奥深くに魔力を持った誰かがいる）」

少女 久城伽耶は限界まで伸ばせるだけ伸ばした蔓を頼りに独特の臭いが漂う水路の道へと降り立つとハンカチで臭いを抑えながら足を進める。目的はたった一つであり、キャスターが捜すように指示した男性『間桐雁夜』を見つけ何故聖杯戦争に参加したのかを問うのだ。危険な行為かもしれないが既に覚悟の上で行動している。

「キャスターは私を信じてくれている だから、私も頑張らなくちゃ」

・ ・ ・ ・ ・ 伽耶の目指す先に一人佇む男、間桐雁夜と無事に出会  
いその胸の真意を聞くことができるかどうかの戦いも地上の戦いと  
同時に始まりを告げた。

act・5 導かれる刃（後書き）

マスター危険な目に合わせてんじゃねえとか言わないでください（涙）

引き籠っていたらストーリー進みませんから！！

次回は出来れば英霊大集合回になると思います。次回もお楽しみに！！

年賀はがきを送る相手がいないことにショックを受けてしまった自分がいいます。

act・6 英霊邂逅（前書き）

今回、キャスターの出番が少ないです。

出てきて名乗る程度ですが、それ以上のことはしないほうがいいと思います。

精霊の解釈であんなに揉めるとは・・・凹みます。くっ・・・



アイリスフィールは、ただ驚愕に息を呑んでいた。

いま彼女の眼前で繰り広げられる闘いの、凄まじさ。押し量るにそれは、前時代的な決闘でしかないはずなのだ。お互い甲冑を身に纏い、槍と剣とを鏢迫り合わせるだけの一対一の武人同士の対決。だが、迸る魔力の桁が違う。激突するその熱量すら違う。

鋼と鋼が打ち合う、それだけのことでこれほど破壊的な力の奔流が吹き溢れることなど有りはしない。踏みしめる足が路面を穿ち、空振った斬撃の風圧が街灯を綺麗に割った。

超高速の剣戟は、もはやアイリスフィールの視力で補足することなど不可能だった。ただ、激突し相克しあう二人の余波を近くで見届けることしか叶わないのである。倉庫の外装からトタン材がセイバーの剣かランサーの槍の擦過の影響で引き剥がされ、アイリスフィールのすぐ脇を飛んで転がっていく。荒れ狂うハリケーンの渦中にあるかのように、無人の倉庫街は容赦なしに蹂躪され破壊されつつあった。

“これが………サーヴァント同士の戦い……!!”

雷が天を裂き、荒れ狂う波濤が大地を跡形もなく砕く、幻想でしか成立し得ないはずの奇跡の具現。想像だにできなかった未知の領域の世界を、アイリスフィールは瞬きする隙すら見出せずに注視を続行

するしかなかった。

また、驚愕の念はセイバーとて同じだった。彼女とて、幾多の洗浄を先陣切って駆け抜けた騎士である。剣と槍と楯のせめぎ合いについては、食器の扱いも同然に熟知し、慣れ親しんでいる。そんな彼女の知る限り、“槍”というのは両手で扱うのが常道の武器。よってランサーが二本の槍を携えて姿を現したことを擬装の策と読んでいたのだが

「どうしたセイバー。攻めが甘いぞ」

「……ッ!」

どういうことが二本の槍のいずれからも実力が垣間見え、技の重みに差がなかった。もう三〇合ばかり打ち合っているというのにただ一度として敵を己の刃圈に捉えられずにいたセイバーは初戦でありながら、早くも予想外の難敵に巡り会った戦慄から総身に武者震いを駆け抜けさせた。

その様子をクレーンの上から眺めている存在がいるとも知らずに……

死闘が続く倉庫街から南東に一五キロ離れた場所にある冬木教会では、地下室にて闇の中に座す男性がいた。

目を閉ざしながらも微睡むことなく、静寂の中で神経を尖らしている漆黒の僧衣服の人間は言峰綺礼。彼の瞳の奥深くには閉ざしたことで広がる一面の暗闇ではなく、ぶつかり合う剣戟の火花が飛び交う様子が映り込んでいて妙に明るかった。

それもそのはず、彼が今『視ている』火花は幻覚ではなく実際に遙か遠くで展開されているサーヴァント同士の戦いであり、彼の未だに現界しているサーヴァント『アサシン』が見届けている光景と寸分違わぬ光景なのだ。

彼が行使しているのは師であった時臣に三年に亘る修業の間に伝授された魔術の一つ、共感知覚。魔力の経路が繋がっている契約者に対し感覚器の知覚を共有することができる能力だ。サーヴァントの行動を遠隔地から完全監視出来るこの魔術は極めて有用度が高く、特に斥候能力に長けているアサシンを従えているのであれば鬼に金棒という重宝する能力である。（難点としてはお互いの同意の上しか行使できないという点がある）

ちなみに教えた当の本人である時臣はアーチャーの知覚への割り込みを許可されておらず共感知覚を行なっていないかったりする。

「未遠川河口の倉庫街で、動きがありました。いよいよ『最初』の戦闘が始まった様子です」

綺礼は卓上に載せられた真鍮製の朝顔が特徴的な古めかしい蓄音機へ向かって言葉を投げかける。すると、一見独り言にも見えた彼の行動に対して蓄音機から反応があった。

『『最初』、という言い分はあるまい。公式には”第二戦”だよ。綺礼』

少しばかり歪んだ音質ではあるも、余裕のある洒落な声は、まぎれもなく遠坂時臣のものである。

よくよく見ればその骨董装置は、蓄音機と見間違うが、その下にあるべき針とターントーブルがない。代わりにあるのが、針金の弦によって支えられた大粒の宝石である。この装置は遠坂家伝来の魔導器であり、連絡を取り合っている相手の時臣の下にも同じ装置が設けられていた。文明の利器には弱い遠坂にとって大切な“通信装置”でもある。

最初の敗北者として冬木教会に保護される段取りとなっていた綺礼と密かに連絡を取るためにわざわざ用意されたのだ。

「戦っているのはどうやらセイバー、それにランサーのようです。とりわけセイバーは能力値に恵まれています」

『・・・成程な。流石は最強のクラス、といったところか。マスターは視認できるか？』

「堂々と姿を現しているのは、一人だけ・・・セイバーの背後に控えています。銀髪の女です」

状況を見てセイバーに守られるように立っているのがマスターであるろうと綺礼は見当をつけた。他にもマスターが潜んでいるかもしれないが現状で視認できるのは彼女だけであった。

『ふむ、ならばランサーのマスターには身を隠すだけの知恵がある。と。素人ではないな。この戦争の鉄則を弁えている・・・待て、セイバーのマスターだが、銀髪の女だと？』

「はい、白人の若い女です。銀髪に赤い瞳。どうにも人間離れた風情に見えますが・・・」

強いて言うのなら人形のような存在が人間と変わらぬ動きをしていると言ったほうが正しいか。真鍮の朝顔の向こう側から黙考の沈黙がひしひしと伝わってくる。

『・・・アインツベルンのホムンクルスか？またしても人形のマスターを製造したのか？・・・ありえぬ話ではないが・・・』

「ではあの女がアインツベルンのマスターなのですか？」

『ユーブスタクハイトが用意した駒は衛宮切嗣だとばかり思っていたが・・・まさか見込みが外れるとはな』

その言葉に少し間を置いてから綺礼は落胆した。切嗣が出てくるのなら問えたはずの彼の“答え”を得るチャンスが失われたと思ったからだ。

『とにかく、その女は聖杯戦争の趨勢を握る重要な鍵だ。綺礼、決して目を離すな』

「了解しました。では常時、一人を付けておくことにします」

謎めいた言葉で受け答えてから彼は引き続き、彼方で繰り広げられる二人の英霊の激闘を注視する。しかし、先程までと状況は変化しているというのに何処か彼には色褪せた光景に思えた。

拮抗状態に痺れを切らしたランサーのマスターによつて宝具の開帳を許されたランサーが二本の槍の内の、右手に持った長槍を選び構えてから状況は一変した。桁違いの魔力を立ち上らせた深紅の槍に警戒しつつセイバーは慎重に間合いを図ったわけなのだが、これまでのランサーの変幻自在の槍の舞いと比べて一直線の突き込みが放たれる。対応としてセイバーは手にした不可視の剣で槍を打ち払おうとしたのだが、槍先が『風王結界』に触れたその瞬間、何の前触れも無く突然一陣の風が旋を巻いて吹き荒れたのである。それが原因で屈折角を利用した風の護りが破れ、秘蔵の剣を晒すことになったセイバーはランサーに真名を看破される形となり、またランサーも不意をついて彼女に不治の呪いを残した後で事前に得ていた情報から正体を察しられることとなったのだ。

互いの真名も知れたところでようやく尋常な勝負ができると、二人は再度身構える。形勢は明らかに最大の奥義たる『約束された勝利の剣』が放つことができぬセイバーの不利なのであるが、彼女の闘志は逆に高ぶっていた。不足のない敵を目の前にして挑発すら交わし合えるほど騎士たる二人の英霊は、その闘魂の形までもが似通い相通ずるものだった。

「覚悟しろセイバー、今度こそは獲る。」

「それは私に獲られなかったときの話だぞ。ランサー」

じりじりと慎重に間合いを詰め、互いの必殺を見計らうセイバーとランサー。一触即発の宝剣と魔槍。

冷たくも清澄な緊迫の空気が  
そのとき、不意に轟いた雷  
鳴の響きによって破られた。

「」  
「!？」  
「」

東南の方角の空へ共に振り返る全員。そして、彼らの瞳に映り込んだのはもつれ合う紫電のスパークを夜空に撒き散らしながら一直線に彼らの間に目掛けて駆けてくる一つの

「チャリオット・・・戦車？」

アイリスフィールの言葉の通り、形の上だけで判断するのならそれは古風な二頭立ての戦車だった。ただし、轅に繋がれているのは軍馬ではなく隆々と筋肉をうならせている逞しくも美しい目牡牛である。蹄で虚空を蹴り、壮麗に飾られた戦車で居丈高にセイバーとランサーそしてアイリスフィールの上空を旋回したソレは速度を徐々に緩めていくと、対峙していた二人のちよūd真ん中へ割り込む形で地上へと降り立った。着地と同時に威風堂々とした巨漢の男の姿が露になる。

「双方、武器を収めよ。王の御前である！」

やおらそう吼えた大音声は、天駆けて現れたときの雷鳴にも匹敵した。

炯々たる眼光はその気迫だけで対峙する両者の切っ先を押し返さんばかりの圧力である。無論、セイバーもランサーもたかが怒鳴られる程度で威圧される器ではない。が、この新たな英霊の目的が襲撃ではなく、ただ単にセイバーとランサーの対決に水を差すためだけに横槍を入れてきたのだと解ると、二人はその意図を判じかねて躊躇せざるを得なかった。

ひとまず両者の氣勢を削いだところで、巨漢の御者は廠かに先を続ける。

「我が名は征服王イスカンドル。此度の聖杯戦争においてはライダーのクラスを得て現界した」

居合わす全員が、今度こそ呆気にとられた。聖杯戦争の場においてまさか攻略の要たる真名を自ら名乗るサーヴァントなど有り得るはずがない。そして誰にも増して動転したのは、ライダーの隣で

先程まで橋の上で震えていた御者台に蹲ったウェイバーだった。



「何を　　考えてやがりますかこの馬ッ鹿はああ！！！」

錯乱のあまり、もはやライダーの巨躯に対する畏怖さえも忘れたウエイバーは、金切声でわめきながら征服王のマントに掴みかかる。べしつと非情のデコピンが夜空に響き、抗議の声は沈黙に沈んだ。アイリスフィールは一瞬彼を可哀想だと思った。

右手中指以外には何事もなかったかのように、ライダーは左右のセイバーとランサーを見渡して問いかけた。

「うぬらとは聖杯を求めて相争う巡りあわせだが・・・矛を交えるより先に、まずは問うておくことがある。うぬら各々が聖杯に何を期するのは知らぬ。だが今一度考えてみよ。その願望、天地を喰らう大望に比してもなお、まだ重いものであるのかどうかを」

何を言わんとするのか、まだ判然としない問いではあったが、しかしセイバーはその真意に直感だけで不穏なものを感じ取り、我知らず<sup>まなじり</sup>眦を決していた。

「貴様　　何が言いたい？」

「うむ、噛み砕いて言うとな」

ライダーはここで、威厳だけはそのままに、妙に飄々とくだけた口調に切り替わった。

「ひとつ我が軍門に降り、聖杯を余に譲る気はないか？　さすれば余は貴様らを朋友<sup>とも</sup>として遇し、世界を制する快悦を共に分かち合う所存である」

「……………」

あまりにも突拍子もない提案であった。セイバーは怒りすらも通り越して呆れかえり、ランサーは肩を竦めてセイバーに『何を言っているんだ、コイツは？』と言いたげな表情をしていた。

征服王イスカンドル。たしかに破格の英霊であろう。人類の歴史において、世界征服という野望の実現に彼ほど迫った者はいない。だがそれにしてもこの人を食った提案はどうか。いきなり現れて堂々と真名を名乗り、あげく矛すら交えぬ前から恭順を要求するなどは、もはや聖杯戦争という枠組みを端から意に介していないとしか思えない破天荒である。英断なのか愚拳なのか、それすらも判じがたい。

「先に名乗った心意気には、まあ感服せんでもないが……その提案は承諾しかねる」

苦笑まじりにかぶりを振るランサーだったが、その目だけはまったく笑っていない。刃物のように威嚇的な眼光で、征服王の睥睨と真つ向から火花を散らしていた。

「俺が聖杯を捧げるのは、今生にて誓いを交わした新たなる君主ただ一人だけ。断じて貴様ではないぞ、ライダー」

「……そもそも、そんな戯言を述べ立てるために、貴様は私とランサーの勝負を邪魔立てしたというのか？」

そう言うランサーに続いて問いかけるセイバーの顔には、美貌の槍兵と違って笑みすらなかった。生真面目な彼女にとっては、ライダーの提案そのものが不愉快きわまるものだったのである。

「戯れ事が過ぎたな征服王。騎士として許し難い侮辱だ」

セイバーとランサーの双方から容赦ない敵意の視線を向けられて、ライダーはさも困窮した風に「むっ」と睨みながら、いかつい拳をごりごりと自身のこめかみに押しつけた。どことなく愛嬌のある仕草でありながら、そのくせ威風堂々たる居住まいは微塵も揺るがないのだから、これはこれで実に希有な存在感の持ち主と言えるだろう。

「・・・待遇は応相談だが？」

「くどい！」

なおおもねるように申し出るライダーを、セイバーとランサーは声をそろえて一蹴する。さらにセイバーの方は、憚然としたまま続けて言葉を付け加える。

「重ねて言うなら 私もまた一人の王としてブリテン国を預かる身だ。いかな大王といえども、臣下に降るわけにはいかぬ」

「ほう？ブリテンの王とな？」

その宣言によほど興味を惹かれたのか、ライダーは大仰に眉を上げた。

「ごりや驚いた。名にしおう騎士王が、こんな小娘だったとは」

「その小娘の一太刀を浴びてみるか？ 征服王」

低く押さえた声とともに、セイバーは剣の構えを取る。依然、左手に握力はなく、四指を柄に添えたのだが、その刀身からゆらめき上る闘気はランサーに浴びせていたものより厳しいかった。ライダーは眉を盛めて、深く溜息をつく。

「こりゃー交渉決裂かあ。勿体ないなあ。残念だなあ」

そうぼやいて俯いた拍子に、ライダーは足下から見上げてくる怨みに満ちた視線と目があった。

「ら、い、だあああ………」

腫れあがった額の痛みと、それに勝る惨めさ口惜しさで、ウェイバーの声はどん底まで低く掠れていた。軽くホラーに出てきそうな表情である。

「どうすんだよお。征服とか何とか言いながら、結局総スカンじゃないかよお……オマエ本気でセイバーとランサーを手下にできると思ってたのか？」

マスターからの問いを、巨漢のサーヴァントは何ら悪びれた風もなくハハハと剛胆に笑いとばした。

「いや、まあ、“ものは試し”と言うではないか」

「“ものは試し”で真名バラしたンかい！？無駄に情報提供したようなもんじゃないか！！」

逆上したウェイバーは、そびえ立つライダーの胸鎧に、非力きわまる両手の拳でポカポカと連打をくれながら泣きじゃくった。哀れを

誘う光景に、アイリスフィールは軽蔑したものか同情したもののか解らず、何ともいたたまれない心地になりオロオロしていた。そんな、微妙に弛緩した空気が

『そうか、よりもよって貴様が』

低く地を這うような怨嗟の声によって凍りつかされた。

未だ姿を現さぬランサーのマスターである。自らのサーヴァントに宝具の使用を促して以来、ふたたび黙して戦いを見守っていた彼女がいし彼女が、ここにきて何のつもりか口を挟んできた。それも先刻とはうって変わって、何か曰くがあるとしたか思えない憎悪の念を剥き出しにしたような声で、である。

『いったい何を血迷って私の聖遺物を盗み出したのかと調べてみれば、よりもよって、君自らが聖杯戦争に参加する腹だったとはねえ。ウェイバー・ベルベット君』

忌々しげに名を呼ばわれて、ウェイバーはその憎悪の対照が自分であると理解した。のみならず、その声の主が誰であるかも。

「あ……う……」

何故予測できなかったのか。時計塔で講師を務めるほどの地位にあれば、たとえイスカンダルのマントを盗まれた後でも、他の英霊の聖遺物を用意することぐらいは出来て当然だったではないか。だとすればこの冬木の地において、彼が今度こそウェイバーの仇敵として現れることになったとしても、何ら不思議もない展開である。

『残念だ、実に残念だなあ。可愛い教え子には幸せになってもらいたかったんだがね。ウェイバー、君のような凡才は、凡才なりに平庸で平和な人生を手に入れられたはずだったというのにねえ』

幻覚で攪乱されていて声の出所は判然としない。にもかかわらずウェイバーは、もう幾度味わったか知れない胃の腑の反り返る感覚を、ケイネスの酷薄な細面の、侮蔑と憐憫の入り交じった碧眼が、頭の上からじつと自分のことを見下ろしてくる感覚を　再び体験していた。

ウェイバーは彼を出し抜き、まんまとこうして英霊イスカンドルをサーヴァントとして従えたのだ。永らく時計塔で受けてきた辱めに対する、最高の意趣返しではないか。そうだ、もう既に講師と教え子の関係ではない。今や奴は真正銘の敵なのだ。存分に憎んでいい。命さえ奪ってしまってもいい。そうまでしてやって当然の相手なのだ。

しかしウェイバーは、時計塔で過ごしてきた数年間の間、ケイネスを殺してやりたいと思ったことは何度もあるが、逆にその相手からの敵意に晒されたのは、これが初めての経験だった。少年はいま初めて、本物の魔術師が殺意を込めた視線というものを体感したのだ。声の主は、ウェイバーが恐催に固まっているのを目敏く見て取ったのだろう。ゾツとするほど冷やかな猫撫で声で弄うように先を続ける。

『致し方ないなあウェイバー君。君については、私が特別に課外授業を受け持つてあげようではないか。魔術師同士が殺し合うという本来の意味　その恐怖と苦痛とを、余すところなく教えてあげるよ。光栄に思いたまえ』

事実、ウェイバーは恐怖に身を疎ませていた。屈辱を感じる余裕もゆとりもなかった。

真に魔術師たることは、死を観念することに他ならないと・・・言葉の上でしか理解していなかったその大原則を、今こそウェイバーは身に染みて味わっていた。それほどまでに、何処からともなく浴びせられるあの男の視線はおぞましく致命的だった。魔術師が殺意を胸に懐くというのが、これほどまでに決定的な『死の宣告』であったとは　ウェイバーはついぞ知らなかった。

独り恐怖に震えていた少年の小さな肩を、そのとき、優しく力強く包み込むものがあつた。その硬く大きく温かい感触に、他ならぬウェイバーが面食らつた。この巨漢のサーヴァントの手　いかつく節くれ立つた五指は、矮躯のマスターにとって畏怖の対象でしかなかったというのに、妙に頼り甲斐があつた。

「おう魔術師よ。察するに、貴様はこの坊主に成り代わって余のマスターとなる腹だつたらしいな」

何処に潜むとも知れぬランサーのマスターへ向けてライダーは呼びかけると、実に底意地の悪い憫笑で顔を歪めた。

「だとしたら片腹痛いのう。余のマスターたるべき男は、余と共に戦場を馳せる勇者でなければならぬ、坊主のようにな。姿を晒す度胸さえない貴様のような臆病者なぞ、役者不足も甚だしいぞ!!」

『・・・・・・・・』

沈黙の降りる中、姿無き者の怒りの気配だけが夜気を伝播する。ライダーは呵々と剛胆に大笑するとウェイバーを慰めつつ、今度は誰

にともなく夜空に向けて、大音声を張り上げた。

「おいこら！ 他にもおるだろうが。闇に紛れて覗き見をしておる連中は！！」

セイバーも、ランサーも、これには怪訝な顔をした。

「 どういうことだ？ ライダー」

問いかけるセイバーに向けて、征服王は満面の笑みとともに親指を立てて示す。

「セイバー、それにランサーよ。うぬらの真つ向切つての競い合い、まことに見事であった。あれほどに清澄な剣戟を響かせては、惹かれて出てきた英霊が、よもや余ひとりということはあるまい。余は知っておるぞ、ランサーの気配に導かれ集ってきた者どもをな」

アイリスフィールは、倉庫街の何処かに潜んでいるであろう切嗣が看破されたのかと肝を冷やすもどうやらライダーの意中には他のサーヴァントのことしかないようだ。再びライダーは辺り一面に轟き渡れとばかりに、大声で呼びかける。

「情けない。情けないのう！ 冬木に集った英雄豪傑どもよ。このセイバーとランサーが見せつけた気概に、何も感じるところがないと抜かすか？ 誇るべき真名を持ち合わせておきながら、コソコソと覗き見に徹するというのなら、腰抜けだわな。英霊が聞いて呆れるわなあ。んん！？」

ひとくさり豪笑を放つとライダーは、軽く小首を傾げて不敵に口元を歪め、とことん挑発的な眼差しで周囲の闇を見渡す。



「聖杯に招かれし英霊は、今！！ここに集うがいい。なおも顔見せを怖じるような臆病者は、

！  
征服王イスカンドルの侮蔑を免れぬものと知れ！！！

ライダーの大熱弁は、倉庫街に潜んでいた切嗣と舞弥だけではなく密かに状況を見守っていたアサシンの視覚聴覚を通じて、遙か彼方の冬木教会に陣取る言峰綺礼にもまた伝わっていた。

『・・・これは、拙いな』

「・・・拙いですね」

詳細を伝えた相手である時臣は綺礼同様、冷や汗をかいて呟く。  
何故なら、この類たくいの挑発だけは断じて見過ごさないのである。一人の英霊について、お互いに心当たりがあったからである。

彼らの予想は的中し、直後にライダーらの目の前に黄金のサーヴァントが現れた。

「我を差し置いて“王”を称する不埒者が、一夜のうちに二匹も涌くとはな」

開口一番から黄金のサーヴァントは不愉快げに口元を歪めて、眼下に対峙する三人のサーヴァントを侮蔑も露わに睥睨した。傲然たる態度とその口調は、ライダーの尊大さに通ずるようであったが根幹から異なっていた。征服王の声と眼差しは、ここまで冷酷で無慈悲ではない。ライダーもまた、まさか自分以上に高飛車で厄介な相手が現れようとは予想外だったようで、いささか毒気を抜かれたかのように困惑気味でポリポリと顎の下を掻いていた。

そんな中、また新たなサーヴァントの声が彼らの上空から響く。

「残念だが、『四人』の間違えだぞアーチャー。僕も一応は一国の王だ」

虚空から突然、先が奇妙に変形している長杖を片手に持った赤毛の

青年が現れる。重力に縛られることなくゆっくり彼は足を降ろし着地すると地に手をつきながら集まっていた英霊たちに視線を向けた。

「空から・・・降ってきた・・・？」

「もしや、空を飛んで此方へ向かっていたサーヴァントか。見たところ杖を持っておるし・・・キャスターか貴様？」

自らが駆けつける前に反応を確認していたライダーは消去法と容姿から目の前のサーヴァントのクラスを予想し問いかける。

「如何にも。僕はキャスターのサーヴァントで正解だ。高度二〇〇メートルから観戦していたんだが、よもや招集をかけるサーヴァントが現れるとはまさか思わなかったぞ」

「高度二〇〇メートルから観ていた、だと・・・？」

セイバーは高山病にかかりやすくなる高度からキャスターが自分達の戦いを観ていたことに驚愕を露にする。続いてランサーさえも気配に気づけなかったことに啞然としていた。

そもそも最弱のサーヴァントであるキャスターが前線に出てきた事自体、ありえない事態なのだ。

「キャスター風情が邪魔をしよつて。真の王たる英雄は、天上天下に我<sup>オレ</sup>ただ独りであり、あとは有象無象の雑種にすぎんということがわからんか」

度の過ぎる侮辱ともとれる宣言を、アーチャーはさらりと言い捨てた。これにはセイバーも流石に色を無くし、キャスターとライダーは寛容に聞き流して呆れたように溜息をついた。

「そこまで言うんなら、まずは名乗りを上げたらどうだ？ 貴様も王たる者ならば、まさか己の威名を憚りはすまい？」

ライダーがそう混ぜ返す。すると、アーチャーの真紅の双眸は、益々傲岸な怒りを帯びて眼下の巨漢を睨み据えた。

「問いを投げるか？ 雑種風情が、王たるこの我オレに向けて？」

順当に考えたのならば、ライダーの言い分にこそ理がありそうなものだったが、どうやらアーチャーの観点からするとそれは度し難い不敬であつたらしい。黄金の英霊は今殺意を剥き出しに放ち始めていた。

「我が拜謁の栄に浴してなお、この面貌を見知らぬと申すなら

そんな蒙昧は生かしておく価値すらない」

そう断じたアーチャーの左右の空間に、陽炎のような歪みがゆらりと生じ 眩い刃の輝きが忽然と虚空に出現していた。抜き身の剣と槍である。どちらも目を奪われるほどの装飾に彩られ、隠しようもないほど猛烈な魔力を放っていた。明らかに宝具としか思えない代物である。

それは紛れも無く、昨夜の怪異 アサシンを一方的に抹殺せしめた不可解なる攻撃の再現であると、昨夜の遠坂邸を監視していた者達は理解した。

そんな時に倉庫街地下の水路ではというと、フード付きのジャージに身を包んだ男が自身で放った使い魔が見ている映像を確認して奥歯を噛み締めて叫んでいた。

「見つけた……時臣の、サーヴァントッ!!」

愛していた人間を不幸に貶め、あまつさえ自分の娘さえも悲願の為なら養子に出して酷い目に遭わせた男が召喚した英霊をついに発見した間桐雁夜は、長年の積もりに積もった恨みと桜を汚させた怒りを抑えることができない。

自分よりも優れていた存在だったから幼馴染の葵を幸せにできるだろうと託した思いを、桜の姉や両親と過ごす幸せな日々と人生を全て踏みにじった遠坂時臣。彼は用意周到に自分が勝つよう策略を張り巡らせているようだがそう簡単に悲願の成就などさせて堪えるものか。彼にはそれ相応な絶望を味わってもらう必要がある。だから

「殺すんだバーサーカー!!あのアーチャーを……殺し潰せッ!  
!」

自らが従える黒騎士の狂戦士へ黄金のサーヴァントの駆逐を命じ、

英霊達が集っている戦いの場から二ブロック離れた場所にその姿を現させた。

a c t ・ 6 英霊邂逅（後書き）

次回、おじさんと少女が邂逅の予定。あと、ついにキャスターが戦うかもしれない。

ケイネス先生がソラウに令呪を奪われる話をどう変更しようかと現在考案中。必死に考えて説得する先生の活躍をお楽しみに。

a c t ・ 7 死を賭けた乱戦（前書き）

ライダー・・・本当にすまない。君の活躍は後で発揮するから！！  
ということ、キャストが暴れます。強引な点もありますが、どうか大目に見てください・・・でないと、精神的に参って更新速度が激減します。

では、今年最後の更新です。張り切ってどうぞ！！



act・7 死を賭けた乱戦

ライダーの呼びかけにより、アーチャー、キャスターと次々にサーヴァントが集まった中でそれは現れた。

まさに影としか形容しようのない異形の風体である肩幅の広い『男』の総身は、一分の隙もなく甲冑に覆われており、セイバーの白銀の鎧、アーチャーの黄金袴とはまったく違いどこまでも黒かった。精緻な装飾もなければ磨き上げた色艶すらない。闇、いや奈落のように、ただ底抜けに黒かった。面貌すらも無骨な兜ヘルメットに覆われて見えない。細く穿たれたスリットの奥に、熾火のように爛々と燃える双眸の不気味な輝きだけがあった。

「……なあ征服王。アイツには誘いをかけんのか？」

油断なく黒い騎士を見据えつつ、それでも口調だけは軽刺に、ランサーがライダーを揶揄した。受けたライダーは顔を顰めて言った。

「誘おうにもなあ。ありゃあ、のっけから交渉の余地なさそうだなあ」

黒い騎士から放たれるのは、掛け値なしの殺気……つまり負の波動のみであった。魔力から生じた旋風すらもが、怨嗟の呻り声に似て禍々しいのだ。相手のクラスはバーサーカー。それは誰もが確かめるまでもなく了解した。あれほどに凶悪な殺意の波動は、もはや狂乱の英霊クラスの座しか思い当たる節がない。

「で、坊主よ。サーヴァントとしちゃどの程度のモンだ？ あれは」  
ライダーからそう問われたウェイバーであったが、矮躯のマスターは呆気に取られたままかぶりを振る。

「……判らない。まるつきり判らないんだ」

「何だあ？ 貴様とてマスターの端くれであろうが。得手だの不得手だの、色々と『観える』ものなんだろう、ええ？」

一度英霊と契約しマスターとなった者ならば、他のサーヴァントのステータスを『読み取る』ための透視力というものを授けられる。英霊を招いた聖杯からさずけられる、マスターならではの特殊能力だ。アイリスフィールのような代行マスターでは叶わない相談だが、ライダーの正式なマスターであるウェイバーは、他のサーヴァントの能力偏差をライダーのそれと比較して、戦況をより有利な方向へ導くための策を練ることが可能だった。現にウェイバーは、目の前にいるセイバーとランサー、そしてアーチャーとキャスターの能力値を既に透視にて把握している。だがしかし

「見えないんだよ！ あの黒いヤツ、間違はなくサーヴァントなのに……ステータスも何も全然読めない！」

狼狽しきつたウェイバーの弁明に、ライダーは胡乱げに眉を顰め、改めて黒い騎士を凝視した。

闇色の甲冑は、何の特徴もない没個性で、装着者の素性を物語るような手掛かりは一切ない。否、むしろ見れば見るほどに細部がばやけ、ますます不鮮明になっていく。

「……恐らく、ステータスの閲覧に制限をかけるスキルをバーサ

「カー自身が持っているんだろう。これでは戦略の立てようもないな」

「だろくなキャスター。ああいった奴とやり合うには一度ぶつかってみなければ何も情報は得られはせんだろう」

冷静に慌てることなく思考し、ステータスが読み取れない理由を口にしたキャスター。同意するようにライダーも頷くが今回ばかりは自分から戦いに行こうとはしなかった。

「どうやら、アレもまた厄介な敵みたいね・・・」

アイリスフィールの呟きに、セイバーは頷いた。

「それだけではない。五人を相手に睨み合いとなつては、もう迂闊には動けません」

バトルロイヤルの形式で言うなら、もつとも劣勢な者を総掛かりで潰すのが最も確実な堅実な戦術である。従つて、もしこの場で弱みを見せようものなら、最悪の場合には五対一の絶望的な戦いを強いられる羽目にもなりかねないのだ。そうなつてはいかにセイバーといえども勝ち目はあるまい。

誰が誰に対して仕掛けるか、さらにその隙を誰が衝くか　この場を生き延びるためには、今いる全ての敵の動向を正確に見極めるしかない。それはどの英霊に対しても言えることだった。

セイバー、そしてランサーにとっては、それぞれお互いが当座の敵だ。ひとたび誇りを賭けて斬り結んだ以上は、何を差し置いてでもその決闘が最優先である。が、それはあくまで一対一の尋常な勝負を、後顧の憂いなく行える場合の話であり、ここまで邪魔が入った

のでは、決着は見送らざるを得ない。

ライダーは今のところ、明確に誰かを標的に見定めているわけではない。現時点での彼の目的は、この聖杯戦争に参ずる英霊たちの顔触れを見定めておきたいだけだろう。だが臆することもなく罷り出てきた以上は、誰の挑戦も受けて立つだけの覚悟はあると見ていい。

アーチャーは、明らかにライダー、セイバー、キャスターを敵視している。それぞれに『征服王』・『騎士王』・『一国の王』と名乗りを上げたことが、この黄金の英霊にとってはいたく不興であるらしいのだ。とりわけ挑発の主であるライダーについては、最優先の標的とするだろう。

キャスターは特に誰も敵視している様子はないようだ。ライダーと同じく観戦目的で姿を現したのだろうが、最弱のクラスにしてはあまりにも無防備過ぎるよう感じられる。実力さえも今のところわかっていない相手であった。

問題は、残る一人だ。バーサーカー・・・この見るからに異様な黒騎士がいつたい何を目論んでこの場に実体化したのか、判断のつく者は誰一人としていなかった。たださえ状況は収拾がつかないほどに混乱している。まともな思慮のあるマスターであれば、こんな戦略もへつたくれもない混沌の直中に敢えてサーヴァントを放とうとは思えないだろう。必定、誰もが一樣にバーサーカーを懐疑と警戒のうちに注視していたが、ここにも一人だけ例外がいた。アーチャーの真紅の双眸だけは、疑いも迷いもなく、ただ純然たる怒気と殺意を秘めて眼下のバーサーカーを見下ろしていた。

黒い騎士のおぞましい凝視が、街灯の上に佇立する彼一人だけに向けられたものであると、黄金の英霊は過たずに理解していたのだ。それは果たしてマスターの命によるものなのか

「誰の許しを得て我を見ておる？狂犬めが・・・」

卑賤なる者は眼差しすらも卑しく汚らわしい。それを浴びせられるのは貴人として耐え難い屈辱であった。今やアーチャーにとつて、王を僭称したライダー、セイバー、キャスターよりもなお、不躰なるバーサーカーは許し難い咎人であった。

彼の左右に浮いていた宝剣と宝槍が、やおら反転して向きを変える。切っ先が新たに見据えるのは、ライダーではなく最優先の抹殺対象となったバーサーカーである。

「せめて散りざまで我を興オレじさせよ。雑種」

冷酷なる言葉が告げられ、槍と剣とが虚空を奔る。

何処からともなく出現せしめた武器を、触れもせずに出す

それがこの黄金の英霊の射手たる所以であろう。だがその無造作きわまる宝具の扱いは異常に過ぎた。発破をかけられたかのように路面が吹き飛び、木っ端微塵に砕け散ったアスファルトが粉塵となつて視野を覆い尽くす。

「ッ！」

誰からともなく全員が息を呑んだ。

濛々たる粉塵の中からは黒い長身の死体ではなく影が揺らめき現れる。そう、バーサーカーは依然健在だった。僅かに逸れた足許では路面がクレーター状にごっそりと扶られていた。アーチャーの投じた剣と槍のうち、やや遅れて飛んだ槍の方が標的を外した結果である。そして、槍よりも先に標的へと届いたはずの剣は壊れることなく、バーサーカーの手の中にあつた。

神速で展開された攻防を、果たして幾人が見届けたであろうか。少

なくともアイリスフィールとウェイバーには、一体何が起こったのか理解さえもできなかった。だから二人とも口が開いたまま固まっている。

「なるほど・・・まず第一撃として飛来したアーチャーの宝剣を上手く身体の動きだけで回避して何の苦もなく掴み取り、獲得したその剣を用いて、続いて来た第二撃の宝槍を打ち払ったのか」

「・・・奴め、本当にバーサーカーか？」

わからないマスター組のためにわざわざ解説したキャスターに続いて、張り詰めた声で呟いたランサーにライダーが瞋り声を交えて応じる。

「狂化して理性を無くしてるにしては、えらく芸達者な奴よのう」

宝具とはそもそも使い手である英霊のためにだけ特化した専用の武器である。他の英霊が手に執ったところで満足に扱える道理もない。間髪入れず飛来した追い討ちを鮮やかに打ち払うなどという神業めいた剣技など、どう考えても發揮するのは不可能だ。

「ライダーのマスター、確かバーサーカーを召喚する際には特別な二節が必要だったな？」

「え、ああ・・・確かそうだったはずだ。ついでにクラスも決められるとかの補正もあったような・・・」

「何が言いたいんだ、キャスター？」

突然のキャスターの謎の問いにウェイバーは慌てつつもしっかり答

えると、その会話を聞いていたランサーはキャスターが何か閃いたのかと迫るように問い質した。

「何、簡単なことさ。　　奴は本来、バーサーカーのクラスで召喚される存在ではないのかもかもしれないということだ。元々適正があったかはわからないが。あくまでこれは予想だが、あの剣捌きからして騎士王たるセイバーが今回の聖杯戦争に参加していなければセイバーとして現界できたのではないかな。もしくはランサーとして」

「つまり、奴はバーサーカーの仮面を被ったセイバーかランサーということか？」

「だろうな。如何なるクラスに該当していようとも狂戦士として強制的に現界させることのできるのがバーサーカーの座の特権だ。<sup>クラス</sup>スキル能力は狂化によって低下しているものもあるだろうが、奴とやりあうにはセイバーと戦っているつもりで行かなければ勝ち目はないだろう」

なるほど良い例えだった。セイバークラスに該当するほどの手練なのならばたとえ狂戦士となろうともその優れた技術は完全には衰えはしない。納得のいく答えを得られた彼らは再びアーチャーとバーサーカーの戦いへと注目した。

無尽蔵の備えがあるかのように次々と宝具を抜き放っては使い捨てていくアーチャーの猛攻は止まない。落雷のごとき宝具の落下は、バーサーカーの立ち位置を街区もろとも消し飛ばさんばかりの勢いで、撃って撃って撃ち据える。攻撃は間断なく、それどころか次第

に激しさを増していく。何故ならば、標的たるバーサーカーがそれでも一向に倒れ伏さないからである。誰もが驚愕に目を奪われていた。多数の敵と対峙する一触即発の場にあるという危機感さえ、この時ばかりは皆の意中になかった。

バーサーカーは、いの一筋に飛来した矛を空いていた左手で掴み取り、あとは右手の剣ともども縦横無尽に振りかざして、続けざまに襲い来る宝具の洗礼を片っ端から打ち返していったのである。その技巧は精緻にして無謬。もはや華麗ですらありセイバーの座に据えられても何らおかしくはなかった。アーチャーから奪い取った宝具でありながら、まるで自身の宝具であるかのように自由自在に駆使する様は、どう見ても、長年使い込んだ愛用の得物でしか発揮し得ない練度である。攻め手も受け手、共に常軌を逸していた。

「　　どうやらあの金色は宝具の数が自慢らしいが、だとするとあの黒いヤツとの相性は最悪だな」

余裕の構えを見せていたライダーがしたり顔で呟き感想を述べた。

「黒いのは武器を拾えば拾うだけ強くなる。金色も、ああ節操なく投げまくっていても深みに嵌る一方だろうに。融通の利かぬ奴よのう」

「血が上っただけはまともな思考など働かない……魔力配給に関係なく持久戦に持ち込めばこの戦い、バーサーカーが勝つかもな」

征服王の冷静な指摘の通り、バーサーカーはアーチャーの宝具の猛攻を前にして一步も譲らない。それどころか、より強力な宝具が飛



来するたびに、手元のそれを放り捨てて新たな得物を掴み取り、周到に持ち替えていく。手元に偶然残った二本の宝具を、バーサーカーは何気なく掲げ上げ　そして何の予備動作もなしにアーチャーめがけて投げ放った。投擲の狙いは曖昧だったのか、それとも最初から当てる意図などなかったのか、投げられた斧と曲刀とが命中したのはアーチャーの足場になっていた街灯のポールであり鉄柱をバターのよう寸断してのけた。

一方で黄金の英霊は鉄柱が寸断されるより先に身を翻し、何事もなかったかのように地表に着地を決めていた。

「痴れ者が……。天に仰ぎ見るべきこの我を　同じ大地に立たせるかッ！！！」

ここにきてアーチャーの憤怒はついに臨界にまで達したのだろう。眉間に刻まれた縦皺が、美貌を凶相に変えている。

「その不敬は万死に値する。そこな雑種よ、もはや肉片一つも残さぬぞ！」

怒りのあまり、いまや紅蓮に燃えるかの如き双眸をバーサーカーに向けながらアーチャーが吼える。またびその周囲に空間を歪ませて現出する刃の群れ……。宝具の輝きはもはや三十二を数えた。今度ばかりはライダーまでもが押し黙った。十六宝具の連撃を、ついに凌いでのけたバーサーカーであったが、まさかそれに倍する攻撃までもが繰り出されようとは思うまい。それを言うなら他のサーヴァントたちと同様だった。もはや黄金のアーチャーの潜在力は、誰にも見積もることなど出来ない域にあった。

『・・・ギルガメッシュは本気です。さらに『王の財宝』ゲイト・オラ・バヒロンを解き放つ気でいます』

宝石を用いた通信器から届く言峰綺礼の実況報告に、遠坂時臣は頭を抱えた。

戦場たる倉庫街から遠く離れた遠坂邸の地下においても、状況の把握に不自由はなかった。アサシンを操る綺礼との連携は期待した通りの成果を上げている。態勢は万全のはずだった。

唯一、計算外だった要素といえば　やはり最強を期して呼び出した英霊ギルガメッシュが、よりもよってセイバーではなくアーチャーのクラスで現界を果たしたことが。アーチャーのクラスの特徴は宝具の強大さにあると言っても過言ではなく、ランクEX相当という桁外れな宝具を持つギルガメッシュに対して聖杯がこのクラスを割り当てたことは、確かに必定だったかもしれない。だが結果として唯我独尊の英雄王に、とりわけ高い単独行動スキルを与えることになってしまったのは、まったく誤算だったという他にない。

英雄王ギルガメッシュの威名を畏敬する時臣は、認め得るかぎり最大限に相手の意思を尊重する気であった。だがまさか、こつも早期からその許容範囲が脅かおびされることになるうとは・・・単独行動スキルを有し、マスターに依存しないサーヴァントを律するとなれば、あとは令呪に依るしかない。ただ三度限りの強制命令権。マスターを尊重する心掛けなど欠片も持ち合わせていないギルガメッシュをサーヴァントにするとあつては、なおのこと貴重なものだ。

どんな時でも余裕を持って優雅たれ　それが遠坂に代々伝わる家訓である。それを肝に銘じてきた自分が、よりもよって、他のマ

スターの誰よりも先んじて令呪を消費する必要に迫られるなどとは思ひもしなかつた。

『マスター  
導師よ、お早いご決断を』

通信器の向こう側から、綺礼が固い声で急かすように催促する。時臣は齒嚙みしながら、右手の甲を凝視した。

憎悪に燃えてバーサーカーを凝視していたアーチャーの眼差しが、やおら方角を転じた。視線は東南。その彼方には深山町の丘陵と高級住宅街があり、まさしく遠坂邸の方角であると一体何人が気付いたか。

「貴様ごときの諫言で、王たる我の怒りを鎮めると？大きく出たな、時臣……」

さも忌々しげに口元をひくつかせつつ、アーチャーが押し殺した声で吐き捨てる。周囲に展開していた無数の宝具が、一斉に輝きを潜めたかと思うや、何処にもなく消え失せた。

「……命拾いをしたな、狂犬」

憤憑やるかたない面相ではあつたが、既に真紅の双瞭からは殺意の炎が消え失せていた。その傲岸だけは揺るぎないままにアーチャーは居並ぶサーヴァントたちを睥睨する。

「雑種ども。次までに有象無象を間引いておけ。我と見えるのは真の英雄のみで良い」

最後にそう放言してから、アーチャーは実体化を解く。黄金の甲冑

姿が質感を失い、輝きの残滓だけを残して消えていった。誰も予想しなかった形で、黄金と黒騎士の対決はあっけなく終結した。

「フムン。どうやらアレのマスターは、アーチャー自身ほど剛毅な質<sup>タチ</sup>ではなかったようだな」

呆れた風に苦笑しながら嘯くライダー。だがそんな呑気に構えている場合ではないことを、他の面々は心得ている。アーチャーに負けず劣らず脅威であったバーサーカーは、今も彼らの前に立ちほだかっている。兜のスリットの奥に茫洋と光る双眸は、当初の標的を見失ったせい<sup>か</sup>所在なげに虚空を彷徨い・・・そしてセイバーを見て、再び燭々と燃えさかった。怨念の色だけに染まった視線に見据えられたセイバーの背筋に悪寒が奔り抜ける。

そもそもサーヴァントは現界を保つだけでなく、一挙手一投足に及ぶまで魔力を消費する。ことが戦闘に及んではその消費量も数倍増しである。そのための魔力は、マスターの魔術回路から吸い出され、サーヴァントへと供給されていくことになっている。

間桐雁夜にとって、魔術回路の活性化とは刻印虫に肉体を蝕まれる

地獄の苦痛に他ならない。

サーヴァントが霊体化していれば、魔力の消費量は最低限で済むというのは当たり前だ。この状態であれば雁夜も、時折、動悸や眩暈に苛まれる程度のことと済んだ。しかし、バーサーカーを実体化させてから想像を絶する苦痛が彼を襲った。

体内で覚醒した異物が蠕動を始め、肉に食い込み、骨を軋らせる。雁夜の疑似魔術回路たる刻印虫は、宿主である雁夜の許容量などお構いなしに、勝手に吸い上げた魔力を惜しみなくバーサーカーへと供給していった。

痛みなどという表現すらもはや生温い。身体の内側から別の生物に侵蝕され、略奪されていく　　生きながらに貪り食われていく  
激痛が、恐怖とおぞましさによって倍増しになる。

「ぐ……が、ぐあ………ツ!!」

身を潜めた闇の中で、雁夜は必死で悲鳴を噛み殺しながら、喉から胸にかけてを掻きむる仕草をした。だが、それでも激痛は消え失せることを知らない。

なお悲惨なことに、バーサーカーのクラスがマスターに要求する消費魔力は他のサーヴァントよりも数段勝る。英霊召喚の折、臓硯サーヴァントの『狂化』を雁夜に強いたのは、まさにあの悪辣な老魔術師ならではの歪んだ嗜虐であったのだ。

蟲どもが背骨を齧る。蟲どもが神経を溶かす。蟲どもが、雁夜の中に巢食うおびただしい蟲どもが蟲どもが蟲どもが蟲どもが蟲どもが蟲どもが蟲どもが………

「がはあああツ………」

耐えきれずに漏らした悲鳴も、掠れた呻き程度にしかならなかった。激痛は喉の奥につかえたまま外に出ていかない。雁夜は睨り泣きを

漏らしながら、体内を荒れ狂う幾千もの蹂躪に耐え続ける。

表通りで展開されるアーチャーとバーサーカーの攻防も、もはや監視して見届ける余裕などはない。やおら激痛の嵐が凪いだ時も、雁夜は状況を理解できるだけの思考力を、簡単には取り戻せなかった。

「……くっ、……はぁ……はぁ」

非常に荒い呼吸で苦痛の残滓を鎮めつつ、雁夜は再び使い魔の視野を借りて戦場を観察する。未だ残っているサーヴァントは四人。アーチャーの姿は既がない。戦闘は小休止を迎えていた。

倒したわけではあるまいというのはわかっていた。おそらくは戦況を不利と判断した時臣がサーヴァントを撤退させたのだろう。あれだけ圧倒的に感じられた黄金のアーチャーを前に、雁夜のバーサーカーは一步も譲らなかつたのだ。代々血を重ねて磨き上げた遠坂の魔術に、雁夜はたかが一年でものにした付け焼刃の魔術で、それでも充分、互角に張り合ったのだ。

「……ふふ、ははは……」

憔悴し、脱力しきつた状態で雁夜は乾ききつた笑いを漏らした。

「（ やつたぞ。あの高慢で恥知らずの魔術師に、自分のような人間を常に見下し続けてきた奴の顔に、ついに泥を塗つてやつた。まだ序の口だが、このまま行けば桜ちゃんの為に聖杯を手に入れることだって不可能じゃないかもしれない）」

僅かに湧いた小さな希望に一人喜ぶ雁夜。だが、そつ気を抜いた矢先にバーサーカーが次なる標的をセイバーに見定めて突進していった時、他の誰よりも狼狽したのは雁夜自身であったのは言うまでもない。

「やめろ・・・戻れ！戻ってこいバーサーカー！」

声に出してまで呼びかけて、思念を送る。この程度の単純な指示ならば離れた位置からの念話だけでも充分なはずなのに、黒い騎士はまったく応じる素振りすら見せない。むしろバーサーカーの興奮によって要求された魔力量が、鎮まりかかっていた刻印虫を一齐に励起させ、再度雁夜の肉体を激痛の渦に突き落とす。

「バーサーカーアツ！やめろオ！！やめてくれエ！！」

あまりにも酷い痛み故、雁夜の声は絶叫に近い。もはや令呪を使うだけの精神的猶予もなかった。苦痛の奔流に攫われて、雁夜は遠退きかかる意識を手放さないよう繋ぎ止めておくだけで精一杯になっていた。だから周りに反響した自らの声にも気付かなかった。

『バーサーカーアツ！やめろオ！！やめてくれエ！！』

「！？今の声・・・」

第二戦目開始と並行して雁夜の搜索をしていた伽耶は突如鳴り響いた絶叫の声に振り返る。いりくんだ水路の中から聞こえてきた声の

残響を頼りに一気に突き進んだ彼女は視線の先に白髪をフードで隠した男性を捉えた。息が荒くもがき苦しんでいる様子が見られるので慌てて駆け寄り声をかけた。

「大丈夫ですか！？しつかりしてください！！」

「き・・・み、は・・・？」

辛うじて意識はあった。掠れた声で朦朧と返事をする雁夜を楽な体勢に一先ずさせると伽耶は彼の容態を簡単に解析し、背中に背負っていたバツクを下ろして中から深い緑の液体が入った幾つかの試験官を取り出した。その中から彼女は『鎮静』とご丁寧にラベルが貼られた一本を選択し栓を開けた。

「話は後です。これを早く飲んでください！！」

半ば強引に押し付けるように口へと持っていかせると、雁夜は一瞬苦虫を大量に噛み潰した酷く皺の寄った表情をとったが十秒も経たないうちに段々と落ち着きを取り戻していった。しかし、それでもなおキツそうな様子は消え失せてはいなかったが。

「あ・・・ありがとうございます。大分さつきより楽に・・・なったよ・・・  
・・・ところで、君は一体？」

「私は　　久城伽耶といいます。・・・貴方と同じ、『聖杯戦争に巻き込まれた』人間の一人ですよ。間桐雁夜さん」

それから彼女は淡々とキヤスターを召喚するに至った経緯とその後、に魔術師として身を置くことになった日々を話すことになった。運悪く家族が殺されてしまったこと、運良くキヤスターを召喚して



一人助かったこと、キャストが自分の身の安全を確保するために大変尽力してくれたこと。そのどれもが忘れることができない彼女のここまでの道のりであったことを伽耶は伝えた。その証拠に瞳からは自然と涙がこぼれ落ちている。

そして最後に彼女はキャストが非常に悩んでいた雁夜の聖杯に願うモノについて問い質した。

「雁夜さん、私もキャストも出奔していたほどの貴方が家の為に『根源』を直指すとは考えられないんです。だから、貴方の口から聖杯を求める真の理由を教えてください。・・・お願いします」

「・・・俺と同じ、魔術師に成り立ての・・・君になら話してもいいかもしれ　ゴホッ、ゲホッ!!!」

敵のマスターだというのに治療まで施してくれ、話さなくてもいい過去を話してくれた伽耶の思いに雁夜は敵意がなく本気で助けようとしてくれているのだと理解する。聖杯戦争という馬鹿げた魔術師の争いに参加せざるをえなくなった者同士の貴重な邂逅をここで無駄にしているのだろうか。そう思った雁夜は自分よりも遥かに幼い、未来ある彼女に敵対する気にはなれなくて参戦した理由を話そうとした。が、ここで万全ではなかった身体が悲鳴を上げて彼の口から紅い液体を飛び出させる。

液体が血液であることは伽耶にもその色からすぐに確認できた。しかし、問題はその液体に絡まって飛び出してきたであろうミミズのような無数の　蟲。

「　　ひっ!?!」

およそ人体から出てくるはずのない存在の出現に思わず悲鳴を上げる。伽耶の驚いたその姿に仕方がないと落ち着いて雁夜は言葉を続

けた。

「俺の身体にはね・・・間桐の刻印虫つていう奴が巢食っているんだ。素質はあっても・・・くっ、魔術回路が乏しい今の間桐はそうやって擬似魔術回路を構築させ魔術を行使させる」

「で、でも、そんな体になってまで何を願うんですか！！聖杯を勝ち取ったとしてもいつか死んでしまいますよ!？」

「そうだな・・・けど、元より覚悟の上なんだよ。俺よりも、酷い目に遭わされている子供がいるんだからね」

その子供の名はキャスターが予想していた通り、遠坂から容姿に出された子供『間桐桜』だった。

「桜ちゃんには何不自由ない明るい人生を歩んで欲しかった。それこそ魔術なんてものに関わらない一般人としての人生をだ。なのに、出張先から帰ってきてみれば」

暗い表情で娘を養子に出したことを語る桜の母と姉がいた。実家に帰れば蟲蔵で虚ろな瞳のままただ陵辱される桜がいた。そうなる前に自分が出奔などせずいれば回避できた結末だったものを。やるせない表情で拳をコンクリートの地に雁夜は叩きつける。

「時臣は悲願とやらのために娘を簡単に切り捨てたんだ！！だから、その願いを叩き潰して俺は・・・!!」

「・・・桜ちゃんの人生を、取り戻すんですね」

「ああ。その為だったら俺は命を落としたって構いやしない」

失明し白く濁った片目であってもその意気込みと決意は力強く伝わってきた。だから、伽耶は思った……この人は死なせてはならない人間なのだ。

魔術師としてではなく人としての願いを雁夜は叶えようとしているのだ。この命と賭けた努力を無駄にしてはいけない。

「……ならば、契約 しましょう。 貴方と桜ちゃんを救うために」

伽耶の右手には一見すると何の変哲もない羊皮紙が一枚だけ存在していた。

地上では地下で行われているマスター同士の邂逅とは違って変わって、緊迫した状態に陥っていた。

「まずいな・・・」

ライフルのスコープ越しに戦況を見た切嗣は毒づく。

現在の状況はセイバーとバーサーカーの一騎打ち状態。その横にはほぼ無傷のランサー、ライダー・キャスターが控えている。弱肉強食のバトルロイヤルにおいては、あからさまな劣勢に立たされるのは最悪の展開だ。他のサーヴァントのマスターたちは当然のように考えるだろう。この場でバーサーカーに加勢すれば、あの最優のサーヴァントであるセイバーでも簡単に脱落させられる、と。

付け加えて、その後で消耗したバーサーカーを仕留められれば一挙両得。彼らは最低限の労力でもって二人の敵を脱落させられる・・・という魂胆だ。

ライフルの照準を頭上へと向け、デリッククレーンの上を改めて確認した切嗣の瞳には髑髏の面のアサシンがずっと映り込んでいる。迂闊な行動は切嗣自身の命を危うくする。故に切嗣には静観以外の選択肢はなかった。

「貴様は・・・一体!？」

瞠目するセイバーに答えを返すはずもなく、黒い騎士は裂帛の気迫とともに鉄柱を振りかぶり続ける。だが、次の大きく振りかぶった鉄柱の一撃はセイバーにまで届くことはなかった。

なんと、長さ二メートル余りもあった鉄柱が、その半ばあたりから切り落とされて宙に舞ったのである。セイバーの宝剣と鎧を削るほ

どに強固だったバーサーカーの疑似宝具。それを藁しべのように容易く両断してのけたのは、闇に閃く一条の紅だった。

呆気に取られるセイバーの前に、ランサーの背中が割り込む。先程までの敵であった騎士王を背後に庇う態勢で、艷貌の槍兵はバーサーカーと対峙する。

「悪ふざけはその程度にしておいてもらおうか。バーサーカー」

右手の長槍      『破魔の紅薔薇』<sup>ゲイ・ジャルグ</sup>の切っ先を黒騎士に突きつけて、ランサーは冷やかに言い放った。打ち合った宝具の魔力を打ち消す彼の赤槍であれば、バーサーカーの黒い魔力に侵蝕された疑似宝具であるうとも、ただの鉄塊と化すに違いない。

「そのセイバーには、この俺と先約があつてな。・・・これ以上下らん茶々を入れるつもりなら、俺とて黙ってはおらんぞ？」

「ランサー・・・」

死闘の最中ではあつたが、これにはセイバーも感極まるものがあつた。この槍の英霊は、誇りの形においてまさに彼女が奉ずる『騎士道』に同じく忠実であつた。

とはいえ、それを天晴れと評する者ばかりがこの戦場に集つたわけではない。そんなものは必要ないとき切り捨てる者もまた存在した。

『何をしているランサー？      セイバーを倒すなら、今こそが好機であるつ』

姿なき声が冷徹にそう糾した。不興も露わな声音は、よりにもよつてランサーのマスターのものである。だがランサーは、この英霊に

しては意外なほど厳格な面持ちで、

「セイバーは！必ずやこのディルムッド・オディナが誇りに賭けて討ち果たします！」

マスターへ向けて、そう虚空に向けて声高に言い放った。

「何となれば、そんな狂犬めも先に仕留めて御覧に入れましょう。故にどうか、我が主よ！この私とセイバーとの決着だけは尋常に・・  
・『ならぬ』　　！？」

熱を自然と帯びたランサーの嘆願を非情に断ち切り、彼のマスターは、より一層冷やかに断言して告げた。

『ランサー、バーサーカーを援護してセイバーを殺せ。令呪をもつて命ずる』

緊迫した空気での場が凍りついた。

令呪。サーヴァントに対する絶対命令権。いかな英霊であろうともこれに逆らうことは不可能だ。故にランサーにはもはや自由意思などはなく、反転した赤槍の切っ先が、ぐるりと強りを上げてセイバーに襲いかかった。咄嗟に飛び退いた彼女の眼前を、長短二本の魔槍が立て続けに擦過し空を切った。

「ランサー・・・っ！」

何故、と呼びかける途中で、セイバーは言葉に詰まった。彼女に向き直ったランサーの、怒りと屈辱で歪みきった悲痛きわまりない表情が目に映ったからだ。令呪に束縛されたランサーの身体は、もは

や彼個人のものでなく、サーヴァントという冷酷無比な機械装置・  
・つまり、操り人形でしかなかった。英霊デイルムッドが鍛え上げ  
た技と能力の全てが、彼の信条とは関わりなしに発揮され、マスタ  
ーの至上命令を遂行するためだけに動員される。その無念さは少な  
からず理解できた。

そんなランサーの傍らに、バーサーカーが進み出て立つ。状況が変  
わりはしても、依然、黒い騎士の標的はセイバーのみであるらしい。  
さつきランサーの赤槍で両断された鉄柱を、今度は長剣よろしく正  
眼に構えていた。若干形状が変わったところで、その宝具には何の  
支障もないようだ。だが、状況は最悪、絶体絶命だった。

左手のハンデがなければ、あるいは活路も見出せたかもしれないが、  
今のセイバーはバーサーカー一人に対処するだけで既に限界にあっ  
たのだ。ここにきて更にランサーまでをも敵に廻しては、万に一つ  
も勝ち目はない。

「・・・セイバー・・・濟まん・・・」

ランサーは苦しげな呻きと裏腹にじりじりと間合いは詰められる。  
左右の二槍からは殺意を秘めた魔力が陽炎のようにゆらめき立ち上  
り始めた。その時だった。

「フツ・・・ならば、僕は手負いのセイバーに敢えて加勢すること  
にしよう」

ランサーがセイバーを庇うために割り込んだ間に今度は傍観してい  
たキャスターが入り込んだ。この異常事態にライダーは面白い展開

になったと嬉しそうな顔を浮かべ、ランサーは顔では言い表せないものの内心キャスターがセイバーを庇ってくれたことに対し感謝していた。

「キャスター、加勢してくれるのは有り難いが……大丈夫なのか？」

セイバーは自分の不利な状況が回復したことに素直に喜ぶことができなかつた。なぜならば、相手は前線で戦うには不向きとされる最弱のサーヴァント、キャスター。彼が割り込んだところで精々アイリスフィールを逃がす程度しかできないだろうと判断していたのだ。

「大丈夫でなければ今頃、ライダーと共に君がやられて無様に死ぬ様を見届けていただろうね。でも、それをしなかつたのだから

」

「信じても……いいのだな？」

「ああ、任せてくれ。……僕がただの、最弱クラスの魔術師でないことを証明してあげよう」

手にしていた長杖とロープを脱ぎ捨てると彼は黒衣の、拳法家のような服装を周りに晒し身構える。魔力が彼の右腕と左腕を中心として渦を巻くように集まっていくと、無数の閃光を発生させうねり始めた。その光景は一介の魔術師から見ればかなり異様であった。何せキャスターの腕には何を目的として発動しているのかわからない魔力が集まっているのだ。疑問の問いに答えるようにキャスターは魔力に対して呪文を付加する。



「雷の暴風、固定・掌握。魔力充？……………」

術式兵装、疾風　　迅雷ッ！！！！」

勢い良く叫ばれた謎の、目的が見えない詠唱はすぐに劇的な変化をキャスターにもたらした。

「……………あれはっ!？」

「ほほう……キャスターめ、面白く変わった術を使いおるな。なるほど、前に出てきてもおかしくない」

ウェイバーの驚愕とライダーの関心の先には、一変して姿を変えた青白い閃光の如く身を輝かせた赤毛が異様なほど伸び進んだキャスターの姿が目映った。同時にアサシンを警戒しつつセイバーを守っていた切嗣さえも注目する。

「……自らが発生させた魔力の塊を取り込んだ? いや、それだけでは何の意味もない。ただ自分の魔力を出し入れしただけだ。なら、アレは一体……」

今まで自分が戦ってきた魔術師とは一線を画している、データのな戦闘技法を何とか解釈しようとする切嗣。しかし、他の魔術師と同じくしてキャスターの変身に対する答えはそう簡単に得られはしなかった。また、アサシンを使役して戦況を観ていた綺礼もキャス

ターの変貌を通信器越しの時臣に伝え考察していた。

『綺礼、キャスターのステータスはどうなっている？』

「それが・・・キャスターにしては筋力・耐久・敏捷がどれもランクBと総じて高いのです。魔力も宝具も平均してAと高いようです」

通常、キャスターとは魔力の扱いに優れているだけで他のステータスはそれほど高くはない。筋力にしても良くてランクC、悪くてランクEのはずである。だというのに今回のキャスターはかつての聖杯戦争のデータからして全体的に能力が高かった。

『戦闘スタイルがいまいち掴めないな。聞くところによれば姿が変わったといったがどう変わった？』

「魔力の塊・・・いえ、渦のようなものを両腕に集中させた後、何やら短い詠唱を口に出し、その渦を握り締めました。現在の姿は長髪で青白く発光している状態のようです」

その報告を聞いた時臣にさえもキャスターの異様さは理解できなかった。話からして魔力で何らかの現象を発生させたものを取り込んだと考えるのが筋だが、そんな魔術の行使の方法など聞いたことも見たこともなかった。

「ただ、アサシンの報告によるとキャスターの発生させていた魔力の渦には周辺から明らかに何か別のモノが集まっていたらしいです。大気中の魔力を集めていたということはないとアサシンは言っておりますが、どうしますか導師」

「現状ではどうすることもできやしないだろう。ただ言えることは一つ　キャスターは最弱と考えないで臨んだ方がよいのかもしれない」

「・・・でしょうね」

判断としては間違っていない。なぜならば彼らはキャスターの変貌以外にも異様なモノをその目に焼き付けることになったからだ。

「さてと、槍兵と狂戦士相手に拳一つで挑むというのも無理があるからな。新しい獲物を手にすることにしよう」

懐に手を突っ込みモゾモゾと動かした拳匂、光と共に彼が手にしたのはバーサーカーが手にしている鉄柱よりも細い一本の棒。三人が持っている獲物とは違い、全く刃となる部分を備えていない武器だった。これでランサーとバーサーカーを相手にするなど正気の沙汰とは思えなかった。

武器を取り出してすぐにこめかみに指を当てたキャスターは一寸の間だけ、考え事をする仕草をすると後ろにいるセイバー、そして戦車チャリに乗ったライダーに語りかける。

「僕のマスターからの命令だ。夜明けも近い、これ以上の戦闘を長引かせても意味はないだろう。故に　一撃だけ加えて二人にはお帰りいただいてもらえとのことだ」

「そうだなあ・・・これ以上続けて初戦から強者が消えてしまったら、後の戦いに味気なさが残るに違いない」

「だろう？ならば、幕引きとして我が宝具の一つであるこの棒を用いて今宵の戦いを締めくくろう」

狙いは相変わらずランサーとバーサーカーであることには変わりない。しかし、目的は倒すことではなく撤退を強制させることにある。キャスターのマスターたる伽耶が何を考えているかもわからない他のマスターはただ夜明け近い戦いの終止符に見入っていた。

「術式装？、魔杖雷鉾槍化」

再度紡がれたキャスターの詠唱。それは手に持っていた一振りの棒にさえも影響し、包み込むように雷をその周りに帯びさせ次第に魔力を増幅させていった。魔力が限界まで至ったところで彼は大地を蹴って飛び上がる。右腕を自身の後方へと移動させ勢いづけられた雷の棒は今か今かと急かしているようにも思えた。

「上手く避ける　術式連結、暴雷・金箍棒！！」

瞬間、光が爆ぜた。その場にいた誰も視界を白い世界の中へと誘い、周辺にあったコンテナの一部を派手に溶かし尽くす。敏捷が優れているランサー共々バーサーカーは回避したが、アーチャーとは違った圧倒的な目の前の光景に目を奪われていた。何故なら彼らがつい先程まで立っていた場所には

何の変哲もない棒だったものが巨大な円柱となって聳え立っていたのだから。

キヤスターは自分の務めは終わったと言わんばかりにライダーの招集に負けない大音声で叫んだ。

「倉庫街に何処いどこに潜むマスター、ならびに今宵の決闘を見届けていたマスターに告ぐ！！我が宝具は伸縮自在にして如何なる場所に潜もつとも逃げ隠れようとも貴様らを襲うことが可能だ。これ以上まだ戦いを続け、英霊達の誇りを穢すとならば今すぐにでもこの宝具を貴様らの下へ届かせよう！！」

未だにスコープで戦況を観ていた切嗣は数秒考え込んだ後、ライフルを構える体勢を崩しインカム越しの相手に連絡を取る。

「・・・舞弥、撤退だ。こちらとしてもこの状況での戦闘終了はありがたい」

『はい、了解しました』

セイバーがランサーのせいで全力を出せなくなっている以上、ここで戦わせ続けるのは無謀というものだ。脱落したはずのアサシンの姿もある以上迂闊に他のマスターへの攻撃はできない。初戦にしては十分な情報を確保できた切嗣は音を立てることなく確保した場から静かに消えていった。

『撤退しろランサー。今宵は、ここまでだ』

指示を仰ぐべく待機していたランサーは、安堵の吐息とともに槍の切っ先を下げた。

「感謝する、魔術師の王よ。最後に良いものを見せてもらった」

美貌の槍兵の呟きに、キャスターはニヤリと笑ってこう返した。

「騎士の戦いに卑怯という文字はいらないだろう。なあ、ライダー」

「うむ。実にそうだな」

振られたライダーも満足できる戦いが観れたことに感謝し、その場に残った全ての英霊に礼を言っていた。その途中でバーサーカーも消え失せたが消える寸前で頭を下げたようにも思えた。

決着は、いずれまた・・・そう言い残してランサーも夜明けの戦場

を後にし、キャスターもまた杖に跨って彼方へと飛んでいった。

そして、破壊の嵐が吹き荒れた戦場に、静寂が訪れる。

アイリスフィールは、ようやく張りつめていた緊張から解放されて安堵の吐息をついた。あらためて見渡せば、辺り一帯の破壊の程は凄まじい限りである。当然と言えば当然だった。六人ものサーヴァントが一堂に会し、うち何人かは惜しげもなく宝具を炸裂させたのだ。（実を言うと七人なのだが）

「序盤からここまで派手なことになった聖杯戦争なんて、過去にあったのかしらね・・・」

否、あるはずもなかった。

しかし破壊の痕跡は、アイリスフィールたちが危惧するような事柄ではない。聖杯戦争の隠匿は聖堂教会の監督役が責任を負う。この大震災さながらの有様も、きつと教会の組織力を動員して、ぬかりなく糊塗することだろう。セイバーは黙したまま、ライダーやキャスターの飛び去った空の果てを見据えている。その伶俐な横顔には、死闘から持ち越した興奮や憔悴の色はない。ただ凜然と静かに戦場の跡に佇む少女の鎧姿は、まるで一葉の画であるかのように美しく侵しがたかった。

だがアイリスフィールは、そんなセイバーの端然たる振る舞いとは裏腹に、彼女が負っている甚大な傷について知っている。

「セイバー、左腕は

」

「・・・はい、手痛い失態でした。まずはランサーと決着をつけて

傷の呪いを解かないことには、他のサーヴァントとの戦いにも差し障ります」

淡々とそう告げる騎士王の口調には、アイリスフィールに不安を与える要素など微塵もない。そんなセイバーの気丈さが、むしろアイリスフィールの胸に堪えた。

「・・・ありがとうセイバー。あなたのお陰で、生き残れた」

一日を伏せてそう言うアイリスフィールに、セイバーは微笑みを向ける。

「私が前だけを向いて戦えたのは、背中を貴女に預けていたからです。アイリスフィール」

彼女らは夜明けの太陽に照らされながら、聖杯戦争の次元の違いを理解しつつ危機的な状況になりながらも生還できた喜びを静かに噛み締めていた。



「……では、以上がキャスターとバーサーカーの陣営で取り交わされる契約の内容となるが、異存はないんだな間桐雁夜？」

「ああ。桜ちゃんがそれで助かるのなら……喜んで契約するよ」

マスターの下へ舞い戻った二体のサーヴァントはマスター同士の取り決めにより特定の条件下以外での一切の戦闘を禁じられていた。互いに先程まで相対していたというのにマスターを挟んで再びあいまみえるとは何とも言い表せない奇妙さがあつた。

「決まりだ。これよりキャスターのマスター久城伽耶とそのサーヴァントはバーサーカーのマスター間桐雁夜及びバーサーカーと手を組み聖杯戦争を勝ち残ることを約束しよう」

羊皮紙を綺麗にまとめ、ローブの中にしまい込んだキャスターは何時までも異臭漂う地下水路にいる必要はないと懐からパスケースのようなものを取り出し黒くて長いポロ布を首に巻きつける。

これは「天狗之隠蓑<sup>テングノカクレミノ</sup>」という身体に被ると、布の内部に身体が隠遁され表面も背景に同化するという、忍者の使う隠れ蓑のような宝具であり高度二〇〇〇メートルから観戦していたキャスターの存在を見事隠して仰せていたものだった。ただしこれにはもう一つ機能が  
あり

「マスター、それに間桐雁夜、バーサーカー。追撃はないとは言え

ないから安全策としてこの衣の中に入っていてほしい」

「いや、でも入るって言うてもどうやって……」

むしろ入るといふよりも被るといふ行為のほうが正しいのではないかと雁夜は詰問する。そこでキャスターは一度見本を見てもらうことにし、伽耶を近くへと呼び寄せ衣を被ってもらった。すると、どういふことだろう……まるでマジックのように伽耶の姿形は消え失せコンクリートの床と同化してしまった。暫くして同じ場所から消えていた伽耶が出現する。

「中はどうだったマスター？」

「……びつくりするほど和室でした。でも、あれの中なら安心して移動できそうです」

そう、「天狗之隠蓑」テングノカクレミノのもう一つの機能とは他人を中に入れて移動することができるのだ。これならば持ち歩くキャスター一人を代償に今いる三名の安全を確保しつつ伽耶が住まう桐春の別荘へと向かうことが可能だった。

恐る恐る雁夜は伽耶に手を引かれて中へと入り込む。だが、伽耶と同じ感想しか彼の中には思い浮かばなかった。

「本当に……和室じゃないか……!!」

雁夜は他のマスターと違って、キャスターの戦い方ではなく彼の宝具の出鱈目さに驚愕し、疲れきった身体を気持ちの良さそうな畳の

上に横にならせて微睡みの中に身を任せた。

### キャスター及びバーサーカー陣営による同盟内容（強制証文）

1．両陣営は今後一切互いを敵として認識してはならず、戦闘をすることを禁ずる。（特例として、キャスター及びバーサーカーのみしか残りのサーヴァントが残されていないのならマスターを殺さないことを条件に戦闘を許可する）

2．間桐雁夜と間桐桜（旧名：遠坂桜）の救済を目的として、キャスター陣営は彼らが一定の回復レベルに達するまで協力することを惜しんではならない。具体的な基準として刻印虫の排除、及びその後のメンタルケアまで行うものとする。

3．聖杯戦争中にお互い知り得た情報は包み隠さず話すものとする。  
（他陣営について）

と、ここまでが伽耶と雁夜の契約した内容である。そして、これに加えてキャスターと雁夜の間で交わされた契約があった。それは

4・間桐臓硯をキャスターは間桐雁夜と共に討ち滅ぼすこと

即ち、蟲妖怪を殺すことであつた。

act・7 死を賭けた乱戦（後書き）

・暴雷・金箍棒

オリジナルの闇の魔法。如意金箍棒の複製とされるアーティファクト「シンチンテツジサイコン神珍鉄自在棍」に雷の暴風を付加した融合魔法。魔杖雷鉾槍化を用いて全体に雷をまわすことで初めて発動可能にする。

キャスター無双過ぎているのか・・・？意外に出番少なかったよう  
な。ただ派手に終幕しただけじゃね？

自分でも一日かけて何を書いているんだと思いますが、これからも  
よろしく願います。

では、良いお年を・・・

act・8 反逆への前奏曲（前書き）

新年あけましておめでとございます。

去年は色々とご迷惑をおかけしましたが、今年もよろしく願います。

キャスターが幕を下ろさせた戦いの顛末を見届けたところで、言峰綺礼は現地のアサシンに帰還を命じ、知覚共有を断ち切った。

デリッククレーンの上からの眺望と、潮の香る夜風の感触が意識から分断されると綺礼の五感は全て元々いた教会の地下室へと引き戻される。いつの間に現れたのか、璃正神父もまた綺礼の傍らに佇み、彼が時臣に宛てて語る実況に聴き入っていたらしい。戦いの終わつた今は、表向きの監督役としての職務を果たすべく、さっそく携帯電話で誰かに指示を送っている。

「 神明二丁目、そう、海浜倉庫街だ。損壊は広範囲で甚大。・  
・ああ、それでいい。都市ゲリラの線で処理しよう。Dプランに沿って、あとは現場の判断で頼む 」

璃正の指示で動く聖堂教会のスタッフは、既に冬木市のあちこちに分散して待機している。彼らは聖杯戦争から引き起こされるであろう様々なトラブルに対処するべく、事前からぬかりなく準備を整えて冬木に潜んでいる。警察や自治体への根回しも万全だ。おそらく明日の朝刊では、あの倉庫街の惨状が、とことん事実を歪曲された形で紙面を飾ることだろう。そこまで彼らは影響力を持っていた。

采配に奔走する璃正を横目に、綺礼は今夜の戦いから明らかになつた事実関係について頭の中で分析する。

時計塔のエリート魔術師ロード・エルメロイが、一度は英霊イスカ

ンダルの聖遺物を手にしておきながら紛失したという情報は、時臣の間諜によって事前にもたらされていた。にも拘わらずイスカンダルはライダーのサーヴァントとして聖杯戦争に参戦し、またそのマスターらしき少年に対しては、ランサーのマスターが並々ならぬ因縁を匂わせていた。即ち　まず間違いないく、ランサーのマスターはロード・エルメロイであろう。彼はあのウェイバーとかいう・・・時計塔での門下生であろう少年に聖遺物を奪われた後で、新たに英霊ディルムッドに縁の品を入手したものと思われる。

間桐の術者がバーサーカーを召喚したことは、監督役たる父、璃正に対して間桐臓硯から申告があった。当然、それは綺礼と時臣にも筒抜けだったわけだが、まさかあれほど強力なサーヴァントであったとは予想外だった。敵の宝具を奪取するというあの奇怪な能力は、時臣のギルガメッシュにとって天敵となるに違いない。

時臣を利用する展開を仕組むとすれば・・・まずは、他のサーヴァントにバーサーカーを潰させる必要がある。この場合ランサーが適任だ。ディルムッドが見せた宝具『破魔の紅薔薇』は、バーサーカーの能力を封じる決め手になる。第二戦目を壮大に締めくくったキャスターのマスターは、結局姿を現さなかったが、今後の展開次第ではいずれ姿を晒すことになるだろう。バーサーカー・キャスターを除いて全てのサーヴァントの真名が明かされたのは予想外の展開であったが。

脅威度の高いセイバーのランサーによるダメージは後の展開に尾を引く甚大なものだ。ギルガメッシュが盛大に宝具をひけらかす羽目になったのはまずかったが、その真名までは露見せずに済んだし、アサシンが健在であるのも気付かれていない。状況は遠坂時臣の陣営が断然優位にある。



しかし、疑問に思うのは最後に宝具を開帳したキャスターの行動だ。いくら戦いを長引かせたくはないというマスターからの命令があったとしても、自身の切り札となる宝具を用いてまで戦いを中断させるのはあまりにも無防備というものではないか。伸縮自在の宝具と自ら言い放っていたことからキャスターの真名はかの西遊記に登場する齊天大聖せいてんたいせいこと『孫悟空』と時臣は考慮の一つとして睨んでいるも何処か腑に落ちない点が多い。作り話とされる西遊記の原型となつた大唐三蔵取經話には三蔵が猴行者・・・猴サルの行者を連れ取經の旅をしていたという説話が残っているが、キャスターが果たして孫悟空で当たっているのか。もしも正解であるならば魔力以外の謎の力にもある程度検討がつくかもしれない。信じがたいが魔力以外の力もこの世界には存在するのだ。

冷淡に、そんな分析を脳裏で整理したものの、綺礼の胸の内には極めて高鳴るものがなかった。聖堂教会の意向通りに、遠坂時臣は勝利を収めることだろう。そうなるよう導くという綺礼の任務にも、さほどの障害は予見されなかった。これまでと何ら変わらない、何を期待するほどのこともない退屈な任務。それがこの三年の総括なのだ。

「恐れながら、綺礼様」

乾いた感慨に耽る綺礼の傍らに、黒い影が音もなく参じる。髑髏の仮面と黒いローブの女　倉庫街での斥候を務めたとは別のアシシンである。

「・・・何だ？」

「はい。教会の外で気になるものを見つけましたので、ご報告を」

そう言つてアサシンが恭しく差し出したのは、彼女が首をねじ切つて殺した蝙蝠の死骸だった。死後幾許もないらしく、いまだ微かに体温が残っている。

「 使い魔か? 」

「 はい。結界の外ではありませんが、明らかにこの教会を監視する意図で放たれたものかと 」

「 . . . . . 」

おかしな話だった。この教会は聖杯戦争における中立の不可侵領域として定められている。徒に干渉しようものなら、監督役によって令呪の削減や一定期間の交戦禁止といったペナルティが課されることもあるのだ。そんなリスクを冒してまでこの教会を監視する理由は、誰にもないはずだ。 たった一つの仮定を除いては。もし綺礼がアサシンを失い教会に保護された顛末を、狂言ではないかと疑っているマスターが既にいるとしたら?

「 . . . . . 」

アサシンの手から蝙蝠の死骸を摘み上げ、綺礼はさらに奇妙なものを目に留めた。蝙蝠の腹にバンドで縛りつけられた、手の平大ほどの電子部品。ボタン電池と おそらくはワイヤレスのCCDピンのホールカメラ。この蝙蝠が魔術師の使い魔だとするなら、これほど奇妙な組み合わせはない。魔術師という人種が世間一般のテクノロジーを軽蔑し忌避する傾向にあるのは綺礼とて知っている。それこそ師事している時臣などはその最たるものだ。使い魔の視覚を借りただけでなく、機械的手段で映像記録まで得ようなどという発想は、およそ尋常な魔術師には思い及ばない。

『 徹底して手段を選ばない。魔術師であるという誇りを微塵も持ち合わせていない 』

まるで不意の稲妻のように、かつて時臣から聞かされた言葉が綺礼の脳裏に蘇る。

そうだ。同じ魔術師でありながら、魔術をただの手段としか見なさず、ただの電子機械と同列に取り扱うような神経の持ち主であれば、使い魔にこういう細工を施すことも、やりかねないだろう。

意図も正体も判らない、ちっばけな小動物の死骸に、綺礼は暫しの間見入っていた。それは六人のサーヴァントが激突した今夜の大乱戦よりも、より深く重い意味合いを伴って、彼の心に位置を占めていた。

キャストに輸送され伽耶とバーサーカー陣営は取り敢えず今後の方針を具体的に定めようと、彼のテリトリーにして伽耶の現在の住まいである桐春の別荘にて身を落ち着かせていた。そのなかで雁夜は魔力の消費量が激しいバーサーカーを使役するのに余程神経を費やしたのか病人のように倒れ動かなくなってしまう。仕方がないの

で間桐の刻印虫対策として、活動を抑制する魔法薬を点滴で彼の身体に注入しつつ体力の回復をキャストは図ることにした。

「・・・すう・・・すう」

まともに寝ることなど久しぶりだったのか雁夜は天狗之隠蓑に入っ  
てすぐに眠りについてからずっとこの状態だった。椅子に座りこん  
で付き添っていた伽耶は腕を組んで壁に寄りかかったまま無言でい  
るキャストに小声で雁夜を起こさないようにそっと話しかける。

「キャスト、雁夜さんの容態はどうなの？」

「・・・体内に巣食っている刻印虫の活動を抑制してはいるけれど、  
根本的な解決にはまだ至っていない。無理に摘出を僕が行なったと  
してもまず彼の体力が持たないだろうから」

医術に若干の心得があるというキャストは簡易的な摘出作業と縫  
合作業はできるが、本場のプロには悪い意味で到底敵わないレベル  
のものだという。つまり、三時間で手術をプロが終わらせるのなら  
ば、彼は六時間かかって終わらせるということだ。余命一年と宣告  
されている雁夜の今の体力を考えればかなり厳しく困難と思われる。

「その・・・くらい、耐え・・・てみせるさ・・・！！」

何時の間にかうつすらと目を開けて起きていた雁夜は途切れ途切れ  
になりながらもキャストの言葉に自力でそう返した。慌てて伽耶  
が駆け寄り様子を見るも点滴がされていない左腕を使ってそれを制  
す。

「無理をしない方がいい。もう少し眠っていなくて大丈夫なのか」

「ああ、なんとか・・・ね。こうしてまともな寢床で寝るのも久しぶりだったから余計にくっすり眠れたよ・・・この薬が効いているのもあるのか？」

顔色が初めて会った時よりも少しはつきりしてるようにも見える彼は右腕に繋がれている点滴に視線を向けてキヤスターに問いかけた。一方でキヤスターは前髪で目を隠し影を作ると暗い表情で受け答える。

「・・・その薬は、かつて僕が関わった事件で使われた薬を再現してみたものなんだよ。効果は確かにあるんだけど」

「けれど、どうしたんだ？」

まるで話したくないかのように口を一度閉ざした彼は、その場にいる人間にバレないように奥歯を噛み締めてさらに顔に影を落とす。組んでいた腕の先の拳はより一層握りを増して、キヤスターの心の彼方にある悲しみの記憶を呼び覚ました。・・・意を決して彼は再び口を開いて真実を語る。

「その事件での使用者は薬の投与が遅かったせいかな、投与から僅か数日で亡くなった」

その事件があった時、教え子の実家に用事があったって京都へ訪問していた彼はたまたまその奇怪な事件に巻き込まれた。事件の内容はある巫女として修行中の少女の体調が不安定となり一向に落ち着かないというものだった。すぐさま検査が行われたが一向に原因が判明しない。原因が判明しないなら対策もたてられない。そこでその少女のこれまでの足取りを洗うことになったキヤスターは事件を追

つていくことで、ある禁忌の術を使う呪術師がいると噂の村に彼女が訪れていたことを突き止めた。

「その呪術師が得意としていたのは……寄生虫を操る術だったんだ。そのせいで彼女の身体は毎日のように体の内から犯されていった」

寄生虫といっても現代の医術や生物学で判明しているような寄生虫ではない。強いて言うのなら妖怪のような類といったほうが正しいか。

「元凶たるそいつを捕まえた僕はすぐに彼女を回復させる薬の精製作業を手伝った。可能な限り早く飲ませようと努力した。けれども飲ませてから容態が安定したかと思えば……」

「手遅れだったという、ことが……」

キャストが過去の英霊ではないことは少なからず雁夜は本人から伝えられている。教師をしていたとは思わなかったが、平行世界での魔術師のあり方と立場について聞ける程度に聞かされた彼はやるせない表情のキャストに同情せざるをえなかった。

「（救える力はあつたのに救えなかったことを、キャストは後悔しているんだな……だから俺にも手を伸ばして救おうと）」

自分や桜がかつてと似たような状況に置かれていることを知ったキャストは今度こそ最後まで命を救いたいのだ。でなければ強制証文に書かれた四番目の記述に同意して元凶たる間桐臓硯を倒すことに賛成などしなかったはずである。

「幸い、君の容態は彼女よりはマシな方だ。まだ救える余地はある。問題は、今後どうやって刻印虫を取り除き間桐の因縁から逃れるか、だ」

「幾つかプランがあるなら言ってくれ・・・臓硯を倒したぐらいじゃ簡単に収まらないのはわかっているからさ」

刻印虫の親の役割を担っている臓硯を殺せば自分達の体に何かしら影響は出るだろう。キャスターの薬なしでは何か悪あがきとして暴走させるなど仕出かすかもしれないが、今は一先ず行動の抑制に成功しているのだから簡単には手を出せまい。しかし、その後のことを考えると大いに頭を悩ませる。

「・・・わかった、順を追って説明していこう。まずどのプランにも共通する行動として間桐の魔術関連の書物を手に入れることが肝心だ」

刻印虫の性質が状況判断でしか分かっていない以上、このまま押し切って摘出するわけにもいかない。よって、専門書となる書物を何とか手に入れて刻印虫のコントロールを完全にモノにする必要がある。った。

「この前提条件を踏まえた上で、僕が考えたプランは三つ。一つは、専門知識を有する魔術師に助力を得ること。これは間桐の魔術の漏洩という問題はあるものの人命は保証される可能性が高い。安心かつ効率のいい方法なんだが・・・」

「協力してくれそうな魔術師の確保に時間を有するかもしれない、ってことか。聖杯戦争に参加している奴らじゃ今のところ宛になりそうなのはいないしな」

ライダーのマスターは第一印象から極めて友好度がどのマスターよりも高そうなのだが、時計塔でまだ学んでいる身であるようなので大して力になってはくれそうにない。精々、自分達の知らない知識を埋め合わせてくれる程度であろう。

「まだ聖杯戦争は始まったばかりだから、どの陣営も動向が上手く掴めない。状況が変わり次第、接触可能なマスターが現れる可能性もあるが……まだ、何とも言えない」

一層のこと、封印指定の人形師を探し出して二人分の人形を造ってもらうというプランもあるのだが、一体何処に潜伏しているのかわからない以上手を出すのは無理があった。

「そうか……で、二つ目のプランは？」

「二つ目は、この世界で言う呪術協会のような存在……退魔師の一族に頼ることだ。魔術師とは関係が良いのか悪いのかは僕は知らないが必要な知識と技術は少なからず整っていると思われる。しかし、問題は一つ目と似たようなもので宛がない」

これから関係をつくるにしてもすぐに協力を取り付けて二人を助けるのに時間がかかりすぎる。もしかしたらギリ貧な結果に終わることだったあるかもしれない。だから、このプランは比較のおすすめできなかつた。聖堂教会もまた同様であつた。

「そして最後の三つ目。……無謀といい無茶な作戦だが、アーチャーの宝具から治癒に使えるような宝具をパクってくる」

「……それって出てくるまでバーサーカーに戦わせるってことか



？効率が悪すぎるだろう………」

「ああ、その通りだ。宝くじと同じような確率で出てくるものを探し出すんだからね。無謀といい無策といい絶対にお薦めできるものではないよ」

バーサーカーの相性がアーチャーにとって悪いからってまた戦わせるのはいくらなんでも無理がある。途中で空気の読めないマスターがまた乱入する恐れだってあるのだ。

「せめて、聖堂教会……いや、言峰璃正が遠坂とグルにさえなっていないければ頼れたものを」

「……アサシンが生きていたんだっただな。時臣め、汚い真似をする」

おかげで桜ちゃんに不幸が降りかかりっぱなしじゃないか、と苦しんでいるのは違った苦い顔を雁夜は天井へ向けて吐き捨てた。

そう、キャスターはクレーンよりも高い場所に待機していたことが幸いして切嗣と同じようにアサシンの生存を確認していた。いや、生存というよりも別の種類のアサシンを確認したといったほうが正しいか。遠坂邸に侵入していたアサシンと容貌が異なっていたことを理解したキャスターは改めて言峰綺礼を脅威対象として認識する。

「（言峰綺礼……お前にとってこの聖杯戦争に参加することには何の意味があると言うんだ。自分に得られるものなど何も無いという

のに・・・何故？」

昼近くになったことでより一層輝きを増した太陽の光が舞い込む部屋の中でキャスターは、一人悩みに耽りながら雁夜用の病人食を作るべく台所へと足を踏み入れた。

冬木ハイアット・ホテル客室最上階 地上三二階の高みから見下ろす眺望は、市内においては他に並ぶものがない。

高さにおいては、程なく完成が予定されている新都センタービルにナンバーワンの座を譲ることになるだろう。新都はいまだ開発途上の都市であり、ここハイアットホテルはもつとも初期に落成を果たした建築物である。今後の新都の発展に伴い、新生のホテルは続々と増えていく。だが冬木市における最高級の設備とサーヴィスを誇るホテルとしての地位を、ハイアットが後発に座を譲ることはまずあるまい。支配人と従業員全員が共にそう自負して止まず、また利

用者たちも揃って納得するだけの品質と格式を、このホテルは備えていた。

そんな最高級のスイートルームを借り切って、窓際の本革ソファを恣にしておきながらも、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトの深く鬱屈した気分はまったく晴れる見込みがなかった。彼に言わせてみれば、この部屋を誹えた俗物共は、“贅を凝らす”という意味をまったく理解していないのだ。ただ闇雲に広い部屋、ただ高価なだけの家具、華美なばかりの調度品。生まれつきの貴族であるケイネスは、俗物が背伸びをした上面だけの豪奢さというものに人一倍敏感だった。まさにこのホテルの部屋がそうだ。歴史もない。文化もない。俗物ならではの“富民像”を演出するためだけに、借り物のセンスで表面だけを豪奢に飾り立てただけの醜悪極まる豚小屋なのだ。

ケイネスは持て余す苛立ちを吐息に変換して吐き出した。

実際のところ、たかが宿の質にそこまで剥きになって怒るほど彼は狭量な人間ではない。苛立ちの源はまた他にあつたりする。据え付けのワイドテレビでは、深夜の番組編成を変更して緊急ニュースが報じられていた。ここ冬木市湾岸地区の倉庫街で発生した原因不明の爆発事故について、レポーターが興奮も露に現場からの中継を行っている。

爆発を聞きつけた近隣住民からの通報により、消防車が駆けつけたのが約四時間ほど前。まだ報道では伏せられているが、既に現場検証中の警官らは、これ見よがしにわざと撒き散らされた爆発物の痕跡を、喜び勇んで拾い集めていることだろう。その破壊が、実際は余人の与り知らぬ怪異によってもたらされたものだと露知らず愚かにも……

監督役などと息巻くだけあって、なるほど聖堂教会の手際は中々なものだった。時間を逆算すれば、ケイネスが人払いの結果を解いてから三〇分足らずのうちに、あの惨状とも言える戦場の隠蔽工作を終えた計算になる。既に真相は、現場に居合わせた者たちの記憶の中にしか存在しない。その中の一人がケイネスだ。彼こそはランサーのサーヴァント、英霊デイルムッド・オディナを従えたマスターである。

待ちに待った聖杯戦争の開幕。万全を期して臨んだ初陣<sup>ういじん</sup>。だがその成果といえ、期待したものは程遠かった。確実に仕留められるはずだったセイバーのサーヴァントを、キャスターのせいでみすみす取り逃がす、などという番狂わせは、言語道断と言うほかにない。

「出てこい。ランサー」

「は。お側に」

打てば響く速やかさで、美貌の英霊はケイネスの膝下の前に恭しく屈した姿勢で実体化した。

霊体のままでも会話に支障はなく、とりわけ降霊科の主任講師たるケイネスであれば、姿なき霊との応答は慣れ親しんだものだったが、それでも直に顔を見て会話する手段があるなら、それに越したことはない。とりわけ、このサーヴァントを相手とするときにはケイネスは、表情の此二細な機微<sup>きび</sup>まで余さず観察しながら対話したかった。それが対話ではなく尋問<sup>じんもん</sup>に近い内容であれば尚更である。

「今夜はご苦労だった。誉れも高きデイルムッド・オディナの双槍<sup>そうちゅう</sup>存分に見せてもらった」

「恐縮であります。我が主よ」

淡々と平坦に、ランサーは礼を返す。賛辞に驕ること、露骨に喜悦することもなく、また逆に不平不満を胸に秘めた様子もない。控えめで慎み深い、武人の鑑の態度であった。

だがそれがケイネスの目には、決して自らの真意を見せようとしな  
い、不埒な韜晦としてしか見られない。

「ああ、存分に見せてもらった上で問うがな。・・・貴様、一体ど  
ういう了見だ？」

「・・・と、申されますと？」

詰問の色を帯びはじめたケイネスの声音にも、ランサーは依然、慎  
みを保っている。

「ランサー、貴様はサーヴァントとして私に誓ったな？この私に聖  
杯をもたらすべく全力を尽くすと」

「はい。相違ありません」

「ならばなぜ遊びに興じた？」

そう断じられても、ランサーは決して怒りや狼狽で表情を曇らせる  
ことなく、ただ肅々と目を伏せただけだった。彼は彼なりに、この  
叱責を予期していたのだろう。

「・・・騎士の誇りに賭けて、戯れ事でこの槍を執ることは決して  
ありません」

「ほうそうか。言うではないか」

小馬鹿にしたように鼻を鳴らしてから、ケイネスはさらに追い打ちをかけた。

「なら問うが、なぜセイバーを仕留められなかった？」

「それは」

「一度ならず二度までもセイバーを圧倒しておきながら、貴様は二度とも決め手を逃した。この私の令呪をひとつ削いだ上でもなお・  
・あの最弱のクラスたるキャスターを前にしてもなお、だ」

「……………」

今度ばかりは返答に詰まり、ランサーは沈黙する。

「繰り返すがな。私は今夜の戦いを余すところなく見届けた。見届けた上で指摘しているのだ。ランサー、貴様は戦いを“愉しんでいた”

返す言葉もなく項垂れる騎士を冷ややかに見下ろしつつ、ケイネスはたっぷりとじわじわ皮肉を込めて語る。

「そんなにも愉悦だったか？ セイバーとの競い合いは。みすみす決着を先送りにしたくなる程に？」

傍目に見ればランサーの活躍とて、十分に健闘を讃えられるだけのものだったかもしれない。だがマスターであるケイネスにとっては、

それがただの健闘のみで終わったことが　　確たる結果を出せなかったことが腹立たしくて仕方がない。

元々の召還の本命であった英霊イスカンドルの聖遺物を、不肖の弟子であるウェイバー・ベルベツトに奪われたこと。そのウェイバーが分不相応にイスカンドルのマスターとなった挙げ句、果たしてサーヴァントを制御しきれず完全に暴走させていたこと。そんなウェイバーの失態が、結果として戦況を乱戦にもつれ込ませ、ケイネスのランサーの勝機さえも潰してしまったという結果・・・それら諸々についての苛立ちとは、今現在のケイネスにはない。怒りを叩きつけるべき対象はウェイバーただ一人であり、その当人が目の前にいない以上は憤慨ふんがいしたところで何の益もないからだ。怒りはじっくりと胸の内に蒸留しておき、いずれウェイバーと対峙したときに心行くまで発散すれば良いのである。そういう“外に向けた怒り”に関する限り、ケイネスという人間は極めて实际的であり、冷静かつ冷酷であった。

だがその反面、“内に向ける怒り”については、彼はまったく抑えが効かなかった。なまじ人並み外れた才能に恵まれ、失敗や挫折とは無縁の人生を送ってきただけに、彼の身内や部下が　ごく希まれにしかないことではあるが　彼の意に添わぬ結果をもたらしたとき、決まってケイネスは痴性かんじょうを持って余してしまう。それは生まれつき成功を約束され、祝福ばかりを一身に浴びて育ってきた者ならではの脆もろさとそれは言えた。

現に今でも、ケイネスは彼の勝利を阻はばんだウェイバーの狼藉よりも、彼に勝利をもたらし得なかったランサーに対して、数段勝る怒りを懐いていたのである。

「・・・申し訳ありません。主あよ」

ケイネスの怒りの眼差しを、面を伏せて堪え忍びながら、ランサーは抑えた声で肅々と詫びを申した。

「騎士の誇りに賭けて、必ずや、あのセイバーの首級はお約束いたします。どうか、いましばらくのご猶予を」

「改めて誓われるまでもない！それは当然の成果であろう！」

いよいよ激高を露わにしたケイネスが、怒声で謝罪を一蹴する。

「貴様は私と契約した！このケイネス・エルメロイに聖杯を齎す！それは即ち、残る六人のサーヴァント全てを斬り伏せることと同義だ。この戦いの大前提だ。それを今更・・・高々セイバー一人について必勝を誓うだと？それが価値ある約定だとも抜かすのか？一体何を履き違えている？」

「履き違えているのは貴方ではなくて？ロード・エルメロイランサーでもケイネスでもない、それは第三者の声だった。果たしてサーヴァントとマスターの遣り取りを何時から立ち聞きしていたのか、奥の寝室から一人の女性が現れる。」

燃えるような赤毛とは裏腹に、居住まいは凜烈な氷を思わせる美女だった。年の頃はケイネスよりやや若く、少女期を終えたばかりの瑞々（みずみず）しい若さを誇っている。愛嬌や母性でなく、品位と理知によって磨かれた麗人なのは一目で知れた。キツイ眼差しに見下すような高適さが伴っても、それが威厳として魅力に繋がるよ  
うな、まさに女帝の風格を漂わす女性であった。



さながら臣下を叱責するかのような容赦ない非難の眼差しは 一人、ケイネスにだけ向けられている。

「ランサーは良くやったわ。間違いは貴方の状況判断ではなくて？」

「ソラウ、何を言うんだ……」

ケイネスの性格であれば、ここで感情を爆発させても何の不思議もないところだが、そうはならず口ごもるのは、この女が彼にとって格別の存在だからである。

ソラウ・ヌアザレ・ソフィアリ。降霊学科の長でありケイネスの恩師でもあるソフィアリ学部長の息女。そしてケイネスの栄光を完成させる運命の女神……即ち、彼の許嫁いいなすけである。

共に押しも押されもせぬ名門アーチボルト家とソフィアリア家の婚礼それも稀代の秀才と学部長の娘という組み合わせは、時計塔を上から下へと揺るがす縁談であった。ソフィアリア家伝来の魔術刻印は、家督を嗣ぐ兄に譲ったため、ソラウ自身は魔術師として高い位階にあるわけではない。が、ソフィアリア家が代々高めてきた極めつけの魔導の血は、兄弟と等しく受け継いでいる。常人の域を遙かに上回る魔術回路を持ち合わす彼女は、『神童』ケイネスの種を受けて次代のアーチボルトに特級のサラブレッドを齎すことだろう。まさに約束された勝利ならぬ栄光である。が そんな将来が傍目にいかにか輝かしく見えようと、それが当事者たちにとってもまた幸あるものであるかといえ、必ずしもそうとは限らない。

あからさまに見下しきつた、侮蔑の眼差しとさえいえる視線を未来の夫へと注ぐソラウと、その屈辱に顔色を失いながらも堪え忍ぶしのぶケイネスの様は、どう鼻眞目ひこめめに見たところで睦まじいカップルとは思

えまい。

「ねえケイネス。私に言わせてもらえればね、あの場ではランサーの提言通り、バーサーカーを標的にするべきだったのよ。一旦セイバーと共闘させてでも。でなければキャスターだって割り込んでくることもなかった」

倉庫街での戦いには立ち会わなかったソラウだが、その顛末は彼女自身の使い魔を通じて逐一把握していた。無論、面白半分の観戦ではない。魔術刻印こそ持ち合わせないものの、彼女もまた名門ソフィアリ家の一員として魔術の薫陶くんとうを受けた人間である。聖杯戦争という魔術師同士の競い合いがどういふものかは、当のマスターであるケイネスに負けず劣らず知悉ちしつしていた。ケイネスのマスターとしての立ち振る舞いには大きな不満があつた彼女はさらに詰問する。

「ランサーの“破魔の紅薔薇”ゲイ・ジャルゲはバーサーカーに対して取り分け有効な宝具だった。さらにセイバーの助勢があれば、あの黒いサーヴァントは苦もなく倒せていたでしょう。敵の一人を、とりわけ効率良く排除できるチャンスだったのよ？なのに事もあろうにバーサーカー助勢して……」

「……君はセイバーの脅威を知らない」

やり場のない憤りを噛み殺しつつ、掠かすれた声でケイネスは反駁する。彼とて許嫁の聡明さとその分析眼には一目置いている。が、断じてソラウは彼の盟主でも司令塔でもない。ケイネスは一人のマスターとして、徹頭徹尾、彼自身の判断で戦う覚悟でいる。それ以上に、未来の妻となるべき女性に、こつも頭しごなしに罵ののられた続つけていたのでは、男としてのプライドが成り立たない。

「私はマスターの透視力で、あのセイバーの能力を把握できた。あれはとりわけ強力なサーヴァントだ。総合力ではデイルムツドを凌いで余りある。あの場で、着実に倒せる好機を逃すわけにはいかなかった！」

「貴方つて人は・・・自分のサーヴァントの特性を、本当に理解しているのかしら？」

断固と言い放つケイネスを、だがソラウは冷ややかに鼻でふふんつと喘わらつた。

「何のための“必滅の黄薔薇”ゲイ・ボウだと思っっているの？ 既に治癒不能の手傷を負わせたセイバーは、捨て置いたところでいつでも倒せたのよ。それこそ他のサーヴァントにやらせた方がいい。それよりも、あの時点では正体不明のバーサーカーの方が脅威度は上だったわ」

「ッ」

すかさず反論しようとしたものの、ケイネスは言葉に詰まった。論で折れたというよりも、ソラウの威厳と剣幕に、僅かながらも怯んでしまったのである。

「第一、そこまでセイバーを危険視していたのなら」

その沈黙の間を逃さぬとばかりに、ソラウは重ねて畳みかける。

「どうして貴方、セイバーのマスターを放っておいたの？ あんなに無防備に突っ立っていたアインツベルンの女。ランサーがセイバーを引きつけている隙に、貴方は敵のマスターを攻撃できたんじゃない

くて？なのに貴方がしたことはといえば・・・最後までただ隠れて見てただけ。情けないっいたらありやあしない。これだから最弱のサーヴァントにも邪魔されるのよ」

深々と嘆息するソラウを、ケイネスは怒りと屈辱にわななきながらも、ただ黙して静かに睨み返すことしかできない。セイバー・ライダー・キャスターの真名だけでも充分過ぎる収穫だというのに、彼はまだランサーの失態を生んだ自分の判断と行動を間違いだっと思ったっていいのだ。

「ケイネス。貴方は自分が他のマスターに対してどういうアドバンテージを持っているのか、理解していないわけじゃないでしょう？  
他でもない貴方自身が工夫したことじゃない」

「それは 無論」

「マキリが完成させた本来の契約システムに、さらに独自のアレンジを加えてのけた貴方は、確かに天才だわ。さすが降霊科随一の神童と謳われただけのことはあるわよね」

賛辞の言葉などは聞き飽きるほどに聞いてきたケイネスだが、それがソラウの口から出るならば、決して満更なものではない。事実、ソラウのその評価はただの追従の妻ついでなどではない。今回の聖杯戦争に臨んでケイネスが用意した秘策は、『始まりの御三家』が敷いた戦いのルールを根底から覆すほどの意味があつた。

サーヴァントとマスターの、本来なら単一しかない因果線を、二つに分割して配分する変則契約。魔力供給のパスと、令呪による束縛のパスとを分割し、別々の召喚者に結びつけるといふ荒技を、ケイネスはその才能の閃きによって実現させていたのである。令呪を宿

すマスターとしてのケイネスとは別に、サーヴァントを支える魔力の供給源となつている二人目の魔術師・・・それが他ならぬソラウであった。まさにこの男女は二人で一人のマスターだったのだ。

「でもねケイネス。貴方は魔術師として一流でも、戦士としては二流よ。せつかくの下準備を、戦略的にまったく活かしていないじゃない」

「いや、私は・・・」

「ねえ、何のために私がランサーへ魔力を送っていると思うの？本当なら貴方が支払うべき代価を、私が肩代わりしてるのよ？全ては貴方の戦いを有利に運ばせるため。貴方に聖杯戦争を勝ち抜かせるため。貴方、サーヴァントという枷を負った他のマスターに対しては圧倒的に優位に立てるのよ。自分の魔力は自分自身の魔術を行使するために総動員できるんだから」

「だが・・・戦いはまだ序盤なんだ。初戦のうちは慎重に・・・」

「あらそう？　なのにランサーにだけは結果を急がせるわけ？　言っていることとやっていることが矛盾しているわよ？」

「・・・・・・・・・・」

最初の詰問に比べれば柔らかい口調ではあつたが、それでもソラウは、言外にケイネスを臆病者と罵っているも同然だった。ケイネスはなおいっそう膨れあがる格気を喉に詰まらせて、みるみる顔色を失っていく。

「ランサーを責める前に、まずは自分を省みるべきよね。ケイネス。

今夜の貴方は」

「ソラウ様、そこまでにして頂きたい」

凜と、低く通る声がソラウを制止する。

その声の主とはランサーだった。いつの間にか彼は面を上げて、ソラウを真っ直ぐに見据えていた。

「それより先は、我が主への侮辱だ。騎士として見過ごせぬ」

「いえ、そんなつもりじゃ・・・御免なさい。言い過ぎたわ」

たった今まで、女帝さながらに厳しい剣幕でまくしたてていた令嬢は、ランサーに籍められるや否や、途端に恥じらうように目を伏せて、なんと詫びの言葉まで口にした。誰がどう見ても極端すぎる豹変だった。

とりわけケイネスの胸中に、その光景は黒く鬱屈した感慨を呼び込んだ。あのソラウが、ただ一言の諫言で我を折るなどということはまず有り得ない。少なくともケイネスの言葉がそんな効果を上げたことは一度もない。彼は遠からず彼女を嬰る男である。ソラウは彼の妻となるべき女である。だが彼女にとっては、たかがサーヴァント風情の言葉が、未来の夫の言葉よりも重いとでもいうのだろうか？そもそも立ち返ってみれば、ソラウはランサーを庇うようにしてケイネスを論破しにかかってきた。彼女はただ単に、ランサーが叱責される様を見かねただけだったのではあるまか？ケイネスは、伏し目がちにランサーを眺めるソラウの眼差しに、許嫁である自分にはまったく未知の感情が込められているような感覚を懐いた。そして視線を転じれば、何事もなかったかのように今も自分の足許に膝を屈しているランサーの、その左目の下で黒々と輝くかのような黒

子を意識せずにはいられない。あらゆる雌を虜にするというディールムッド・オデイナの『魅惑の黒子』……

邪推するのは愚かしい。常人ならいざ知らず、ソラウは名家ソフィアリに連なる魔道の女である。いかに魔術刻印を嗣がぬ身とはいえ、高々魅惑程度の呪的影響に対しては充分すぎる以上の抵抗力を備え持っているはずだ。勿論それは、まず本人に抵抗しようという意志があつて初めて効果を発揮するのだが、その時、何の前触れもなく鳴り響いた防災ベルの騒音が、ケイネスの諸々の想念を断ち切った。

「……なに？ 何事？」

ソラウが当惑の眩きを漏らすと、さらに続いて部屋に備え付けの電話がベルを鳴らしはじめる。ランプの点灯はフロントからの着信を表示していた。慌てす騒がず、ケイネスは受話器を取り上げて係員からの連絡に耳を傾ける。話を聞き終える頃には、その眼差しは魔術師ならではの伶俐な鋭さを取り戻していた。

「下の階で火事だそうだ。すぐに避難しろと言ってきた」

受話器を放り捨てるようにして戻しながら、ケイネスはソラウに告げる。

「今のところ小火程度のものだそうだが、どうやら火元は何カ所かに分散しているらしい。まあ間違いなく放火だな」

「放火ですって？ よりによって今夜？」

「フン、偶然なわけがあるまいさ」

ケイネスは不敵に嘘つた。胸の内を焦げ付かせていた諸々の憂鬱は、すでに微塵も残っていない。

「人払いの計らいだよ。敵とて魔術師。有象無象共が犇めく建物で勝負を仕掛ける気にもならんだろうからな」

ソラウが緊迫した面持ちで息を呑む。

「じゃあ 襲撃？」

「おそらくは。先の倉庫街でまだ暴れ足りないという輩が、押し掛けてきたのだろう。面白い。不本意だったのはこちらも同じだ。そうだろう？ランサー」

「はい、確かに」

ランサーは迷いなく頷く。まだ見ぬ敵の素性には、期待するところがあった。七人のマスターのうち、こつも事を急いでまでケイネスを狙ってくる者がいるとするならば、心当たりは一人しかない。

“必滅の黄薔薇”の傷を受けたセイバーのマスターであれば、可能な限り早急に槍の呪いを解消したいところだろう。

「ランサー、下の階に降りて迎え撃て。ただし無碍に追い払ったりはするなよ」

含みを持たせたケイネスの指示に、ランサーは頷いた。

「承知しました。襲撃者の退路を断ち、この階に追い込めば宜しいのですね？」



「そつだ。ご客人にはケイネス・エルメロイの魔術工房をとつくりと堪能たんのうしてもらおうではないか」

金額にものを言わせてフロア一つを借り切ったのは、ここを活動の拠点として徹底的に改装リフォームする必要があつたからだ。勿論物質的な意味ではなく、魔術的な強化である。この三二階にケイネスが敷いた結界の数は二四層。まさに魔術城壁とも言つべき備えである。さらに彼専用の魔力炉を三器と、猟犬代わりに召還しておいた悪霊、魍魎が数十体。

トラップにもぬかりはなく、廊下の一部には異界化させている空間まである。

敵地においても、まず自陣たる工房を完璧に整えるのは魔術師として当然の嗜みたしな。そこへむざむざ踏み込んでくるといふ挑戦者には、ロード・エルメロイの真の恐ろしさを徹底的に理解させてやらねばならない。

「他の宿泊者どもが引き払えば、もう何の遠慮もいらぬ。お互い存分に秘術を尽くしての競い合いができればよつというものだ」

抑えきれぬ笑いが、ケイネスの喉の奥から湧いて出た。歓喜すら伴う武者震いが総身を駆け抜ける。今まさに彼が必要としていたのは行動だった。ソラウに味わわされた屈辱感を帳消しにするだけの行動と結果。天才と謳われた持ち前の潜在力を存分に發揮し、己の有能さを証明できるだけの状況。つまり八つ当たりであった。

そつ、まさしく今のケイネスは血に飢えていた。彼が内側で持て余

す黒い憤怒の念は、もはや誰かの血をもつてしか鎮めようがなくなっていた。不幸にも今この瞬間に襲いかかってきた敵対者こそは、格好の生贖に他ならない。

「私が戦士として二流だという指摘、すぐにも撤回してもらおうよ、ソラウ」

「ええ、もちろん期待してるわよ」

普段は気難しいばかりの許嫁から、このときはばかりは満面の笑みを投げ渡されて、ケイネスはより一層に闘志を昂たかぶらせた。

だが、宿泊客の全てが避難し終えてから数分後・・・彼らが構えていた三二階は跡形もなく消え失せ、それどころかホテルの面影すらも完全にこの世から消失することになった。

全ては、聖杯を用いて世界を救済せんと願う・・・歪んだ正義を持った一人の男によって仕組まれたことだった・・・

NGシーン

・その頃のセイバーさん達

「くっ・・・何て速さなの！？あのお豆腐屋さんの車！！」

「アイリスフィール！！次の段差をショートカットです！！」

人様がそれぞれ何処かで頑張っているというのに二人共、頭  
字D  
ならぬ頭文 Eやっていました。

（ キャスターが青髭じゃなかったから出来たこと ）

act・8 反逆への前奏曲（後書き）

雁夜おじさんも桜もそんな簡単には助かりません。

あと、うっかり時臣ことヒキ臣君と魔術工房（笑）先生はさり気なくキャスター＝孫悟空と勘違い中です。

次回もお楽しみに。

act・9 仕組まれた再戦（前書き）

お年玉をもらってもケチだからあんまり使わない私って、バカ・・・？

という訳で、更新しました。相変わらず駄文でごめんなさい。

act・9 仕組まれた再戦

『 以上、昨夜倒壊した冬木ハイアット・ホテルからの中継でした。続きまして、先日逮捕されました連続殺人の犯人についての特集です』

伽耶達は倉庫街での一戦に関する続報の報道に続いて、新都で新たに発生した倒壊事件に関するニュースを朝食片手に真剣な面持ちで見入っていた。

被害者は奇跡的にゼロという情報に彼女らは心が一瞬ホツとしたが、しかし、肝心な原因についてすぐに考察する。

「・・・間違いなくただの、倒壊事件ではないですよね」

「ああ。恐らくというか十中八九、聖杯戦争の・・・マスター同士の戦いの結果だろう」

サーヴァント同士の戦いにしては規模が小さいし、何よりも人目に付きやすい（人払いとか別にして）。マスター同士の戦いでも同じことが言えるが宝具と比べれば遥かにマシな方だと言えよう。

「で、キャスター。誰と誰が戦っていたのかわかったか？」

使い魔を飛ばして様子を確認しに行き、得られた情報を整理すべく籠っていたキャスターが設けられた自身の部屋から出てくるのを確認した雁夜は矢継ぎ早に彼に問いかける。するとキャスターは事件

の真相を簡潔に述べた。

「冬木ハイアット・ホテルの宿泊名簿からロード・エルメロイが妻を伴って宿泊していたことがわかったよ。1フロアを貸し切ってまで工房（拠点）としていたみたいだ」

「襲撃犯の方は？」

「直接繋がるような手掛かりは得ることはできなかったけれど、避難した宿泊客と従業員から倒壊時の様子について得ることができたよ。何でも三十階ぐらいがボヤ騒ぎがあった後に爆発したらしい」

「爆発？何か燃え移るようなモノでも置いてあったのか？」

普通ならそう考えてもいいだろう。しかし、これが魔術師同士の戦いならば訳が違う。爆発は単なる爆発として認められはしない。

「いいや、燃え移るようなものは元から置いてなかったようだ。だが、後から火元となるモノが置かれた可能性が高い」

「・・・まさか爆弾が仕掛けられていた、とか言うんじゃないだろうな？」

雁夜は怪訝そうな顔でキャスターに真実を問う。なぜならば、魔術師とは魔術を行使し相手の魔術師を打倒するはずなのに、キャスターの話では現代兵器が使われたかもしれないというのだ。一年足らずで魔術師となった彼にとって信じられる話ではなかった。

「確証は得られないが爆発物の線は濃厚だ。・・・第一、今の状況でロード・エルメロイを狙う陣営は一つしかあり得ない」

「・・・アインツベルン、ですね」

ランサーによつて最優のサーヴァント・セイバーが弱体化している今、アインツベルンは一刻も早く呪いを解呪する為にもランサーを打ち倒すかマスターを殺しにかかるはずだ。その際、真つ当な勝負を選ばずに外道な手段を用いてまで解こうとする輩がアインツベルンの陣営には存在する。

「正確には衛宮切嗣だ。奴はフェイクのマスターまで仕立て上げ、なおかつ銃火器を扱える協力者まで伴つてマスター殺しをしようとしている」

「じゃあ、あの場にいた銀髪の女はマスターじゃなかったのか」

「ああ。アサシンがあの場にいなかったら今頃、奴はロード・エルメロイを射殺しランサーを脱落させていただろうな」

アサシンが生きている・・・その事実は勘の鋭い陣営において既に知られている。最初からアーチャーとの戦いに疑いを持っていたマスターにとつてそれは聖堂教会が遠坂とグルになっているという裏付けの証拠にほかならなかった。

「で、ランサーのマスターは死んだのか？ニユースを見るからに三〇階以上の階にいたらまず命はないと思うんだが」

雁夜が言うことにも一理ある。しかし、依然として教会からのマスター脱落の通達がこない。安否がまだ確かめられていないからかもしれないがそれにしたつて遅すぎるような気がした。即ちそれは・



「ここは奇跡的に生き残っているのかもしれないと仮定してみよう。すると、ランサーのマスターは次にどのような行動をとる？」

魔術師の特質とロード・エルメロイ自身の性格を考慮して考えてみれば自ずと答えは得られるはずだ。

「売られた喧嘩は買うんじゃないか？となると・・・冬木の何処かに工房を構えているアインツベルンを捜そうとするはずだな」

「簡単には立ち入らせないようにしてあるのは当たり前だろうが、ロード・エルメロイともなれば見つけるのはそう時間もかからないだろう」

問題はその間自分達はどう行動するかだ。開戦前に入手した情報と開戦後に入手できる情報は中身が変化していることだろうし、最新の情報を手に入れるためにもここは積極的に行動したほうがいい。聞いて齎される情報よりも実際に関わってもたらされる情報の方が新鮮で信憑性があった。使い魔では得られる情報も限られる。

「俺はどうしたらいい。キャスターだけに動いてもらうのも限りがあるだろう？」

「しかし、バーサーカーに動いてもらうとなると今の君のままでは不味い。魔力を搾り取られる度に苦痛を強いられることになる。薬が効いているからって無理はできない」

「けど・・・助けてもらってばかりじゃ・・・」

渋る雁夜は何か協力できることはないかと拳を握り締め強く訴える。その姿を見かねた伽耶は無理せず協力できる方法が何かないかキヤスターに視線で問うと溜息混じりに彼は答えた。

「試作段階だが刻印虫に頼らなくても擬似魔術回路として機能し魔力を供給できる長手袋がある。本当はもう暫く待つてから渡そうと考えていたんだけど・・・仕方がない、試験運用ということで渡そう」

一度部屋に戻った彼は肘近くまでの長さがある黒塗りの革で出来た長手袋を二つ腕に抱えてリビングへと帰ってきた。サイズは予め寸法を測っておいたというのでピッタリのようにだ。試しにつけてみた雁夜は着け心地を確かめるために手を握ったり開いたり動作を繰り返した。

「どう・・・ですか？」

「何だろう、管が幾つか張られているみたいな感触がする。痛みは・・・特に無いな」

特に異常は見られないようだ。初期動作の不良がないことにキヤスターはホッとし、話の続きを始めた。

「バーサーカーに魔力を配給するときは僅かに痛む程度になると思う。もっとも、緊急時には僕に魔力配給ラインは接続されることになるから安心してくれ」

「わかった。・・・すまないな何から何まで」

「気にしないで欲しい。協力すると言ったのは半ば僕の我侭みたい

なものなんだから。それにこれでも僕は人の父親なんだぞ？幼い子供を助けたいという気持ちに嘘偽りはなし、助けが必要ならば僕は誰にだって手を伸ばすさ」

たとえ自分の身が人外になろうとも人としての心は決してキャスターは失わなかった。誰かを救いたいという思いも変わらなかった。だから、運命が残酷な結末を突きつけるのならば彼は全力で抗って明日のために未来のために戦う。傷だらけでもいい、泥にまみれたっていい、それでも助けを求めるのなら手を差し伸べて引き上げるだけだ。

「（だから、バーサーカー………セイバーに執着する思いもわからなくもないが今は、君のマスターが戦っている運命と一緒に戦ってくれ）」

霊体化して姿が見えないバーサーカーへ願いを込めて心から語りかけるとキャスターは事前にマークしておいたアインツベルンが拠点として構えているであろう場所へと空高く飛びたった。

冬木市市街より、直線距離にして西へ三〇キロ余り。

人里離れた山中を東西に縫う国道沿いに、押し寄せる宅地開発の波からは忘れ去られたかのような、鬱蒼<sup>うつそう</sup>と生い茂る森林地帯がある。国有地かと思いきや、登録上の名義は実体があるかどうかも定かでない外資系企業の私有地となっていたりと、謎の多い地所ではあるのだが、強いてその地についての情報を集めるとなると、まず最初に行き当たるのは奇妙な都市伝説である。

曰く、深い森林の奥底に『御伽の城』があるという噂。当然、他愛もない怪談話である。いかに未開発とはいえ都市部から車で一時間足らずの近隣にそんな奇抜な建築があるならば評判にならないわけがなく、事実、その一帯は過去にも測量のための空撮が幾度も行われているというのに、原生林の中に人工の建築物が写っていたことなどは一度もない。

だがそれでも数年に一度ほどの間隔で、まるで思い出したかのように噂話は囁かれる。

遊び半分の冒険行で森に踏み込んだ子供たちや、道に迷ったハイカ  
の目の前に、霧の中からふいに立ち現れるという石造りの壮麗  
な古城。それは廃墟のように完全な無人で、そのくせ誰かが住んで  
いるとしか思えないほど完璧に整備され手入れの行き届いた、摩訶  
不思議な館であるという。

もちろん、誰も真に受けたりはしない。せいぜいがネタに困った三  
文雑誌が夏場に組む怪奇特集のページで取り上げられる程度の戯  
言である。それが実在することを知らずには、ごく一部の魔術師たち  
だけだ。

六〇年にただ一度、戦のための出城として主を迎え入れるあやかしの  
城。重層の幻覚と魔術結界によって守られているため、ごく希な  
偶然を除いては、決して外部に露見することのない異空間。その正  
体を知る者たちは、この深い森林を『アインツベルンの森』と呼ぶ。

冬木の地で開催される聖杯戦争に際し、ライバルである遠坂家の直  
轄地に拠点を置くのを潔しとしなかった頭首ユーブスタクハイトは、  
その富に物を言わせて、冬木に最寄りの霊脈を土地ごと買い押さえ、  
そこをアインツベルンの拠点とした。折しも三度目の聖杯戦争の前  
夜、世間は第二次世界大戦直前の緊迫に張りつめていた時代である。  
広大な原生林を丸ごと結界として外界から隔離し、そこにアインツ  
ベルンの地元から支城のひとつをまるごと移築したというのだから、  
かの一族の桁外れな財力と執念の程が窺える。土地買収のための折  
衝や地元での隠蔽工作には遠坂家が奔走したというのも、何とも皮  
肉な話というほかない。

重苦しい空気が、アイルスフィールドの何度目かの溜息を誘う。

「疲れてきたかい？ アイリ」

切嗣にそう問われて、彼女は憂鬱顔を奥に引っ込め、微笑でかぶりを振った。

「いいの、何でもないわ。先を続けて」

促された切嗣は、引き続き、冬木市についての諸情報の解説を再開する。目の前のテーブルには市全域をフォローする地図が拡げられていた。

「地脈の中心となるのは二カ所。ひとつはセカンドマスターである遠坂の邸宅。もう一つは言わずと知れた円蔵山だ。この辺り一帯の命脈はすべてこの山に集まることになる。詳細はアハト翁おうちから聞いての通りなわけだが」

会議の場選ばれたサロンは、アイリスフィールたちに先駆けてこの城を訪れ、委細準備を整えてから退去したメイドたちによって、完璧な状態に設えてあった。テーブルクロスからティーカップに至るまで染み一つなく、花瓶には瑞々しい花が活けてある。これが六〇年もの間、住まう者もなく無人だった城の一室とは誰も思うまい。

疲労がないといえは嘘になる。が、アイリスフィールが曲がりなりにもベッドで休息できたのに対し、切嗣はおそらく一睡もしていない。切嗣とその弟子の久宇舞弥が城に着いたのは正午に程近い頃合いだったが、さらにその直後に冬木教会からの呼び出しを受け、使い魔を操作して監督役の告知をチェックするなど、切嗣は立て続けに雑事の処理をこなしている。聞けば昨夜の倉庫街の戦いの後も、ランサーのマスターであるケイネス卿を襲撃し、さらに言峰綺礼と

の遭遇戦までも演じてきたという話である。そんな切嗣たちが毛ほどの憔悴も窺わせずにいる以上、アイリスフィールも弱音を吐くわけにはいかない。

いや、むしろ溜息の理由は他にある。

「 円蔵山には頂上の柳洞寺を基点として強力な結界が張られている。そのせいでサーヴァントのような自然霊以外の存在は参道からしか進入できない。セイバーを使う上では留意しておいてくれ」

そういう注意であればセイバーへ向けて直に言ってやればいいものを、相変わらず切嗣は、アイリスフィールの背後に控える男装の少女に、ただの一瞥すら与えない。

空気の重い原因は二つ。うち一方がこの切嗣のセイバーに対する、頑とした拒絶の姿勢であった。今に始まったことではないが、むしろアインツベルン城にいた頃よりも、なおいつそう露骨になってきた気がする。

「さらに、この二カ所には劣るが、やはり地脈の集中する要地があるとふたつ新都にある。南の丘の上にある冬木教会と、都市区画の東にある新興住宅地がそれだ。よって、聖杯の降霊を行えるだけの靈格を備えたポイントは、冬木市内に都合四カ所あることになる」

「戦いの後半、サーヴァントの数が絞り込まれてきたら、このいずれかを拠点として制圧しておかなくてはいけないわけね？」

「そういうことだ。地勢についてはこんなところだが、何か質問は？」

「 セイバー、何か不明な点はある？」

アイリスフィールが気を利かせて水を向けると、サーヴァントの少女は小さく微笑んでかぶりを振った。

「これといって特には。十分な説明でした」

当人にそんな意識はないだろうが、端から見ればじつに皮肉の利いた返答である。何せ、彼女はずっと無視され続けているのだから。溜息をついて、アイリスフィールは話を先に進めた。

「で、今後の方針だけど・・・切嗣、ランサーを当面は相手にしていくの？あなたがロード・エルメロイを仕留めてから八時間経つけれど、相変わらずセイバーの左手は治癒しないままよ。あの槍の呪いが消えていない以上、ランサーは健在のはすだわ。単独行動スキルのあるアーチャーならともかく、ランサーのサーヴァントがマスターなしで現界し続けていられる時間じゃないもの」

妻の指摘に、切嗣はあっさりと頷いた。

「確かにな。ランサーは新たなマスターと再契約したか、或いはケイネスを仕留め損なったのか・・・あの時邪魔が入ったせいで、奴の死体は確認できてないからな」

言峰綺礼の邪魔さえなければたとえ仕留め損なってもその場で殺すことが出来たのにと、内心毒づく切嗣。しかし、相変わらず彼の眼中にはセイバーはいなかった。

そんな彼にセイバーは怒りに震え、アイリスフィールは複雑な想いに囚われたまま、共に語るべき言葉を失って沈黙する。おかしなことに舞弥も切嗣へ向けて一瞬恨みのこもった瞳を向けるとすぐに元の表情へと戻った。そんな停滞を、切嗣は会議の終結と見て取った



らしい。

「それじゃあ解散しよう。僕とアイリはしばらくこの城に留まって他の陣営の襲来に備える。舞弥は街に戻って情報収集に当たってくれ。異変があつたら逐一報告を」

「わかりました（・・・ケーキの恨み）」

淀みない返事で頷くと、舞弥は席を立ってサロンを後にする。遅れて席を立った切嗣も、テーブルの上の地図や資料をかき集めてから退出した。最後まで、ただの一度もセイバーとは視線を合わせるこ  
となく。

黙殺された形のセイバーは、怒りに歯噛みしながらも足下の絨毯を睨み続けている。もし王でなく一人の少女ならば号泣して泣きじゃくっていたことだろう。そんな彼女とともに取り残されたアイリス  
フィールは、一体どんな言葉で場を取りなせばいいのか判らなかつた。

いや、誇り高き騎士王たる彼女が、そんな上辺だけのフォローで慰めてほしいなどと思うわけがない。今、必要なはもつと根本的な解決だ。そう思い至ったアイリスフィールは、そつとセイバーの肩に手を置くだけで労いの意味を伝えると、すぐさま切嗣を追ってサロンを後にした。

意図的な、セイバーに対する切嗣の拒絶　ただの相性などであるわけがない。よほどの嫌悪か怒りといった負の感情がなければでき  
ることではない。何にせよ行き過ぎだ。いかに方針の食い違いがあるうとも、同じ勝利を目指している同胞である。尊重しろとまでは  
言わないが、侮辱を与えていいわけがない。切嗣の姿はすぐに見つ  
かった。城の前庭を望むテラスに出て、手すりに寄りかかったまま

夜の森を眺めている。幸いにも、近辺に舞弥の姿はない。

「・・・切嗣」

我知らず声音が厳しくなるのを感じながらも、アイリスフィールは夫の背中に詰め寄って声をかける。切嗣も気配は察していたのだから。驚いた素振りも見せずに振り向いた。

アイリスフィールは覚悟していた。ついさっきまでサロンで対峙していた、切嗣の冷たく無慈悲な眼差しを相手にするものとはばかりにだから振り向いた切嗣の表情を目の当たりにした途端、彼女は途方に暮れて立ちすくむしかなかった。

傷つき、怯えきった子供のように、今にも泣き出しそうなほど追いつめられた顔。そこにいるのは凄腕の魔術師殺しなどは程遠い、ただの非力で臆病な男でしかなかった。

「切嗣、あなたは」

戸惑うアイリスフィールを、さらに切嗣が有無も言わず抱きすくめる。その胸板は、震えていた。力強く頼もしいはずの夫の腕が、今は慈母にすぎりつく子供のように頼りなかった。

「もし僕が」

痛いほどの力を腕に込めながら、掠れた弱々しく小さな声が耳元に問いかけてくる。

「もし僕が今ここで、何もかも抛り<sup>ほう</sup>投げて逃げ出すと決めたらアイリ、君は一緒に来てくれるか？」

それは、およそ考え得る限りにおいて、衛宮切嗣という男が絶対に口にするはずのない問いだった。アイリスフィールは驚きのあまり言葉を失い、それからようやくのことで訊き返した。

「イリヤは・・・城にいるあの子は、どうするの？」

「戻って、連れ出す。邪魔する奴は 全て殺す」

短く断固とした それほどに切羽詰まった声で、切嗣は答えた。本気なのは疑うまでもなかった。

「それから先は 僕は、僕の全てを僕らのためだけに費やす。君と、イリヤを護るためだけに、この命のすべてを」

「・・・・・・・・」

いまアイリスフィールは、この男がどれほどの瀬戸際に追いつめられているのか、ようやく理解した。生涯最大の戦いを前にして、彼女の伴侶たる男は、掛け値なしの限界に晒されているのだと。

彼は九年前の切嗣ではない。あの非情にして無謬の猟犬の如く、銃弾のように、刃のように、自らを限りなく鋭利に鍛えて研ぎ上げた殺人機械まがいの男では、ない。

そんなにも切嗣は変わり果ててしまった。どうしようもなく危うく脆弱に。その苛烈なる理想を遂げるに及んで、ここまで追いつめられてしまうほどに。そう変えてしまった要因が何なのか、他ならぬアイリスフィールには判っている。

妻と娘。衛宮切嗣の人生に決して紛れ込むはずのなかった不純物。

喪うものなど何も無い。痛みを感じる心すらない。そんな男であっ

たからこそ切嗣は強くいられたのだろう。この世界を救済しようという遠すぎる理想を追い求め、そのための犠牲を躊躇なく切り捨てられる、そんな苛烈な戦士でいられたのだろう。

今、切嗣が求められているのは、そんな過去の自分に立ち戻ることに拘わらず 歳月を巻き戻すことで、切嗣の魂はいま軋みを上げています。九年の変化があまりにも決定的であったが故に、切嗣はかつての冷酷さを装うだけで相当の無理を強いられている。セイバーに対する拒絶は、本当のところ、そんな切嗣の弱さの露呈でしかなかったのだろう。今の彼には自分を保つことだけで精一杯なのだ。セイバーを受け入れる余裕、騎士王との協調に心を致す余裕さえ、まったく残されていないほどに。

アイリスフィールは胸が詰まった。愛する男がこれほどの苦悩に晒されているながら、彼女には救済する術がない。切嗣を苦しめているのは、他ならぬ自分の存在なのだから。今の彼女にできるのは、ただ一言・・・虚しい問いを投げることだけだった。

「逃げられるの？ 私たち」

「逃げられる。今ならば、まだ」

切嗣は即答する。だがそれは、信じるところを口にした言葉ではない。どうしようもなく虚しい希望を自分自身に信じ込ませるために、声にして口に出しているに過ぎない。

「嘘」

だからアイリスフィールは指摘した。優しく、残酷に。

「それは嘘よ。衛宮切嗣、あなたは決して逃げられない。」

聖杯を捨てた自分を、世界を救えなかった自分を、あなたは決して赦せない。きっとあなた自身が、最初で最後の断罪者として、衛宮切嗣を殺してしまう」

切嗣が押し殺した鳴咽を漏らす。彼とて、判ってはいるのだ。選択肢などとうの昔に喪われているのだという事実を。

「怖いんだ……」

鳴咽の隙間から、切嗣は子供のように告白した。

「奴が　言峰綺礼が、僕を狙ってる。舞弥に聞いた。奴は僕を吊る餌としてケイネスを張っていた。行動を読まれてた・・・僕は、負けるかもしれない。君を犠牲にして戦うのに、イリヤを残したままなのに、僕は……いちばん危険な奴が、もう僕に狙いを定めてる。決して遭いたくなかったアイツが！」

衛宮切嗣は暗殺者だ。英雄でも、武人でもない。五分の生死を賭けて競い合う、そんな勇氣や誇りとは無縁の臆病者だ。故に慎重に、的確に、最低限のリスクで勝利と生存を勝ち取ることだけを狙う。狩人にとって最大の悪夢とは、狩られる側に立たされることなのだ。だがそれでも、かつての切嗣であったなら、己の窮地にも眉一つ動かさず、ただ冷淡に最善の打開策を見出すことに専念していただろう。それは『愛する者を喪う』という恐怖とは無縁でいられたが故の強さだった。その欠落は、今再び戦いに臨まんとする衛宮切嗣にとって、致命的な弱点となりうるものだ。

「あなた一人を戦わせはしない」

夫の震える背中に手を廻しながら、アイリスフィールは優しく言い聞かせた。

「私が守る。セイバーが守る。それに・・・舞弥さんも、いる」

認めるしかなかった。今の切嗣が必要とする女が誰なのか。

彼の心に往年の強靱さを、痛みと恐怖を封印できる冷酷さ呼び戻すことができるのは、ただ独り。それは決してアイリスフィールには叶わない相談だ。

せめて彼女に出来ることがあるとするなら、それはただの気休めにしかない抱擁ぐらいのもの。それでも アイリスフィールは、祈らずにはいられない。役に立てなくてもいい。彼女が、こうやってほんのささやかでも切嗣を癒してやれる時間が、どうか一分一秒でも長引いてくれないものか。

そんな祈りも、懐いたと同時に虚しく消えた。

唐突な胸の動悸に、アイリスフィールは身を強ばらせる。把握したばかりの森の結界の術式が、彼女の魔術回路の中で白熱した鼓動を繰り返す。・・・警報だ。

「 早速、敵襲か? 」

耳元で咳いた夫の声は、思いのほか静かであり、そして、彼女に馴染みのない固さと冷たさを取り戻していた。

妻の血相を見ただけで、切嗣は状況を察したのだろう。アイリスフィールは無言のまま頷いて、夫の胸から身体を離す。目の前にはふ

たたび、冷酷で周到な『魔術師殺し』の顔があった。

「舞弥が発つ前で幸いだった。今なら総出で迎撃ができる。ア  
イリ、遠見の水晶球を用意してくれ」

「ええ」

予想よりもはるかに早く、森には戦いの風が吹き込みはじめた。

「いたわ」

再びサロンに終結したアインツベルン陣営―切嗣、舞弥、そしてセイバーの三人を前にして、アイリスフィールは結界が捉えた侵入者の映像を水晶球に投影して見せた。  
燃えるような赤毛と長杖そしてローブと、見るからに彼らにとっての初戦で派手にやらかしたサーヴァントの一人、キャスターだった。木陰に一人腕を組んで佇んでいる。

「ランサーではなく、キャスターか・・・」

「でも・・・何のつもりかしら？」

ランサーのようにキャスターには自分達を狙う理由がない。最終的に戦うことになる相手であろうともわざわざアインツベルンの陣営

に出向いてくるのは不可解だった。しかし、そうであるうとも迎撃せねば魔術師の英霊に容易く工房が突破されてしまっただろう。

「アイリ、奴の位置は？」

「城から北西に二キロと少し。まだ深入りしてくる気配はないわ。まるで、こちらが来るのを待っているみたい」

森に張られた結界は、城を中心とした直径五キロの円陣だ。キャスターがいるのはギリギリの境界内である。もう少し結界の深部に踏み込んでくれば、アイリスフィールは味方の戦いを援護できるエリ・エフェクトを発動できるのだが、キャスターはそれを見越しているかのように、深紅の瞳を境界線へと向けていた。

「そうですねアイリスフィール、敵は間違いなく誘いをかけています」

固い声で眩くセイバー。サーヴァントである彼女の脚力であれば、ものの数分でキャスターの居場所まで馳せることが可能だ。その胸中はアイリスフィールにも伝わった。しかし、不利な状況下において彼女を出すことに意味があるのか迷いかねていた。

彼女の直感スキルを信用するならば、今回のキャスターは油断ならざる難敵である。ダークフォースとも言うべきか。

そう悩んでいたその時だった、キャスターは深紅の・・・アイリスフィールとは違う瞳を黄金の瞳へと変化させるとふいに上を向いて彼女を見つめ返し、不敵にニヤリ笑った。

“千里眼を見破られてる　！？”



魔術師の英霊ともなれば、兎戯にも等しい芸当なのだろう。それよりも瞳の色が変わったのはなんだったのか。疑問を余所にキャスターはアイリスフィールの視点位置を見据えたまま、口をそつと開いた。

「早く来ないと、城ごと破壊してしまうぞ？」

硬い水晶球の表面が震動し、監視先の景色で拾った音声を伝達した。

キャスターの脅しとも取れる発言に対し、ひたとアイリスフィールを見据えるセイバー。サーヴァントの少女は既に死地に臨む覚悟を固めている。そんな彼女を見たアイリスフィールはそれ以上悩まなかった。

「セイバー、キャスターを倒して」

「はい」

騎士王の返答は最短だった。声がアイリスフィールの耳に届いたときには、既にセイバーはサロンから姿を消していた。

鋼色の疾風と化して、セイバーは樹間を駆け抜ける。

切嗣との確執も今は意中にかくしっにない。ひとたび戦場に立てば、彼女の心

はまさしく剣だ。鋭利に研ぎ上げ、曇り一つなく磨き抜かれた剣。いかな迷いに曇ることもなかった。

そんな彼女の前に影に身を潜めた彼はぬつと現れる。

「待ちかねたぞ、セイバー。いつまで待たせる気かと思い、城に穴を開けてやろうかと考えていたところだった」

先日の戦いとは違いキャスターは味方ではなく敵。庇い立てする理由もない彼はあの時とはうって変わって異様なまでの殺気を全身から放ち待ち構えていた。果たしてそれが人として英霊として放つ殺気なのかどうかは分からずじまいだが。

「意外だなキャスター。今回は自ら戦いに赴きに来るとは・・・血迷ったか？」

「そう思ってもらっても結構だ。マスターを引き籠らせるのはいいが、どうも自分まで引き籠るのは性に合わないんでね」

肩を鳴らしていかにも戦闘狂さを出したキャスターは杖の先をセイバーに突きつけるようにして、これ以上の言葉は必要ないと臨戦体勢をとる。対するセイバーも単身で乗り込んできた魔術師の英霊にして王と名乗る目の前のサーヴァントに不可視の剣を今の自分ができる剣の構え方で向き合った。

「  
永遠の氷河、固定・掌握。魔力充？・・・術式兵装、『氷の帝王』！・・・」

雷を連想させるような青白い光ではなく、透き通った白い光を身に纏ったキヤスター。彼の髪はかつて見た時のように長髪になったかと思うと、その周りに無数の氷柱を翼のごとく広げる。

すると彼がその場にいるだけで木々だけでなく地も見見る見るうちに凍りついていった。まるで彼の踊る舞台を形成していくように・・・

「さあ、踊れセイバー・・・この　　僕の世界でな！！！！」

まさに氷の帝王とも言つべき凄まじさを前にセイバーは滑るように駆け抜け切りかかっていった。

水晶球の中で始まった戦いの様相を、アイリスフィールドは息を詰めて見守っていた。

クラスの特性だけを鑑みれば、セイバーはキャスターに対して圧倒的優位を誇る。剣の英霊のクラスを得た時点で、彼女の魔術抵抗スキルはより強力に増幅されているのだ。魔術を主力とするキャスターにとって、これは致命的とも言えるハンデである。正面から激突すればキャスターには万に一つも勝算はないのだが

今回の第四次聖杯戦争のキャスターは一味違った。魔術師にしてはステータスが高く、なおかつ本来は不得意であるはずの接近戦までこなしているのだ。

水晶球が映し出す森の中の戦いは、決して楽観視できる展開ではなかった。

無数の氷の蔓が襲いかかる中でセイバーは一步も譲らない。まさに獅子奮迅の戦いぶりである。不可視の剣が薙ぎ払われるたび、確実に一つ二つと氷柱が両断され砕け散っていく。氷の蔓の群れは、その先端すら少女のサーヴァントに触れることが叶わない。押し寄せる津波のような氷の軍勢を、セイバーは完全に防ぎきっていたがそれは同時に、防ぐだけで手一杯という窮状をも意味していた。

ひたすら猛烈な剣捌きで敵勢を押し返すセイバーではあったが、そんな彼女の奮戦ぶりに対して追い打ちをかけるようにキャスターは接近戦を挑み、魔力が充填した拳や脚をセイバーにぶつける。対してセイバーは未だに一度も剣を掠らせることすら出来ずにいた。

氷の蔓は、斬り伏せられてなお続々と周囲から現れる。森林・大地からもはや無尽蔵としか思えない数の氷柱が次から次へと飛び出し、では、セイバーの包囲に加わっていく。不可視の剣が切り裂く数と、新たに生まれる氷柱の数とは、完全に拮抗していた。それは即ち、キャスターが戦いの主導権を握っていることを意味している。魔術師は勝ちを急ぐこともなく、じわじわとセイバーを追い詰め翻弄し

ていた。

キャスターの戦略は何なのかはわからない。だが恐らくはこのままセイバーを疲弊させ、体力が尽きたところで決着をつける意図なのだろう。そしてセイバーは今完全にその術中に嵌り切り札すらも封じられている。

もし万全な状態のセイバーであれば、戦局はまた変わっていたであろう。無数の氷の蔓など一瞬で消し去ったに違いない。だが今のセイバーは左手を封じられている。水晶球越しに窺い見る表情からも、思うさまに戦えない歯痒さが、ありありと見て取れた。

「まだ他のマスターが森に入ってきた反応はないのか？」

背後からそう問う切嗣の声は、今セイバーが立たされている窮地などまるで意中にならないのが明らかで、さしものアイリスフィールも撫然となったが、そんな妻の反応にすら気付かないかのように、切嗣は黙々と武器の準備に勤しんでいる。コートの下のスस्पエンダに、各種の手榴弾や、短機関銃の予備弾倉を納めたポーチなどを次々と取り付けていく様は、戦いに臨む魔術師の準備とはまるで思えない。

が、腰に巻いたガンベルトのホルスタに、切嗣の礼装である単発魔銃が収まっているのを見て取ったアイリスフィールは、夫の覚悟の程を理解した。

「舞弥、アイリを連れて城から逃げてくれ。セイバーたちとは逆方向に」

切嗣の指示に、舞弥は躊躇なく頷いたが、アイリスフィールは動揺

を隠せなかった。

「ここにいては・・・やっぱり駄目なの？」

「セイバーが離れた場所で戦っている以上、この城も安全ではない。僕と同じことを考える奴だっているだろうからね」

確かにセイバーが留守にした城に居残っているであろうマスターを狙って、漁夫の利を企もうという輩はいるかもしれない。マスターを殺そうと思うなら、サーヴァントと別行動している隙は最大の狙い目である。

サーヴァントの護衛下にあるマスターと、自身の工房に立て籠もっている魔術師と、果たしてどちらが攻める上で与しくみやすい敵か例えば切嗣の場合は後者を選ぶ、という判断だ。もし同じ結論に至る魔術師がいた場合、いま単独で戦っているセイバーの姿を確認すれば、その時は迷わず城中のアイリスフィールを狙ってくるだろう。せつかく再会できたばかりの切嗣が再び別行動を取ることにアイリスフィールは不安を感じずにはいらなかった。彼が秘め隠している不安定な心理状態を知った上では尚更だ。とはいえ、自分が切嗣に同伴したところで足手まといにしかないのも判る。そもそも、束の間とはいえ城で合流したことの方が本来はイレギュラーなのだ。

「.....」

自分の胸中を冷静に推し量り、そこでようやくアイリスフィールは自覚した。不安の元は切嗣との別れではなく、舞弥と行動を共にすることなのだ。切嗣としては護衛のつもりなのだろうが、やはり根のところアイリスフィールは、舞弥に対する苦手意識を捨てきれ

ず

とはいえ彼女とて、まさかそんな私情で切嗣の方針に異を唱えるほど子供ではない。

「わかったわ」

情然と頷いたそのとき

「!?!」

魔力回路を、新たな痺きが走り抜けた。森の監視結界からのフィードバックである。

「・・・どうした？ アイリ」

「切嗣、あなたの目論見通りよ。どうやら別の新手がやってきたみたい」

その新手とは、切嗣に売られた喧嘩を買いに来た・・・ランサーのマスター、ロード・エルメロイことケイネス・エルメロイ・アーチボルトである。

氷のフィールドが敷かれた時点で、敵の思う壺だと悟った。  
キャスターは陣地作成に長けた英霊だ。たとえ工房ではなくとも自らが戦いやすい場所を自在に作成できるに違いない。完全に自分は策に嵌ってしまつてマスターと引き離されたのだ。

「どうしたセイバー、もう限界か？」

次第に凄惨の度合いを増していくセイバーの立ち回りを、キャスターは無表情で睨みつけるように観察しながら動き回っていた。

「そんなことは……ないっ!!」

セイバーは斬り払うことにただ専念するため、怒鳴るように叫ぶと木々を斬り倒しながら氷柱を十本まとめて砕く。そしてそのままキャスターへ向けて踊るように飛びかかると彼をまっぴたつに斬り裂いた。

だが、それは氷で創られた偽者。光が反射した氷には無数のキャスターが映り込んでセイバーを擲揃うように包囲する。

「………はあ、………はあ」

どう立ち回つても剣先は一向に届かない。十重二十重とえはたえと押し寄せる氷柱の壁に阻まれて、キャスターの居場所も魔力も掴めない。僅かな隙を衝いて、背後からセイバーの首に蔓が幾重にも巻きつい



た。全身を凍らされる前に砕こうと反射的に手を振ったものの、親指が利かない左手は、コツンと虚しくの氷を叩くだけだった。

「くっ……」

動きが止まったセイバーの全身を、氷の柱が覆い尽くす。また魔力噴射で吹き飛ばすしか他にない。が、この量は幾ら何でも……  
・そう諦めかけたその時だった。閃いた赤と黄の稲妻が、まとわりついていた氷を粉々に砕け散らせた。縛めを解かれ、大きく息を吸って喘いだセイバーの眼前に、若草色の戦支度に身を固めた長身の背中が割り込む。

「無様だぞセイバー。もつと魅せる剣でなければ騎士王の名が泣くではないか」

呆気にとられたセイバーに、罪作りなほどの美丈夫が艶やかなウィングを送った。魔力抵抗を持つ彼女だからこそ耐えられる魔貌の視線。その双槍の熾烈さは裏腹に、デイルムツド・オディナの微笑みはどこまでも甘く涼しい。

「ランサー、どうして……」

ランサーのまさかの登場にセイバーは驚愕するも、キャスターはと  
いうと……無表情から不敵な笑みへと表情を変化させていた。

「……やはり、生きていたかランサー。衛宮切嗣によってマスター  
共々散ったかと冷や冷やしたぞ」

「フン、そんな無様な散り方をするはずがないだろう。見くびらな

いでもらいたいなキャスター」

キャスターの笑みの理由にランサーはすぐに気がついた。再度尋常な勝負をセイバーとしたいと思っっている自分が生きているかどうか確かめるためにキャスターはわざとセイバーを危機的状況へと追い込んだのだ。決着をつけるつもりもなくただ持久戦めいた攻撃をキャスターが繰り出していたのは全てランサーのためであった。

「確認したいことも確認できたことだ、僕はこのまま立ち去りたいが……二人はそういうわけにもいかないだろう？」

「まあな、セイバーとは今回戦うつもりはないが……目の前に仕留められそうな別の獲物があるのなら話は別だ」

彼の持つ魔槍破魔の紅薔薇はバーサーカーだけではなく、魔術を扱うキャスターにとっても有効な宝具だ。前回令呪により思うようにセイバーを庇えなかった彼は今度こそ庇おうと疲労したセイバーの前に踊り立つ。セイバーも遅れを取るまいとランサーと共闘すべく再び不可視の剣を真っ直ぐと構えた。

「やれやれ、二対一か……これでは形勢が不利だな」

「よく言う。あの時サーヴァント二人に対し圧倒したのは誰だったか」

「はて、誰だったかな？」

惚けるキャスターに焦りの色は見られない。まるでこの状況を楽しんでいるかのようにも見えた。もしくは形勢が不利などとは微塵にも考えていないのか。ジリジリと詰め寄る二人を前にキャスターは

遙か上空を見上げ

何かを呟いた。

「そろそろ頃合いか……」

「？」

突然のキャスターの呟きに首をかしげるランサーとセイバー。そんな彼らの疑問を余所にその存在は……漆黒の竜巻の如くキャスターを庇うように前に現れ姿を晒し出した。大きすぎる大剣をさも自分の宝具のように構え、兜から紅い血液のような閃光のラインを放つその存在は

狂戦士、バーサーカーであった。

## act・9 仕組まれた再戦（後書き）

術式兵装『氷の帝王』

オリジナル間の魔法その2。

永遠の氷河を掌握することで発動する間の魔法。エヴァの『氷の女王』のネギVERとも言うべき技であり、発動後に周囲を氷で凍り尽くす。

今回のまとめ

・ケイネス先生は本当に死んだの？とキャスター＆バーサーカー陣営考察。

・キャスター、アインツベルン城へ強襲。ランサーの生存を確認。

・バーサーカー、キャスターの宝具を引っさげて降臨。サン イズ立ち。

・舞弥さんケーキの恨みで切嗣をコソコソと睨む。

補足：キャスターがどっかに向かっているから追跡（マスターの下か敵陣営の下へ行くのか判断不可） 向かったのは森（ただの森ではなく、魔術が張り巡らされている。あと、六〇年に一度の拠点について少しは知っていた） アインツベルンの拠点と確定、ランサーがセイバーとキャスターの戦闘に気づく。ケイネス強襲 ランサー、セイバーと共闘するもキャスターにバーサーカーが加勢。

グダグダですみません。

雁夜おじさんを救うために同盟を結んで何故悪いと叫びたい今日この頃。

次回もお楽しみ。

a c t ・ 1 0 天は彼の者を見放す（前書き）

なんとかかまとまったので、更新。

今日は掃除の後に柵のペンキ塗りです・・・ちきしょー！！

今回もNGシーンがあります。見たくない方はスルーをお願いします。  
ます。

バーサーカーがキャスターを援護すべくアインツベルンの城へと向かったその頃、伽耶は松葉杖を傍らに置いてソファアに深く座った雁夜と対面して座っていた。互いに従えるサーヴァントの無事を祈りつつ身体を休めていたわけだが、伽耶は落ち着いている今だからこそ雁夜に話したいことがあった。意を決して彼女は慌てつつも声をかける。

「あの、雁夜さん……ちょっと、質問したいことがあるんですがいいですか？」

「え？……いいけど、急にどうしたんだい伽耶ちゃん」

使い魔に注意を向けていた雁夜は伽耶の声に答え返事をする。以前の出会った時よりも病人めいた表情が回復した彼は自然と微笑むことができるようになっていた。

「本当に唐突で申し訳ないんですけど……雁夜さん、昔私と会ったことはありませんか？」

覗き込むようにして首を傾げた伽耶はそう雁夜に尋ねた。瞳は何時になく真剣な色をしている。

「昔って、どのくらい前のことかな？」

「多分、七、八年前ぐらいのことだと思っんですが……」

の近くに公園がありますよね」

「う、うん。小さい頃に遊んでいたことがあるし、彼処の公園はこの歳になっても度々行っているよ」

公園という重要なキーワードが出てきたので、雁夜は公園であった出来事を記憶の中から掘り起こしていく作業を始める。といっても大体の内容は葵と凜、そして桜と出張から戻る度に再会したというものばかりだったため、それ以外の内容を掘り出すのに時間がかかっていた。

「まだその頃は眼鏡をかけていなくて、こんな感じだったんですけど」

掛けていた眼鏡を取り外しテーブルの上に置いた伽耶は大きく目を見開いて、子供の頃のようなクリクリとした目を雁夜に向ける。すると、彼の頭の中で既視感のようなものが生まれ記憶を刺激した。

『大事な …… ちゃったっ ……！

！どうしよう！？』

「！？」

ふと、幼い誰かの声が頭に鳴り響く。明らかに困っているような子供の声であったがまだ何か足りないピースがあるのかはつきりと聞こえてこない。額に手を当てて必死に思い出そうとした雁夜に伽耶は更なるヒントを与える。



「・・・実は、家の鍵を不注意で排水溝に落としてしまったんです。必死に自分で取ろうとしたんですがなかなか取れなくて」

『じゃあ、代わりにお兄さんが取ってあげるよ』

今度は聞き覚えのある・・・というより、まだ若かった頃の自分の声が聞こえた。これをきっかけに雁夜は自分が公園で関わった出来事の断片を完全に思い出す。

「　　そういえば、昔・・・泣いている女の子がいて助けてあげたことがあったような・・・」

「本当ですか！？で、でしたらこれを見てくださいっ！！」

決定的な証拠を突きつけて雁夜の記憶を呼び起こそうとする伽耶は切り札として今の今まで大切に持っている家の鍵を彼によく見えるように静かに置いた。鍵には一緒にステンドグラスで描かれた薔薇のキーホルダーがくっついて存在感を強く放っていた。

『大事なキーホルダーが見ついた鍵・・・落としちゃった・・・！！どうしよう！？』

それを目にした時、雁夜の七年ほど前の記憶が完全再生される。

出張の帰りに葵に会うためではなくふと理由もなくぶらぶらと立ち寄った彼は、久しぶりに見た景色をペットボトルのお茶片手に懐かしむように見ている。子供達の楽しい表情と動きは彼を和ませ仕事疲れを癒してくれるようだった。・・・しかし、そんな時ふと目に入った少女がいた。

その少女は排水溝の前に座り込み泣きじやくりながら必死に木の枝や手を入れてまで何かを取り出そうとしていた。余程大切なものなのだろうと思いつつ雁夜は少しの間見守っていたわけだが、日が暮れて子供達の姿が一人また一人と消えていく中で少女は肩を落として、涙が枯れるほど泣いた瞳をチラリと雁夜にと一瞬見せるとおぼつかない足取りで帰ろうとした。

見ても立つてもいられなかった雁夜は少女に声をかけ事情を聞き、初めてプレゼントされたキーホルダーが見ついた家の鍵を落としてしまったことを知った。そこで彼は持ち物の中で使えそうなモノを用いて何とか排水溝から取り出してあげたのだった。名前を互いにすることはなかったが、少女はその時助けてくれた男の人の姿と言葉はよく覚えていた。

「『自分じゃ出来ないからそこで諦めるっていうのはダメだよ。困っているならちゃんと助けを誰かに求めなさい』って、あの時雁夜さん言いましたよね。その言葉のおかげで私は諦めずに生きてこれました」

「じ、じゃあ君はあの時の・・・女の子だったのか……………」

雁夜がああの時の『彼』なのかは正直伽耶は不安だった。ただ似ている人なのかもしれないと思ったこともあった。しかし、もし『彼』ならばああの時のお礼をしつかりと言いたい。助けてもらった恩返しとして『彼』が悩んでいる事の力になりたいと彼女は強く思っていた。

「キャスターに雁夜さんと同盟を組むように言われたから接触した

わけではないんです。勿論半分はそうでしたけれど・・・もう半分は

それ以上言葉はいらなかった。雁夜が聖杯戦争の中で伽耶と出会えたことは偶然ではなく運命であつたのだ。七年前の偶然の出会いが生んだ運命の巡り合わせに雁夜はただ涙し、伽耶は改めて力になるうと決意を露にした。

キャスターの前に割り込んだバーサーカーの突然の介入によって、事態は倉庫街で起きた戦いと似たような緊迫した状態に陥っていた。

セイバーとの戦いで疲労しているであろうキャスターにとりわけ有効な宝具を持っているランサーは今度こそセイバーと共闘して敵のサーヴァントを討ち倒そうとしたいのだが、追い詰められたかと思えたキャスターはなんとバーサーカーと手を組んで二対二の形勢

を取り戻したのだった。おまけにバーサーカーの手には身の丈を超える程の大きさの大剣が握られており、掠りでもすれば重傷は免れないと思われる。しかし、それでもランサーとセイバーは怖気づくことなく冷静に問うた。

「・・・よもや、このタイミングでバーサーカーと手を組んでくるとは思わなかったぞ。こうなることは計算済みだったのかキャスター?」

「さあな、それは各々で勝手に予想してくれて構わない。言えることは・・・状況は刻一刻と変化していく、そうだろうか?」

「なるほどな。貴様とバーサーカーのマスターに何があつたかは知らんが、同盟を組まれたとなれば少々厄介だな」

その場限りの助太刀であるランサーとは違い、同盟を組んだ上での協力関係ならば連携の差があるに違いない。手負いの最優のサーヴァント・セイバーと二名の弱点を突く宝具持ちのランサー、互いに弱点が共通であり強力かつ油断がならないキャスターとバーサーカー。両組共に氷の大地を蹴り膠着した状態から抜け出すとそれぞれの獲物を手に相対すべき敵へと立ち向かっていった。

ランサーと相対したのはキャスターの宝具の一つである大剣を己の宝具と化したバーサーカー。宝具の効果を知らないランサーはただならぬ気配を感じつつも双槍を構え早くも打ち合いを開始する。しかし、バーサーカーはどうか剣の峰部分でしかまともに打ち合わず刃を一向に槍とぶつけ合おうとしない。しかし、それでも凄まじいほどの剣技は変わることなく発揮されていた。代わってセイバーはというと、引き続き氷系から雷系の戦闘スタイルへと戻したキャスターと相対しランサーのフォローを度々受けつつ打ち合い

を続けていた。無様な姿をこれ以上見せられないと意気込んでいるのかキヤスターの高速の斬撃を受け流し、攻守のバランスの取れた動きを彼女は見せる。

「雷の斧っ！！」

長杖を魔力で斧へと変化させたキヤスターの一撃。その重い一撃を地を上手く踏み込んで後ずさりながらも耐え抜いたセイバーは、瞬時に襲いかかる拳に身を低く保ち華麗に避けると足払いをするかのように剣を大きく振るう。風の余波を受けて脚を斬り裂かれたキヤスターは驚いた顔を一瞬見せたもののすぐに脚を接合し元の姿へと戻った。

「斬った手応えはあるというのに、斬られてなお無傷とは……  
・貴様、本当に人間か？」

「ああ、人間だとも。……少しばかり道を外れてしまったけどね」  
なるつもりはなくなってしまうた『人外』という存在。それがキヤスターの正体であり、一人の国王であった。意味深げな発言に眉を潜めるセイバーは心の内でキヤスターの動きについて考察する。

「（まるで雷の如く動きで……いや、雷そのものと言った方がいか。とにかく、隙が読めない。辛うじて動きについていくだけで精一杯だ。それに加えて  
）」

チラリと垣間見たランサーとバーサーカーの戦い。ランサーは破魔ゲイ・ジャルグの紅薔薇というバーサーカーの能力を封じられる長槍を最大限に用いて幾重にも剣戟を続けているが、未だにバーサーカーが握る大剣を弾き飛ばすまでには至っていない。バーサーカーはバーサーカー

で破壊力のある攻撃を容赦なく叩き込み森林を破壊してまでランサーを間髪容れずにしつこく狙っていた。大剣はもしかしなくとも恐らくキャスターの宝具であろう。でなければ、既に破壊されて折れているか目的通りに弾き飛ばされているはずだ。本来の持ち主がその場にいるから使い続けていられるのかもしれない。

キャスターも同じくバーサーカーの様子を伺っていた。彼には他のサーヴァントとは違って戦闘に対する制限時間がある。マスターの容態がまだ万全ではない為に彼は全力での競い合いを行うことができないのだ。それ以前にマスターの雁夜の身体が蟲によって蝕まれている以上、過度の魔力配給は最悪彼自身の現界を危うくする。マスターにまるつきり優しくないクラスのサーヴァントを何故雁夜に召喚させたのだとキャスターは間桐の真の当主『間桐臓硯』に対し怒りを隠すことができなかった。

「（次回の聖杯戦争に望みをかけていた臓硯にとって間桐雁夜は余興にしか過ぎないだろう。・・・ああ、記憶を思い出しただけでも腹が立つ！彼にバーサーカーを召喚させたのだからきつとステータスのパラメーターを上げるとか言つて、本当は嫌がらせなんだろう？）」

本気で勝ちに行くのならせめて単行動スキル持ちでマスターに優しいサーヴァントであるアーチャーを召喚させるべきなのだ。

何を間桐臓硯は聖杯に祈っているかは定かではないが、どのような願いであろうと誰かの人生を狂わせ苦しめ痛め続けるというのなら言語道断。どうしようもない『悪』として討ち滅ぼすだけである。キャスターは王となる以前からそうだった存在につけ狙われてきた。そして、悪の魔法使いと名乗る人物に本当の『悪』というものを教わり、鍛え抜いてもらった。だからこそ、彼の瞳には真に倒すべき

『敵』が視えている。

「（間桐臓硯・・・悪いが彼の運命をお前の好きにはさせない）」

バーサーカーがランサーと距離を置いたところで、キャスターは思考を戦闘のために戻し同様にセイバーの攻撃を振り払い一旦その場から退いた。

「・・・ここまでやりあって決着がつかないとなると、呆れるのを乗り越えて驚きだな」

未だ疲弊の色を見せぬランサーではあったが、流石に咳く声ばかりは苦々しかった。

勝負は一向にどちらが優勢か定まらない。騎士クラスのサーヴァン

ト二人が懸命に剣と槍を振るっているというのに、目の前の狂戦士と魔術師の英霊は互角にやり合うどころか隙すら全く見せないのだ。

「どうするランサー、二人はまだ戦えるようだぞ」

「・・・わかつているセイバー。奴らは普通に打ち合っていては倒せない相手だと改めて認識した」

セイバーの眩きを受けて、ランサーはやれやれと鬱陶しそうに溜息をつく。

「キャスターが己の身体に施している術は無効化したところですが同じ術を施されて元通りの状態にされる。加えてバーサーカーが手にしている宝具は打ち合っても解除される気配が一向にない。完全にそれぞれが俺の宝具の弱点をカバーしている」

このまま持久戦に持ち込むのは負けを意味すると、ランサーはセイバーに目で訴えた。それに対しセイバーも同感のようで意を決してランサーに提案した。

「・・・ランサー、このあたりで一か八か、賭けに出る気は？」

「根負けするようで癪だが、仕方がない。それ以上の手立てがない以上　良いだろう。乗ったぞセイバー」

その提案を待っていたかのように快諾したランサーは頷き返す。セイバーは狙ったとしても大して意味がなさそうなキャスターからバーサーカーへと視線を向けて狙いを定め、ランサーと自分の長所が活かせる戦術を計算していった。

そしてこころ一番の彼女の秘策を　直感<sup>けんこんいつ</sup>は“是”と判じた。乾坤一



椰、放つ価値は充分にあるはずだ。

「私がサポートに回る。ただ一度きりのチャンスだがランサー、風の中を突き進めるか？」

「む？ フフン、なるほど。造作もない」

セイバーの謎めいた言葉に、だがランサーは不敵に微笑んで頷いた。一度とはいえ、生死を賭して競い合った二人である。その時尽くした心技の全てを、両者は共に目に焼き付けている。セイバーというサーヴァントが為し得る技と、その意図するところを、今のランサーであれば申し合わせるまでもなく理解ができる。

「勝負を決めてくるか、良い判断だ……ランサー、こちら時間も押している。次で決めるぞ」

「……………」

身体を一度キャスターへ向けたバーサーカーは鋭い眼光はそのままに大剣を握り締め大きく構えをとった。さらにキャスターも詠唱を開始しセイバーと同一の役割を担った。両陣営が今宵の戦いに決着を付けんがために誰にも邪魔されることがない彼らだけの世界で身構える。

互いに息をゆつくりと吸い、耳を研ぎ澄ませ、目をしっかりと見開いた。

セイバーは、激せず、怯まず、ただ決然と静かな面持ちで右手の剣を振り上げる。揺るぎない眼差しが見据えるのは、ただ 掴み取るべき自分達の勝利のみ。騎士王は声高らかに、その誇り高き剣に一命を下す。

「風王鉄槌ツ！！」  
ストライク・エア

旋を巻く大気の直中に、閃き躍る黄金の燦然。

聖なる宝剣を守っていた超高压縮の気圧の束が、不可視の帳という縛りから解き放たれて　　さながら猛る龍神の咆吼の如く、轟然と送る。

ただ一撃にして必殺の秘剣。宝具『インヴィジブル・エア風王結界の変則使用。昨夜の対ランサー戦においては踏み込みの再加速のために放たれたこの超突風だが、敵に向けて撃ち放てば万軍を吹き飛ばす轟風の破碎槌となる。

今回はセイバー自身ではなく、ランサーを加速させるためにこれは使われるのだ。逆巻く気流の直中へと躊躇うことなくランサーは飛び込む。

「いざ　勝負ツ！」

それは超人的な体術のみならず、相方との阿叫あしんの呼吸の連携をもつてしか為し得ない絶技であった。だがランサーは、好敵手セイバーがただ一度だけ繰り出した“風の秘剣”を目に焼き付けていたことで、この奇跡的な連携をやったのけたのである。

渦巻く霧と疾風のトンネルを突き進み加速したランサーの勇ましい姿は、まさに一つの大槍であった。この際、間合いなど彼には関係ない。ただ目の前の敵を手に持った己の槍で突き刺すのみである。

「挟れ、『必滅の黄薔薇』ツ！」  
エイ・ボウ

喻り上げる黄色の穿孔。その刃先が目指すのはバーサーカーの体を覆う漆黒の甲冑。セイバーの切り札となる『エクスカリバー約束された勝利の剣』

を實質封じることになった黄槍は阻むものがない中でバーサーカーの左腕へと吸い込まれるように突き刺さった。その拍子にキャスターの大剣は手放され宙を舞った。

「やった!！」

セイバーは己の立案した策が成功したことに思わず声を漏らした。何しろ彼女はランサーが令呪によって敵対させられたせいで前回ともにバーサーカーを倒すことができなかったのだ。故に自身と同じように不治の呪いを背負うことになったバーサーカーへの攻撃の成功を内心喜んだ。しかし、そう簡単には上手くいかなかった。

「隙あり、だ」

宙を舞っていた大剣の持ち主たるキャスターはやつと自分の手に戻ってきた宝具を軽々と片手で握り締めると、一瞬の間にランサーの背後に回り彼が攻撃に用いなかった『破魔の紅薔薇』ゲイ・シャルクに向けて躊躇することなく振り下ろし、そして真つ二つに赤槍をへし折った。

「なっ!?!？」

瞬間移動とも言つべき速さに対応しきれなかったランサーは、己の愛槍の一つが折られたことに対し大きく目を開いて驚愕し啞然となった。また、セイバーもこんな展開になるとは思わなかったのか歓喜の表情から一変して口を開いていた。キャスターは大剣を虚空に

消し去ると今度は二つの扇を取り出しバーサーカーへと近づける。

「済まないなバーサーカー。わざと受けてもらって」

扇に光が集まり、バーサーカーが槍を受けた左腕へと粒子が降り注いでいく。・・・すると驚いたことに治らないはずの呪いの怪我が常識を覆して回復へと向かっていったではないか。決死の攻撃をなかつたことにされたランサーはもう笑うしかなかった。

「キャスター、まったく貴様はアーチャーよりもタチが悪いな。一体どれだけ奇妙な宝具を揃えている？」

「・・・フン、仲間の数だけと言っておこうか。今まで見せた以上のものはあるぞ。それでも具体的数は教えられないがな」

つまり、彼らに直接見せた宝具は三つ。最低でも三つはあるのだ。それ以上もあるとなると戦う度に戦法を変えられるということになる。アーチャーの宝具が量を重視しているのなら、キャスターは質を重視した宝具を取り揃えていると見ていい。決定打を無効化された以上、この戦いの勝者はキャスターとバーサーカーのコンビであった。負けたランサーとセイバーは騎士としてそれでも尋常な勝負を行えたことに対しどこか晴れやかである。

しかし、そうこうしていられる時間も彼らにはなかった。ランサーがふと、彼方にあるセイバーの拠点・・・アインツベルン城の方角を見据えると顔を顰めたのだ。

「ランサー、どうかしたのか？」

表情を変化させたランサーにセイバーは詰問するでもなく静かに問うた。彼の血相を変えた表情を見れば、何か事情があったのは一目瞭然なのはわかる。

「我が主が危機に瀕している・・・どうやら、俺を残してそちらの本丸に斬り込んだ末に何かあったようだ」

言いくそくに告白するランサー。セイバーも、それで何が起こったのかを立ち所に理解し、苦い感情に囚われる。

“ 結局・・・全て切嗣の思惑通りに運んだわけか・・・ ”

不本意極まりなかった。彼女とて奇策謀術をまるきり否定する気はない。だが切嗣が巡らす冷酷な罫は、騎士王が戦場に立つ上での譲れない信念とは、どうあっても相容れないものばかりだった。

「きつと私のマスターの仕業だ。・・・ランサー、急ぐがいい。己が主の救援に向かえ」

「僕も追撃はしない。バーサーカーが退いてしまったからな」

キャスターの言う通り、何時の間にも彼の傍らにいた黒騎士は姿をくらませていた。ここで争っても意味はないとキャスターは両手を肩まで掲げ首を横に降って宝具をしまい込む。

残った兩名に頭を下げるとランサーは霊体化し、森林の闇へと消えていった。

「で、どうするキャスター。まだ戦うか？」

最初の一対一の状態に戻ったことを確認した彼女は逃げるという選択肢を選ばず、難敵に立ち向かうことを決意し再び剣を握る。それに対しキャスターはというと、ランサーが向かった方向と同じ方向を見つめ戦う姿勢すら見せていなかった。

「・・・いや、それよりもいいのかセイバー。僕を遠見していた彼女・・・襲撃されているぞ?」

「何だと!?!」

森に張られた結界に干渉することに成功していたキャスターは、ランサーのマスターに何があったのか調べようと森中を隈無く調査していたのだが、その過程で遠見の水晶玉でキャスターを視認していたアイリスフィールを捕捉していたのだ。しかも、彼女を襲撃している相手はキャスターが危険視しているアサシンのマスター、言峰綺礼である。それ故に思わず彼はセイバーに知らせてしまった。

「嘘だと思っなら君の直感で調べてみるんだね。その間に僕は用事が出来たことだし退却させてもらっけど」

「あつ、待て!?!」

セイバーの返事を待たずしてキャスターは杖に腰掛け大空へと舞い上がり、木々の上を飛び越え去っていく。取り残されたセイバーは疑問に思いつつもキャスターの言葉の真意を確認するためにランサーと同じく城のある方角へと駆けていった。

「・・・何で僕はこう、お人好しなんだろうか。それが命取りになるって言うのに」

キャスターの瞳に似た瞳のような何かが手のひらの中で怪しく光り、強化された彼の眼の先にある光景へとそれはゆっくり向けられた。

「女よ、一つ問う」

万策尽きて立ち疎む銀髪の女に向けて、ゆっくりと歩み寄りながら、言峰綺礼は重く沈んだ声で切り出した。

彼女の護衛であるはずだった黒髪の女性・・・舞弥は、既に容赦なく完全に叩きのめされて濫褻布ほんまふのように地に伏している。もはや脅威にはならない。

「おまえたち二人は、衛宮切嗣を護るために私に挑みかかってきたようだが、それは誰の意志だ？」

「.....」

頑なに押し黙り何も話さないインツベルンのホムンクルスを、綺礼は片腕一本で喉笛を掴んで、軽々と宙に釣り上げた。彫像のように端正な美しい顔が苦悶に歪む。

「重ねて問うぞ、女。お前たちは誰の意志で戦った？」

綺礼の問いは、彼なりに切実なものだった。いったい誰が、衛宮切嗣へと至る道程にこんな詮無い妨害を仕組んだのか。その真相は彼にとって少なからず由々しい問題だったのだ。

一つ、もはや綺礼にも看破できたことがある。このホムンクルスの身体には、どこをどう探そうとも令呪などありはすまい。彼女はサーヴァントのマスターではない。今の軽率すぎる行動は、断じてマスターのものではない。となれば、真相はもつとも初期の段階で時臣が予見していた通り。やはり衛宮切嗣こそがセイバーのマスターなのだ。この二人の女達はただの駒でしかない。

さて、そこで件の問いが問題になってくる。

もし二人に綺礼を襲わせたのが、衛宮切嗣の命令ならば、流せる。単に綺礼が過小評価されていただけの話だ。女達は相手が悪かった。ただそれだけの話である。

或いは衛宮切嗣以外の司令塔がいたとしても、それもまた流せる。インツベルンの至上課題はマスターである切嗣を護ることにある。



そのためにはどんな犠牲も厭うまい。ただの時間稼ぎのためだけであるうとも人命を費やすことだろう。ただし、どちらの可能性にも共通した疑問が残るのである。

酸素を求めて喘ぐ銀髪の女の顔を、あらためて綺礼はしげしげと観察した。あまりにも美しく整いすぎた人形めいた顔。ルビーのような赤い瞳。肖像画として伝わる『冬の聖女』ことリズライヒ・ユステーツァに瓜二つな風貌。

このボムンクルスがマスターでなく、それでも聖杯戦争に参加している以上、まず間違いなくコレは『器の守手』の役を負った人形だろう。ならば彼女は彼女で、聖杯戦争の終盤における鍵となるべき重要な存在である。そんな駒を戦いの前線に立たせて危険に晒すというのは、ただの人不足では説明がつかない愚行である。ふと足首に妙な重さを感じて、綺礼は下を見下す。

あまりにも些細で、取るに足らない存在で、綺礼は意識すらしていなかった。さつきから低く地を這うように聞こえていた、弱々しく苦しげな喘鳴が、いつの間にか綺礼のすぐ足許にまで近づいていたことを。

満身創痍の黒髪の女が、震える腕を伸ばして綺礼の右脚を掴んでいた。握力は弱々しくても、今の彼女の渾身の力なのだろう。既に立ち上がることも、拳を固めることもできない。それでも憎しみに昏く燃える眼差しだけが、揺らぐことなく綺礼を凝視している。

「・・・・・・・・」

綺礼は無言のまま足を上げると、肋骨の碎けた女の胸に容赦なく踏み下ろし蹴飛ばした。もはや悲鳴も噴れた女は痛みを上げるこ

ともなく転がり、ただ肺から絞り出された空気の残りが、げえ、と無様な音を立てる。それでも女は睨みつけることを止めない。ただ恨めしげに憎悪がこもったような瞳で綺礼を凝視し続ける。綺礼は再び視線を転じ、宙に吊り上げた銀髪の女を見上げた。

呼吸を断たれ、苦しみに身悶えしながらも、ホムンクルスの表情に恐怖はない。ただそれだけならば不思議はなかった。ヒトならざる模造品の人形の存在ならば、死や苦痛を恐怖する感情などなくて当然である。　　が、それでは説明がつかない。ボムンクルスの赤い瞳は、紛れもない憎悪と怒りを込めて綺礼を見据えているのだから。ふと馴染みのある霊体の気配が、音もなく綺礼の傍らにまで忍び寄って来る。アサシンの念話の声が、綺礼の脳裏に直に語りかけてきた。

“ランサーとそのマスターが、揃ってこの森から抜け出しました。キャスターとバーサーカーも撤退したようです。程なくセイバーが駆けつけます。我が主よ、ここは危険です”

斥候を任せていたアサシンの報告に、綺礼は白けた落胆とともに頷いた。もはやこの場はどう足掻こうとも無駄である。真っ向からセイバーのサーヴァントに立ち向かっては勝機はない。むしろ今から退却したところで、無事に逃げおおせるかどうか危ういほどだ。

今から講じる策があるとすれば　　セイバーの追撃を阻むための足止めぐらい、か。綺礼は上着の下から新たな黒鍵を引き抜くと、何の躊躇もなく、まるで反物でも裁断するかのように無造作に、銀髪のホムンクルスの腹を串刺そうとしたのだが

それは叶わぬ願いとなった。

「ぐっ……!？」

自身をライトアップするかのよう上空から光が降り注ぐ。それもただの光ではない、彼の身体をギシギシと軋ませるような尋常ではないほどの重力が全身にかかっているのだ。鍛えられた身体を持つ綺礼でも流石にそれを生身で耐えきることはできないと判断し、防御姿勢を取るためにアイリスフィールドを無造作に手荒く投げ捨て強く地を踏み込んだ。

しかし、依然として底知れぬ重圧は取れる気配を見せず、それどころか余計に強まっている気すら感じる。逃れようと必死に身体を動かしてみるもうんともすんとも言わなかった。……もしや、衛宮切嗣の攻撃か　？　そう思った彼は首から上を何とか動かして光の正体をその目に焼き付けようとした。瞬間、彼は黒い渦のような球体に身を包まれそして

不自然にその場から消え去ってしまった。

その光景をうつすらと開けた瞳で見届けたアイリスフィールドは起き上がりつつ、居なくなつた彼のように遙か上空を見つめる。だが、そこには満天の星空が広がるだけで強烈な謎の光は何処にも存在していなかった。

そう、初めから何もなかったかのように……

駆けつけた騎士が到着するまで彼女は不気味なほど静かな森の中で  
呆然とへたり込んで座っていた。

余談だが、行方知れずになった一人の神父は三時間後・・・アイン  
ツベルンの森の中でただ一人倒れたまま見つかったという。

## ・NGシーン

ふと馴染みのある霊体の気配が、音もなく綺礼の傍らにまで忍び寄  
って来る。アサシンの念話の音が、綺礼の脳裏に直に語りかけてき  
た。

“ランサーとそのマスターが、揃ってこの森から抜け出しました。  
キャスターとバーサーカーも撤退したようです。程なくセイバーが

駆けつけます。我が主よ、ここは危険です”

斥候を任せていたアサシンの報告に、綺礼は白けた落胆とともに頷いた。もはやこの場はどう足掻こうとも無駄である。真つ向からセイバーのサーヴァントに立ち向かつては勝機はない。むしろ今から退却したところで、無事に逃げおおせるかどうか危ういほどだ。

今から講じる策があるとすれば　セイバーの追撃を阻むための足止めぐらい、か。綺礼は上着の下から新たな黒鍵を引き抜くと、何の躊躇もなく、まるで反物でも裁断するかのように無造作に、銀髪の本ムンクルスの腹を串刺そうとしたのだが

それは叶わぬ願いとなった。

「ぐっ・・・!？」

自身をライトアップするかのよう上空から光が降り注ぐ。それもただの光ではない、彼の身体をギシギシと軋ませるような尋常ではないほどの重力が全身にかかっているのだ。鍛えられた身体を持つ綺礼でも流石にそれを生身で耐えきることはできないと判断し、防御姿勢を取るためにアイリスフィールを無造作に手荒く投げ捨て強く地を踏み込んだ。

しかし、依然として底知れぬ重圧は取れる気配を見せず、それどころか余計に強まっている気すら感じる。逃れようと必死に身体を動かしてみるもうんともすんとも言わなかった。・・・もはや、衛宮切嗣の攻撃か　？　そう思った彼は首から上を何とか動かして光の正体をその目に焼き付けようとした。瞬間、彼は姿が掻き消える

ほどの光を浴びて

全裸になった。

「はっ？」

流石の綺礼も自分の身に起こった異常事態に動揺を隠すことができなかつた。構えていた黒鍵すら消えてしまっているのだ。女性二人が凝視していることに羞恥心を抑えきれなくなつた彼はアサシンを呼び戻すと適当に布を寄越せと命令し黒いボロ布を下半身だけに巻きつけた。だが、その間にも女性達は目の前の変態に対し、言葉にならない悲鳴を上げ助けを求めていた。

「へ、変態よ                   ！！切嗣ーっ！！セイバーーっ！！」

生涯、見るのはただ一人の・・・夫のものだけだと思っていた彼女にとつて見たくもない他人のそれはケダモノのそれだった。女性を代表して彼女はたとえ自分がホームンクルスであろうとも抗議の言葉を口にし、矢継ぎ早にその辺にあつた石を適当に綺礼へ向けて投げ始める。

「寄るなっ！！汚らわしい！！」

「くっ・・・や、やめ」

防弾装備すらない状態で、というか無防備状態で石をぶつけられる

綺礼。必死に避けるも時間はただ過ぎていく。このままではセイバ  
ーが駆けつけ彼は変態として聖剣の錆にされてしまうであろう。こ  
れを危惧した彼は問答無用で強行突破すると迷える森の中へ走って  
逃げていった。

「あ……間違えて『脱げビーム』を発射しちゃった……」

額から冷や汗を出しながらキャスターはスタコラと森を抜けて、自  
宅へと帰っていった。

なお、綺礼は帰りに誰かに目撃されたようで警察に通報されて半ば  
泣きながら教会へと舞い戻ったという。

act・10 天は彼の者を見放す（後書き）

・ハマノツルギ

制限がかかっている宝具。理論上では英霊すらも座に還すことが可能だが、そんなことをすれば聖杯戦争など終わってしまうため宝具の無効化と破壊のみ可能。バーサーカーは真の力を隠すために峰打ちを繰り返した。

・B・C・T・L（強制時間跳躍弾）

3時間後の世界に対象者を強制転移する、ネギま世界の真祖すら脱出不可能な弾。今回は空飛び猫にレーザー化した状態で装填されて綺礼に放たれた。

・二一三〇式超包子衛星支援（ニイチサンマルしきチャオパオジーサテライトサポート）システム「空とび猫」アル・イスカンダリア

猫型のラブリーな形状の衛星砲。手に持つ猫型のレーザー照準装置で狙いを定め、本体の衛星から超高威力のレーザーを放つ。なお、レーザーの効果は変更可能。キャスターの戦略兵器。使いどころが難しいのが難点。

・逃げビーム（NGシーンより）

麻帆良の文化祭で「逃げ女」伝説を作った拳句、多数の男女を脱がせに脱がせまくった悪魔のビーム。これを本編で使うわけにはいかなかったのだ・・・by作者



至らない点もございますが、次回もお楽しみに。

そして一言、私の心は発砲スチロール並みの強度です（どやっ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5616z/>

---

Fate/zero justice to justice

2012年1月4日10時52分発行